



Title	広東語の文末助詞
Author(s)	飯田, 真紀
Citation	University of Tokyo. 博士(文学)
Issue Date	2005-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32906
Type	theses (doctoral)
File Information	thesis.pdf



[Instructions for use](#)

広東語の文末助詞

飯田 真紀

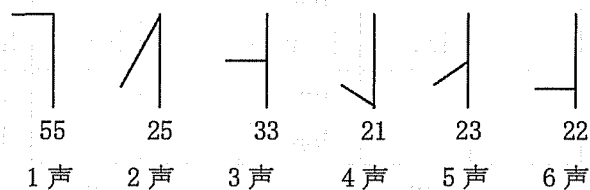
東京大学大学院人文社会系研究科博士論文(2005)

例文注釈で用いられる用語の簡略表記

CL	classifier	類別詞
SP	sentence-final particle	文末助詞
intj	interjection	間投詞
pref	prefix	接頭辞
suf	suffix	接尾辞
VP	verbal phrase	動詞句
NP	nominal phrase	名詞句

*その他個別の意味機能は[]で括って示す。

声調調値



イエール式発音記号の IPA 転写*

音節は音節頭子音(=声母)と残りの部分(=韻母)とに分けられる

◆ 声母

- b[p] p[p^h] m[m] f[f]
- d[t] t[t^h] n[n] l[l]
- j[tʃ] ch[tʃ^h] s[s]
- g[k] k[k^h] h[h] ng[ŋ]
- gw[kw] kw[k^hw]
- y[j] w[w]

* 声母と韻母の IPA 転写方法は吉川 2001 のものを踏襲した。ただし、一部の非主流な音節の IPA は掲げていない。

◆韻母

a [a:]	aai [a:j]	aau [a:w]	aam [a:m]	aan [a:n]	aang [a:ŋ]	aap [a:pˊ]	aat [a:tˊ]	aak [a:kˊ]
	ai [ej]	au [ew]	am [em]	an [en]	ang [eŋ]	ap [epˊ]	at [etˊ]	ak [ekˊ]
e [ɛ:]					eng [ɛ:ŋ]			ek [ɛ:kˊ]
	ei [ej]				ing [eŋ]			ik [ekˊ]
i [i:]		iu [i:w]	im [i:m]	in [i:n]		ip [i:pˊ]	it [i:tˊ]	
o [ɔ:]	oi [ɔ:j]			on [ɔ:n]	ong [ɔ:ŋ]		ot [ɔ:tˊ]	ok [ɔ:kˊ]
		ou [ow]			ung [oŋ]			uk [okˊ]
u [u:]	ui [u:j]			un [u:n]			ut [u:tˊ]	
eu [œ:]					eung [œ:ŋ]			euk [œ:kˊ]
	eui [øɥ]			eun [œn]			eut [øtˊ]	
yu [y:]				yun [y:n]			yut [y:tˊ]	

*このほかに成音節子音の[m]、[ŋ]がある。

[例] ge3 [kɛ:ˊ˩] jyu6 [tʃy:˩˩]

*イエール式は本来は声調記号とhを用いて声調の種類を表すが、本稿では数字によって上述の第1声から第6声までの声調の種類を表す。

目次

第1章 序論.....	1
1. 導入.....	1
2. 先行研究.....	1
2.1. 初期の研究.....	1
2.2. 包括的分析.....	2
2.2.1. Kwok 1984.....	2
2.2.2. 梁仲森 1992.....	3
2.3. 会話分析.....	4
2.4. 音韻論・統語論的アプローチ.....	6
2.5. 認知言語学的アプローチ.....	7
2.6. その他.....	8
3. 問題の所在.....	8
4. 論文の構成と概要.....	9
第2章 文末助詞の全体像.....	12
1. はじめに.....	12
2. 文末助詞の機能.....	12
2.1. 会話文への出現.....	12
2.2. テキストの指標付け.....	14
3. 文末助詞の下位分類.....	16
3.1. はじめに.....	16
3.1.1. 文末助詞の音声・音韻的特徴.....	17
3.1.2. 文の類型について.....	18
3.2. 具体的分析.....	20
3.2.1. 周辺のな類——A類.....	20
3.2.2. 多様な形態を持つ類——B・C類.....	22
3.2.2.1. B類 g.....	22
3.2.2.2. C類 lとj.....	22
3.2.3. 最後尾に位置する類——D類.....	23
3.3. その他の問題.....	23
4. 2章のまとめ.....	24

第3章	A類	コト目当ての類	26
1.		はじめに	26
2.		コトの時間的あり方——住と嚟	26
2.1.		住	26
2.1.1.		アスペクト助詞“住”	26
2.1.2.		文末助詞“住”	29
2.2.		嚟	32
2.2.1.		先行研究の分析と問題点	32
2.2.2.		NP嚟	35
2.2.3.		VP嚟	37
2.3.		まとめ	41
3.		コトとコトの関係——添と先	41
3.1.		添	41
3.1.1.		モノ・動作の追加	42
3.1.2.		コトの追加	43
3.2.		先	46
3.2.1.		先の意味	47
3.2.2.		疑問文+先	49
4.		3章のまとめ	50
第4章	B類	命題の一般化	51
1.		はじめに	51
2.		g-と“嘸”の区別——多機能の“嘸”	51
3.		文末助詞g-の意味機能	54
3.1.		命題の一般化	54
3.2.		命題の一般化の動機——疑問文を例に	55
3.2.1.		脱個人化——普遍化志向	56
3.2.2.		脱一回性——恒常性志向	57
3.3.		まとめ	58
4.		4章のまとめ	59
第5章	C類	事態に対する見立て	60
1.		はじめに——形式の整理と先行研究	60
2.		l-の意味機能	62
3.		j-の意味機能	66

3.1.	尺度上での位置付け	66
3.2.	j-の多様な用法	68
4.	l-とj-の類似点・相違点	70
5.	5章のまとめ	73
第6章 D類 言表内容の差し出し方		
1.	はじめに	74
2.	発話内容の種類	74
2.1.	a3 と wo3 —発信者側から—	76
2.1.1.	文中挿入と呼びかけ	76
2.1.2.	疑問文への生起	78
2.1.3.	認識変化の有無	80
2.1.4.	まとめ	83
2.2.	a4 と wo5 —受け手側から—	84
2.2.1.	a4	84
2.2.2.	wo5	88
2.2.3.	<声>と<情報>の違い	90
3.	聞き手依存の発話方式	91
3.1.	聞き手情報保持状態配慮	91
3.2.	la1	94
3.2.1.	聞き手の同意要請	94
3.2.2.	命令文	97
3.3.	alma3	98
3.4.	その他	100
4.	認識判断的ムード	100
4.1.	gwa3	100
4.2.	me1	101
4.3.	ge2	103
4.4.	その他	104
5.	行為実行的ムード	105
6.	6章のまとめ	108
第7章 結論		
1.	はじめに	110
1.1.	各類の位置付け	110

1.1.1.	A類	110
1.1.2.	B類・C類	111
1.1.3.	D類	115
1.2.	全体の枠組み	116
2.	今後の展望	118
2.1.	他の文法的カテゴリーとの接点	119
2.2.	音韻的・音声的手段との接点	121
	参考文献及び例文出典一覧	123

第1章 序論

1. 導入

近年、中国語の文法研究においては、広東語を含む中国語諸方言についての研究がますます重視されるようになってきている。また、言語理論の発展に伴い、中国語各方言の文法研究の手法そのものにも従来から比べると大きな進化が見られ、かつてない盛況を見ている。

このような現況にあって、中国語諸方言に広く共通して見られる文法カテゴリーである文末助詞については、最も研究レベルの高い標準語(普通話)においてすら、見るべき成果が少なく、活発な議論が行われていない。他方、広東語は文末助詞が特に豊富であり、非常に重要な文法カテゴリーとして位置づけられる。そこで本稿では、広東語の文末助詞の体系的分析を行い、中国語研究及び一般言語学理論への貢献を目指したい。

2. 先行研究

広東語の文末助詞に対しては早くから関心が寄せられ、包括的な研究が行われてきており、他の中国語方言よりもむしろ研究が進んでいるとさえ言える。

そこで、まず広東語の文末助詞を専門に取り上げた主な先行研究の成果を検討し、文末助詞研究の問題点の所在を明らかにしたい。なお、先行研究では本稿の言う「文末助詞」は“utterance particle”、“sentence-final particle”など、それぞれアプローチの違いから異なった呼ばれ方をしている。本稿では文末助詞という名でこれらのものを指す。

2.1. 初期の研究

広東語の文末助詞に全面的に取り組もうとした早期の研究には Yau 1980 がある。ここでは文末助詞は「説得」、「疑念」といった文の言外の意味(connotation)を表すための手段であると見なされ、英語におけるイントネーションのような役割を果たすものと考えられている。そして、“唱”「歌う」という動詞だけからなる命題に、様々な文末助詞及び複数の文末助詞の組み合わせを付加し、多数のインフォーマントに語感の聞き取りテストを行うことによってその結果を数量的に分析している。テスト内容は、一つ目は文末助詞が付加されたことにより、文全体が述べ立ての文(statement)と感じられるか、問いかけの文(question)と感じられるか、或いは中間的かということ問う。二つ目は同じく文末助詞が付いた文に、「なだめすかし」、「驚き」、「ためらい」などといった12の語気のうちどれがどのくらい感じられるかということを探る。分析の結果は本人も認めているように成功したとは言いがたい。その原因の一つは、単独の文末助詞及びその組み合わせからなる複合形式を、文法的振る舞いの差を無視して、一律に同レベルで扱おうとしたところにある。また、テスト項目の妥当性についても明らかに問題がある。このように文末助詞の意味はしばしばそれが現れる文脈の意味と混同して考察される傾向があり、そのような傾向は最

近の研究においてすら見られる。

2.2. 包括的分析

2.2.1. Kwok 1984

文法的特徴を中心に据えて文末助詞の包括的記述分析を目指した研究の最も早いものは Kwok 1984 である。この研究の特徴は、平叙文、疑問文、命令文という文類型別の文末助詞の生起状況に着目したところにある。すなわち、個々の文末助詞について、命題の文類型を変えることなく付加され得るかどうか検討し(Kwok 1984:20)、その上で 3 つの文類型別に個々の形式の意味を記述している。Kwok 1984 はこれら 3 つの類の他に、あるいくつかの形式については文を平叙文から疑問文に変える働きを持つ類として、「疑問文助詞」(interrogative sentence particles) というカテゴリーを別に立てている。

このように合計 4 つの類の枠組みにおいて 30 個の基本形式の生起状況を記述しているのだが、各文類型にどのような文末助詞が現れるかを平面的に列挙するに留まり、その生起状況が意味するところについての解釈はなされていない。また、Kwok 1984:9-12 では複数の形式の連用現象について、どのような順序で組み合わせたりその結果どういった音声形式を取るのかという統語的・音韻的な特徴に言及しているものの、パラダイグマティックな関係にある諸形式の意味的共通点には言及がないため、体系性に欠けた平面的な分析になっている。

さらに、平叙文を疑問文に変える働きを持つという、第 4 のカテゴリー「疑問文助詞」は Kwok 1984 の描く文末助詞体系の中では異質な存在となっている。初めの 3 類は構造的な特徴から定義される文類型を根拠にした分類であるのに対し、この類だけは意味的な根拠に基づいた分類だと思われるからである。すなわち、「疑問文助詞」が付加された文について、意味的な理由のほかにどういう文法的な根拠からそれが疑問文と見なせるのかという点が何も論じられていないため、この類に属す形式の認定には恣意的なところが見られるのである。実際、疑問文助詞とされる形式の一つ “la3wo3” については、後に Luke 1990:256 によってその妥当性を疑問視されているように、疑問文を構成しているとは見なし難い実例がある。¹例えば以下の例では la3wo3 を付けた文は疑問文とは見なせない。

(1) 蔣生:羅拔圖 响 邊 a3?²

ロバート いる どこ SP

[ロバートはどこ?]

¹ 以下の各章で文末助詞の個々の形式を書き表す際には一部の形式を除き漢字表記をしないでローマ字表記を行う。ローマ字表記の方法はイェール式を基にするが、声調記号と声調の高低を表す h を用いず、声調は数字で表す(声調の数字は広く通用している呼び名を用いる)。本文中や例文注釈部分で用いられる用語の簡略名称及び声調調値並びにイェール式ローマ字表記の IPA は巻頭に掲げた。

² 広東語の漢字表記は香港で通用している中国語繁体字及び広東語方言字を用いる。例文については()で括って出典を記したものを以外は作例である。出典の一覧は末尾に掲げる。広東語は基本的に話し言葉であるため、文字で書き写す場合の表記方法には個人差が大きい。そのため、例文引用の際には全体の統一をとるため原文の漢字表記を改めることがある。

芝: 哦! 羅拔圖 冇 做 呢度 la3 wo3。

intj ロバート 無い する ここ SP SP

[ああ。ロバートはもうここをやめましたよ。]

蔣生: 冇 做? (903:87)

無い する

[やめた?]

しかし、個々の文末助詞が付けられる文の構造から分類を行い、文末助詞の現れる文法的環境を明らかにしたことは注目に値する。Kwok 1984 の研究は、文末助詞の意味を捉える際には文類型との相関関係を考慮する必要があることを示している。

2.2.2. 梁仲森 1992

文末助詞の体系を捉えようとした包括的な研究として梁仲森 1992 にも言及しなければならない。これは Gibbons 1980 がサールの 5 つの発話行為 (speech act) の枠組みを一部の広東語文末助詞の分析に修正応用したのを引き継ぎ、文末助詞全体を発話行為の枠組みで分類しようと試みたものである。³梁仲森 1992 は文末助詞の連用規則を根拠に、統語的位置の異なる以下の 6 つの下位類を帰納し、それぞれが異なる発話行為を表すと見なした。

1. 「陳述表現の行為」(“嚟”、“住”)
2. 「即時表現の行為」(“先”、“添”)
3. 「実況表明の行為」(ge3)
4. 「変化制限表現の行為」(la3, je1)
5. 「明白事態表現の行為」(“添”、alma3 など)
6. 「純感情表現の行為」(a4, me1, wa2 など)

1-6 の類の構成員は前のものほど先に位置し、同じ類の構成員どうしは共起しない。

梁仲森 1992 は発話行為の名の下に分析を行っているものの、実際には当初サールが提案した発話行為類型とは程遠い異質なものとなっており、果たして発話行為というラベルを貼ることが妥当かどうか疑問である。しかしながら、文末助詞体系の記述としてはむしろ現実に即したものとなっている。

何よりも、各形式の統語的特徴を連用規則に基づいて明らかにし、その上で互いにパラダイグマティックな関係にある形式を類として帰納し、それぞれの類に共通の意味特徴(言語行為特徴)を与えたことの意義は大きい。この点は Kwok 1984 では看過されていた。

しかしながら、同時に問題も多い。一つは、たとえ同一の形態を持つ形式であっても意

³ Gibbons 1980 は文末助詞の機能を、発話行為 (speech act) を果たすものとして Searle の示した 5 つの発話行為のうち、広東語の文末助詞の機能に適用できるものとして「表明」(representative)と「指示」(directive)のみを取り上げている。「表明」とは「言明」(assertion)に相当し、「指示」は「命令要求」(mand)と「問い」(question)とに下位分類されるとし、15 の単独の文末助詞、及び 5 種類の複合的文末助詞について、その 3 つの発話的機能のうちどれが顕在化しており、それぞれ返答への期待度はどのぐらいの強さか、などといった項目に付いて検討したものである。

味の違いから同音異義形式であるとする点である。多い場合は一つの形式に7つもの異なる意味を認めているが、同音異義形式と判断するための根拠が全く意味的で、文脈の意味を取り込んだ結果の恣意的な判断としか言えない。さらに、せっかく統語的特徴から6つの分類を建てておきながら、明らかに同一形式と見なされるものを意味の違いからわざわざ別の類に分属させている点は理解に苦しむ。

もう一つの欠点は、統語的特徴に大きな注意が払われている一方、Kwok 1984 が指摘する文末助詞と文類型の相関関係には無頓着な点である。というのは、本稿で後述するように梁仲森 1992 は文末助詞の体系記述における文類型という概念の有効性に疑念を抱いているからである(梁仲森 1992:62)。その結果、統語的には最後尾に位置する特徴を持つという第6の類に、70個にも及ぶ大量の形式が平面的に帰属させられているなど、それ以上の有効な分類手段を見出し得ないでいる。

しかし、連用という統語的特徴をもとに文末助詞の体系を描き出そうとした試みは非常に有益で、2章で取り上げるように、本稿で帰納して得られる文末助詞全体の枠組みと似通った点が多い。ただし、梁仲森 1992 による各類の意味機能の説明にも再検討の余地がある。

2.3. 会話分析

構造主義的手法や、発話行為的アプローチを含む先行研究のどれもが文末助詞の本質を捉えるのに成功していないことに不満を覚え、社会学の一派であるエスノメソドロジーの分野で発展してきた会話分析の手法を用い、生の日常会話を材料に文末助詞を取り上げたのが Luke 1990 である。この研究では文末助詞を、「会話」という社会的行為において、参加者が会話という相互行為(interaction)上の問題を処理するために用いる道具立ての一つとして捉える。⁴ Luke 1990 は文末助詞に対して中心的・固有の意味や、意味論的ないし語用論的特徴を見出そうとはしない。エスノメソドロジーの主張に従い、自然言語のあらゆる表現はダイクシスのように指標的(indexical)であり、個別のコンテキストに応じて意味が与えられると考えるのである。そこで、文末助詞も discourse-deictic な性質を持つという立場から考察が進められる(Luke 1990:39-45)。

Luke 1990 は様々な具体的コンテキストにおける使用を観察し、la1(啦)、lo1(囉)、wo3(嗚)という3つの文末助詞が、それぞれ、「共通基盤の確立」、「終了の達成」、「注目に値すること(noteworthiness)をハイライトする」といったような一般的性質を持つことを明らかにした。

ただし、文末助詞の研究としてはいくつか不十分な点が見られる。

まず第一に文末助詞が会話において生じる様々な相互行為の問題を処理するプロセスに

⁴ このような捉え方は例えば日本語のフィラー「あのー」について、会話分析の立場から西阪 1999 がそれを「相互行為を組織するために利用可能な資源でありうる」とみなしているのと同種のものと考えられる。

第1章 序論

貢献しているという主張である(Luke 1990:280)。この3つの文末助詞は、「受け手に合わせたデザイン」⁵ (recipient design)、「シークエンス(会話の連鎖)の組織化」(sequential organization)や「トピックの組織化」(topic organization)などの会話の組織化において一定の貢献をするというのである。例えば、la1には「じゃあ」、「さよなら」といった、会話の終結部の前に現れる前終結(pre-closing)というシークエンスに広く現れるという観察が得られる(Luke 1990:102-110)。しかし、そういった発話に出現するla1が前終結に特別な役割を果たしていると言えるのかどうか疑問である。Luke 1990 自身105ページ下で述べるように新しい話題を何ら提供せず、会話参加者の間で一度取り決められた約束事を再確認することは、会話を終結に導く手段としてしばしば使われることが知られている。

(2) L: 好 aa, 好 aa。 ha, .. 咁 我 可以 聽日 同 佢 講 ←—— a

はい SP よい SP はい では私 できる 明日 に 彼女 話す

[OK. わかった、じゃあ私が明日彼女に話してみる。]

P: 好 aa。

よい SP

[うん。]

L: [咳払い] 好 aa。

よい SP

[そうだね。]

P: 你 有 時間 就 俾 個 電話 佢 la1。 ←—— b

あなた ある 時間 与える CL 電話 彼女 SP

[時間があったら彼女に電話してみて。]

L: ha, ha, 我 聽朝 打 俾 佢 (Luke 1990:105-106)⁶

はいはい 私 明朝 かける に 彼女

[うん。明日朝彼女に電話する。]

この例ではPの二つ目の発話(b)は、一行目のLの発話(a)とほぼ同じ内容を言い換えたものであり、何らの新しい話題提供もしていない。そのことにより、会話参加者は終結への移行段階にあることが示されるという。文末助詞la1はLuke 1990によれば「共通基盤の確立」であるから、往々にして会話の終結といういわば共同作業的な行為の途上に出現することは理解に難くない。ただし、こういった発話(b)こそが会話終結へと導くように組織化する働きを担うと考えられ、文末助詞がその作業に直接貢献しているとは言い難い。結局のところ、文末助詞は発話に粘着する要素なのであり、それそのものが会話の組織化に直接寄与する標識であるとは考えにくい。

⁵ 会話分析の術語の日本語訳は好井ほか1999を参照した。

⁶ Luke1990の例文は全てローマ字表記で会話分析のトランスクリプトが用いられているが、ここでは漢字表記を行い、オーバーラップ“[xxx]”やポーズ“(.)”などのトランスクリプトの記号は当面の議論とは関わりが薄いので省いた。

そもそもこのように文末助詞が会話の組織化において果たす役割を過大評価してしまうと、文末助詞が付けられた個別の文が表す意味を文末助詞自身の意味に取り込んで記述してしまった先行研究と、結局は同様の結果を生み出してしまうことになりかねない。実際、例えば 1o1 の一般的性質についての分析はそういった側面が強く感じられる。

ただ、特定の文末助詞が特定の種類の会話連鎖に多く生起するという事実は、文末助詞の意味・機能を考える上で大きな手がかりになるのは確かである。それは例えば特定の文末助詞が特定の文類型にのみ出現するとか、或いは特定の否定詞や副詞とは共起しないなどといった、文レベルでの文法的振る舞いと平行するものであり、談話というレベルでの文法的振る舞いと言っても差し支えない。したがって、個々の文末助詞の意味分析は、特定の会話連鎖における生起の特徴をも同時に説明できなければならない。

Luke 1990 のもう一つの大きな問題は、果たしてこの3つ以外の文末助詞の振る舞いもこの方法で効果的に説明され得るか、という点である。Luke 1990:17-18 では膨大な数に上る文末助詞の全てを取り上げてみても良好な結果は得られないとの見通しから、3つの文末助詞を取り上げたことが述べられているが、なぜ特にこの3つだけが選ばれたのかは明らかでない。

結果的に見れば Luke 1990 が会話分析の方法でこれら3つの助詞を取り上げたのは、全くの偶然ではないと思われる。この三つの助詞は、本稿6章で述べるように、同じ類に属し共通の意味特徴を持つと考えられるからである。したがって、会話分析の手法はこれら3つの文末助詞の分析には一定の説明力を持つかもしれないが、その他の文末助詞についても応用がきくかどうかは甚だ疑問である。そもそも Luke 1990 はこの3つだけをほとんど無条件に分析対象として定めており、文末助詞というカテゴリーにおいてこの3つがどのように位置づけられるのかが呈示されないままになっている。それでは文末助詞の一般的性質を論じる根拠に乏しいと言わざるを得ないのである。

しかしながら、文末助詞が日常会話に特有なものであり、日常会話における偏在を考えるとなしには、文末助詞の性質は明らかにならないという認識が重要なことは疑いがない。

2.4. 音韻論・統語論的アプローチ

以上のいくつかの研究方法とは大きく重点の置き方が異なる研究として、Law 1990 に言及しておきたい。これは広東語の文末助詞の音韻的・統語的現象に専ら注意を払った研究である。この研究ではGB理論の枠組みを用いていくつかの文末助詞の統語論的分析を行い、文末助詞の連用の規則や文末助詞相互の共起制限を説明しようとする。

Law 1990 で展開される形式主義的アプローチの議論の詳細が妥当かどうかを検討することはできないが、言語事実と符合しない点がいくつか指摘できる。例えば Kwok 1984 の言う「疑問文助詞」という類をそのまま援用している。しかし、本人が指摘するようにこれらの「疑問文助詞」は肯定と否定とを並べて構成される正反疑問文と異なり、埋め込み節の中

に起こり得ないという文法的な特徴の他に、意味的にも異なった特徴を持つ(6章 2.2.1.で一部触れる)。このような疑問文助詞と正反疑問文との文法的振る舞いの相違及び意味的相違を軽視した議論がどれほど有効であるか、非常に疑わしい。

Law 1990 はまた、文末助詞の音声的特徴として声調の役割に注目し、声調の持つ特徴だけを取り出して声調助詞 (tonal particle) として設定し、分節的助詞 (segmental particle) との組み合わせにより各個の文末助詞が生成されることを提案した。Law 1990 が設定した 3 つの声調助詞は各形式の表層の現れに基づいたものではなく、上音域かつ高調 (upper register and high tone)、低調 (low tone)、高調 (high tone) という抽象的なものである。そしてそれぞれ、聞き返し助詞 (echo question particle)、強め (strengthener)、弱め (weakener) の機能を持ち、分節的助詞の表す概念に作用するのである。しかし、強め、弱めというのはあまりにも抽象的すぎ、果たして説明になるのかどうか疑わしい。また、聞き返し助詞を含む形式には、聞き返しと意味的関連が希薄なものが含まれているという問題もある。しかしながら、文末助詞全体を声調の持つ役割に着目し、体系的に捉えようとする視点は大いに参考にされるべきである。

2.5. 認知言語学的アプローチ

他方、各文末助詞の多義性を意味拡張や語用論的推論によって説明し、文末助詞全体の枠組みを整理しようとした Fung 2000 は、文末助詞に対して認知言語学的アプローチをとった研究であると言えよう。この論文は多くの文末助詞が Z-, L-, G- という 3 つの声母を共有することに着目し、25 個の助詞をこの 3 つの声母を共有する助詞家族 (particle family) に分類し、それぞれの助詞家族に共通の中心的意味特徴を探ろうと試みる。

それぞれの助詞家族に属する各形式は、互いに同じ家族に属する他の成員と区別するに足りるだけの弁別的・機能的な素性 (prime) の束によって特徴付けられている。一例を挙げると、Z グループのメンバーの一つ、*zaa5* については以下の 5 つが提案されている。すなわち [-propositional], [+exhortative], [+temporal], [±H-participate], [-epistemic] である (Fung 2000:72)。このような素性は同じグループのメンバーどうしを区別できさえすればよいので、必要最小限を抽出すればよい (Fung 2000:22)。

Fung 2000 にはいくつかの大きな問題が見られる。まず、同じ声母を共有する形式をグループにまとめ共通の意味を見出そうとする反面、Law 1990 や梁仲森 1992 が示したような文末助詞のシンタグマティックな側面が捉えられていない。したがって、Fung 2000 の 25 個の形式には他の研究では複合形式と見なされるものや、異なる統語的位置を占めるものが雑然と含まれている。このように違うレベルの形式を同一の平面に並べ、弁別的な素性を用いて区別してみたところで、どれほどの意義があるのだろうか。実際、素性として用いられる特徴は個別の形式と形式との区別に役立つような場当たりの説明が多い。

また、モダリティ (義務的用法と認識用法との区別)、発話行為理論、語用論など、異なる基盤に根ざした概念が、あたかも同じ平面にあるかのように、弁別的素性として個別の

形式の特徴づけに取り上げられている点にも疑問を感じる。

しかしながら、Fung 2000 の評価される点は、それぞれの形式が表面的に持つ多義性を意味拡張の観点から統一的に捉えようとしたところで、個別の形式の意味分析にはそれが生かされた部分もある。

2.6. その他

以上が広東語の文末助詞に対する包括的研究の主だったものである。

このほか、鄧思穎 2002 にも文末助詞の2分類が提案されている。この2類は統語的振る舞い及び意味を根拠にして分けられたもので、第1類は時間やフォーカスを表し、それに後置される第2類はムード(語気)を表すという。しかし、第1類の中にもさらにシンタグマティックな関係にあるものも指摘できるため、包括的な体系分析とはなっていない。

また、最近では方小燕 2003 が包括的な記述を試みているが、多数の形式を平面的に羅列するに留まり、従来の研究の水準を超えるものではない。

以上の体系的な分析を目指した研究の他に、個別の形式を取り上げて論じた研究も散見するが、それらについては各形式の機能を論じる箇所と言及する。

なお、広東語以外であるが、日本語の終助詞を体系的に分析した佐治 1957 や、中国語の文末助詞を連用規則に基づいて体系化させた上神 1968 は、後述する本稿での文末助詞の体系的分析にとっても参考にされるべき点を多く含んでいる。

3. 問題の所在

このように、広東語文末助詞の研究は様々なアプローチで取り上げられ、研究の蓄積も決して少なくはない。それにもかかわらず文末助詞という文法カテゴリーの全容を捉えるまでには至っていない。

その原因の一つは、そもそも文末助詞とはどういう機能を果たす文法カテゴリーであるのかということについて、理解が一致していないためである。文末助詞は従来よりきわめて捉えどころのないカテゴリーと見なされてきた。例えば、梁仲森 1992 は発話行為(speech act)を表すとし、Luke 1990 は会話の組織化(conversation organization)を行うと見なすなど、そのカテゴリー全体の機能について様々な見解の違いが見られる。

第二の問題点として、先行研究では文末助詞の体系性が十分に捉えられていないことにある。Kwok 1984 が詳述するように文末助詞の中には特定の文類型にきまって出現するものがある。また、梁仲森 1992 や Law 1990 が指摘するように、複数個の文末助詞が組み合わさって用いられる場合、その統語的順序には一定のきまりがある。つまり、数十個にも上ると言われる文末助詞は、みなひとし並みに同じ平面に位置づけられるわけではない。そこにはシンタグマティックな関係とパラディグマティックな関係によって構成される一つの体系が存在している。また、カテゴリー全体の中には文法的振る舞いの異なるいくつかの下位類が見い出される。このような体系性に着目しなければ、文末助詞の分析は意味の

第1章 序論

あるものにはならない。たとえ、いくつかの個別の形式を選び出して議論するにせよ、それらがカテゴリー全体の中でどのような位置にあるのかが明確にされていなければ、カテゴリー全体の理解への一助とはならない。

このような問題意識から出発し、本稿では類全体の性質および類内部の体系性の解明を通じて、文末助詞というカテゴリーの全体像を描くことを最終目的とする。ただし、2章以降で詳述するように、文末助詞は他の文法カテゴリーと異なり、文法的要素だけでなく音声・音韻的要素とも密接に関連した複雑な様相を呈する。それらの全ての要素に目を配り、全ての文末助詞を余すところなく網羅的に記述し分析する準備は本稿にはない。また、本稿の主たる目的は類としての枠組みを描くことにあり、個別の文末助詞の徹底的記述は副次的な作業となる。

4. 論文の構成と概要

以上で述べた問題意識に基づいた本稿は以下のような構成と概要を持つ。

第2章ではまず文末助詞固有の機能を考察する。そして、文末助詞はそれが付く文(発話)が、発話者たる「私」と発話現場である「今、ここ」を離れては存在しない、非自律的なテキストであるという指標を付ける役割を第一義的に持つと考える。次に数十個にも上ると言われる文末助詞の形式を、連用規則という統語的振る舞いを根拠に、同化や縮約といった音声的な現象に配慮しつつ、A類・B類・C類・D類の順で生起する4つの類に分類する。4つの下位類はそれぞれが違った意味機能を持っており、文末助詞が付く文(言表内容)の異なる側面に対する作用を司ることが予測される。そこで実際に各類の意味機能は次の3章から6章までの各章において述べることになる。

第3章ではA類の文末助詞“住、嚟、先、添”を論じる。これらは動詞や形容詞など語彙的意味を持つ語から個別に機能拡張ないし文法化を起こしてきた形式で、他のB・C・D類と比べると類としてのまとまりを欠く。A類にはまた文内部の節や句を構成する成分として生起する振る舞いを持つものがあり、必ずしも文全体と意味関係を持つわけではない。A類には類内部での連用の仕方からさらに2類が区別される。統語的に前に位置する“住、嚟”はいずれもコトの時間的あり方を示す点で共通する。前者は動詞としては「留まる、住む」という意味を持ち、アスペクト助詞として用いられる場合は「時間の推移とともに終結を迎えようとする動作を留めておく」という動作の形の表現(時間的あり方としては「持続」)を行う。したがって、これらの意味機能を引き継いだ文末助詞としての“住”は、コトを現在あるがままの姿で「留めておく」ように描くという、コトの非完結的な描き方を表す。“嚟”は動詞としては「来る」という意味を持つが、文末助詞としての働きには2種類の用法が区別され、コトの時間的あり方を表すのは動詞句の後に出現する“嚟”であり、これはコトを已然で完結的な姿で差し出す。統語的に“住”または“嚟”よりも後の位置に生起する“先、添”は共にコトの関係的あり方を示す。「追加する」という動詞に由来する“添”はコトの追加を表す。つまり、当該のコトを既存の別のコトの上に加算的に積み

上げることで、背後にある何らかの尺度上で指す目盛りを進ませる意味を持つ。一方、「先の、先に」という意味の形容詞・副詞として使われることもある“先”は、文末助詞として当該のコトが他の何らかのコトよりも時間的に前に位置することを表す。

第4章ではB類の唯一の構成員であるg-を取り上げる。この形式はモノ化機能を持つ構造助詞“嘸”[ge3]が命題目当てに機能拡張したもので、命題をモノ化する働きを持つと考えられる。すなわち、命題の個別性を捨象することにより、命題を一般的で普遍的な性質のものとして提示する機能を持つ。

第5章ではC類の構成員である1-とj-を取り上げる。この2つの形式は事態に対する話し手の見立てを表す。文(言表内容)で描かれる事態に対して、1-はそれを「新しい状況」と見立て、j-はそれを「何らかの尺度において相対的に度合いが小さいもの」だと見立てる。このような基本的用法の他に、1-には言表内容をめぐる主体(話し手)の認識状態が「新しい状況」であると見立てる認識変化表示の用法がある。また、j-にも相手の先行発話もしくは当該の自分の発話そのものが「相対的に価値の低いもの」とであると位置付ける拡張用法がある。このような1-とj-の各用法を通じて見られるのはそれぞれ<変化>(1-)や<序列>(j-)の存在を捉えようとする話し手の見立てだと考えられる。

第6章ではD類に属す形式を取り上げる。D類に属す形式は非常に多いが、文類型への生起状況と音声・音韻的特徴を手がかりにしてさらに下位分類される。まず、平叙文・疑問文・命令文の3種類の文類型の全てに生起するなど振る舞いの点で似たa3とwo3とを比較しながら取り上げる。この二つはいずれも発話を発信し伝達する段階での話し手による発信の仕方を表し分ける。a3は聞き手に発話内容を聴取するよう要請し、wo3は発話内容の伝達により聞き手に認識変化を促すというように、この両者は伝達プロセスにおいて機能分担をしている。a3は発話を話し手の<声>という、情報的価値を持たない言語表現として聞き手に聞き取らせることだけを目指すのに対して、wo3は発話を<情報>として伝達し、聞き手の情報更新を目指すのである。

次にa3やwo3とそれぞれ音韻的特徴を共有するa4とwo5を取り上げる。この2つは話し手が発話の発信伝達の営みに受け手の立場で関わることを表すもので、発話内容の受け取りプロセスの表し分けを行う。a4は発信者の<声>として聴取される内容が何であることを示し、wo5は発話伝達プロセスを通じてどのような<情報>を得たかを表すと考えられる。

次は発信者の立場から<情報>を聞き手に伝達する際に、聞き手の情報に依存するかどうかのような述べ方を表すla1とalma3について考察する。la1が聞き手情報へ依存した発話方法を無条件に表示するのと異なり、alma1は当該情報の内容が自明なものであるという情報の性格への言及を含む。この類の形式は聞き手の情報保持状態に配慮しながら発話を行う点で前述のa3やwo3とは区別される。

以上の形式は発話伝達プロセスへの話し手の関与の仕方を表示するものであったが、D類の中のもう一つの大きな下位類として、次に命題の成立をめぐる話し手の認識的態度を表す一群の形式を考察する。gwa3は命題が一定の蓋然性を持って成立するものであるという

第1章 序論

推測的述べ方を表す。me1 は話し手自身の予測とは反する命題についてその成否判断を聞き手に委ねる。一方、ge2 は命題が話し手の予測と反して成立するものであることを述べ立てる。これらの形式は認識判断的ムードを表す。他方、命題を現実世界において実現させることをめぐる話し手の態度を表す行為実行的ムードの形式として le4 が位置づけられる。

最後の第7章は本稿の結論に相当するが、2章から6章までで議論するA類からD類までを体系の中に位置付けることにより文末助詞という類全体の枠組みを提示する。A類の形式はいずれも文で述べられる事柄的内容の一部をなす。すなわち、文や述語が描くコトのあり方を表し分ける機能を持つ形式であり、それ自身、コトとともに文で述べられる事柄的意味の形成に参画するものである。それに対してB類からD類までの各類は、文の事柄的意味を作り上げる成分ではなく、文で述べられる内容(言表内容)に対する発話時の話し手からした様々な主観的態度——〈言表態度〉——を表すものである。その中でB類は文が表す命題を一般的性質のものに変える働きを持つ。一方、C類は主に文が描く事態に対する話し手の見立てを表す。そこで、B類が命題の性質そのものを規定する点で客体的・素材的であるのに対して、C類は話し手による見立てという、より主観的・主体的な作用を持つと言える。そして、最後尾に位置するD類は話し手が言表内容をどのようなものとして発話の場に差し出そうとしているのか、実際に発話を行う段階における言表内容の表出方法を表し分ける機能を持つ。これと比べるとB類C類はいわば内容的側面に関与するものだけと言える。したがって、本稿ではB類C類といった表出以前の内容目当ての作用を持つ文末助詞はそれだけで自足的に生起することはなく、何らかの有形(D類)・無形の表出方法を必ず伴うと考える。

最後に文末助詞と副詞や応答詞・感動詞といったその他の文法的カテゴリーとの接点を模索し、また文末助詞とイントネーションなどの音声・音韻的手段との関わりについて今後の展望を交えながら議論する。

第2章 文末助詞の全体像

1. はじめに

この章では文末助詞という文法カテゴリーが一体どういう機能を持つのかという点を議論したい。その上で、文末助詞の体系内部の分類へと進み、以下の各章への足がかりとする。

2. 文末助詞の機能

2.1. 会話文への出現

1章で見たように文末助詞を取り上げた研究は少なくないが、文末助詞の類としての基本的性格を明確にしようとしたものは少ない。初期の代表的研究、Kwok 1984 は文末助詞は発話に対する「態度」を様々な側面において表すとする。具体的に言えば、文末助詞は描かれる現実について何か言ったり、あるいは発話の場への個人的な関わりを示したり、テキストを他のテキストや場面と関係付けたりといった機能を持つ(Kwok 1984:99)。また、梁仲森 1992:5 は「外界事物の状況の陳述、個人意思の表明を補助する」ことが文末助詞の意味機能だとしている。

しかしながら、これらの機能は文末助詞という文法カテゴリーに特有で本質的なものであろうか。例えば Kwok 1984 の言う最後の機能は接続詞の機能である。このように、先行研究では文末助詞の意味機能を的確に捉えるに至っていない。

本稿は以下の個別の文末助詞の分析の場合と同様、文末助詞の類としての意味機能は、文末助詞の構成員が共有し、なおかつ他のカテゴリーには見られない言語的特徴(振る舞い)から説明されなければならないと考える。

文末助詞というカテゴリーの最も際立った特徴は他でもなく、しばしば指摘されるようにその出現が日常会話に偏在していることである。広東語の場合、ある非公式の統計によると、日常会話の中では平均すると実に 1.5 秒に 1 回の割合で文末助詞が用いられるという(Luke 1990:11)。また、梁仲森 1992:17 では報道番組、評論番組、ドラマ、日常会話など 6 種類の文体における文末助詞の使用頻度の比較が一覧になって挙げられているが、以下にそれを引用する。

分類	テーマ	ソース	話者数	時間	文の総数	文末助詞を伴う文の数	%
報道	ニュース	ラジオ	1	43'12"	602	0	0
		テレビ	1	48'17"	673	0	0
	金融・経済	ラジオ	1	53'17"	997	0	0
		テレビ	1	47'36"	892	0	0

第2章 文末助詞の全体像

	天気	テレビ	1	56'30"	1080	28	2.5
		ラジオ	1	49'23"	955	0	0
	交通	ラジオ	1	52'50"	853	51	5.9
			1	56'28"	1288	896	69.6
評論	特定の話題	ラジオ	1	48'42"	664	85	12.8
			2	55'52"	761	252	33.1
		テレビ	2	63'29"	863	259	30.0
取材		ラジオ	2	53'13"	760	223	29.3
		テレビ	2	47'23"	631	195	30.9
閑談		ラジオ	2	103'47"	1729	1157	66.91
		テレビ	多数	98'38"	1286	801	62.28
ドラマ		ラジオ	多数	117'41"	1858	1263	67.97
		テレビ	多数	187'23"	2323	1555	66.93
会話	電話による歌のリクエスト	ラジオ	2	71'13"	1186	818	68.97
	日常生活		21 余り	65'12"	1384	983	71.03

梁仲森 1992 はこの統計の結果に基づき、各種報道を第一グループ、評論と取材を第二グループ、ドラマや閑談及び自然会話を第三グループとして三種に分けており、第一グループから第三グループになるにつれて文末助詞の使用頻度が上がることを見出ししている。¹

ごく大まかに言えば、報道(ニュース・金融経済)では文末助詞の使用がほとんどないのに対し、日常会話のスタイルに近いジャンルの文体になればなるほど文末助詞が頻繁に出現すると言えよう。

このように、日常の話し言葉に典型的に用いられるというのは紛れもなくこのカテゴリーを特徴付ける振る舞いの一つである。この特徴は文末助詞の意味機能を考えるための最大の手がかりである。

Luke 1990:286 は日常会話に頻出するというまさにこの事実を重視し会話分析の手法で文末助詞を研究したのである。彼は文末助詞という類は会話の組織化(conversational organization)を扱うすぐれて会話的な存在であるため、書き物やその他の媒体では使用頻度が減ってしまうと説明する。しかし 1 章で述べたように、会話の組織化が文末助詞というカテゴリーの本質的機能であるとは考えられない。

¹ 交通報道のラジオ番組のうちの一つでは文末助詞が例外的に非常に高い比率(69.6%)で用いられている。これは梁仲森 1992 によれば“馬路天使”(道路の天使)という番組での対話であるが、交通情報は各地のタクシー運転手から直に寄せられ、それを報道員が各地のタクシー運転手におしゃべりを交えながら伝えるという方式を取るため、実際には第三グループの閑談に近いという。

2.2. テキストの指標付け

ところで、広東語の文末助詞のように文末に生起し、会話においてとりわけ頻繁に現れる一群の文法カテゴリーとして、日本語には終助詞がある。日本語の終助詞については広東語の文末助詞以上に研究が豊富で、様々なアプローチのものがあり、ここでそれらすべてに触れる準備はない。ここでは、Luke 1990 のように日常会話に特有であるという現象から出発し、終助詞の機能の分析を行おうとした研究として特に山森 1997 に言及したい。

山森 1997 は日本語の終助詞(「ね、よ、ぜ、ぞ」など)の機能を、「現行発話と会話の先行要素という局所的な文脈関係のあり方について述べる」ものだとしている。その結論の妥当性を議論することは本稿の関心事ではないが、そこで主張されている「コンテキストを参照してはじめて指示対象が決定できる『いま、ここ性』をもつ」という終助詞の特性は、広東語の文末助詞の特性にも共通すると考えられる重要な点である。このように日本語の終助詞が「いま、ここ」性を指標することは松木 1999 でも指摘されることである。²

以上の日本語の終助詞が「今、ここ」性を指標するという指摘を参考に、振り返って広東語における文末助詞における「今、ここ」性の指標という役割を考えてみると、文末助詞の機能が自ずと明らかになってくる。そもそも文末助詞は文に付けられるものであるが、文末助詞が付加される素材としての文そのものは、自律的テキストとして、原理的にはいつでも誰によってでも用いられることが可能な性質のものである。しかし、一旦文末助詞によって、文に「今、ここ」という会話現場を指標するしるしが付けられると、その文は会話になされる現場限りで有効な、発話者の個人的なテキストであるということを示してしまう。つまり、当該の文(テキスト)が発話現場に根ざしてこそ存在する発話であり、〈一回性〉と〈個人性〉を付与された非自律的テキストであることを示す標識であると考えられる。

このことにより文末助詞がなぜ日常会話に多く、ニュースでは皆無であるのかが説明される。なぜなら報道という媒体は社会的慣習として、〈公的〉で〈非一回的〉な性質を持つ自律的テキストを発することが求められ、〈個人的〉で〈一回的〉なテキストを産出することが期待されていないからである。同様に、慣習的制度を背景にした状況で非個人的な立場から発言をする場合には〈個人性〉の欠如により文末助詞の使用が抑えられる。他方、〈個人性〉を付与された発話であっても、発話現場限りで有効だという〈一回性〉の要素が欠けていれば文末助詞の使用は限られる。

〈一回性〉という要素についてはドラマや映画といったドラマのセリフを考えてみるとよい。ドラマのセリフは一見すると、登場人物個人による相互行為の産物で、日常会話の反映であるかのように見える。しかし、ドラマのセリフが日常会話で用いられていることばや表現とは明らかに異質であることは、誰しも経験的に感じるであろう。

上掲の梁仲森 1992 のデータではドラマのことばは日常会話について文末助詞が多用され

² 山森 1997 または松木 1999 では終助詞は contextualization cue であるとの指摘があり、終助詞の「今、ここ」性の指標機能について本論とは別の視点からの説明がなされている。なお、本稿で言う「自律的テキスト」という概念は松木 1999 を参考にしたものである。

第2章 文末助詞の全体像

るジャンルであるが、その出現頻度はいずれも 67.97%(テレビ)、66.93%(ラジオ)と日常会話よりは低い。考えてみると文末助詞の欠如だけではなく、そもそもドラマのセリフは言いよどみ、言い間違いやオーバーラップ、沈黙など日常会話に頻繁に見られる要素が、脚本の構成上必要な場合を除いてはまず見られない。なぜならドラマの中の発話は、登場人物と登場人物による一回限りのテキストではなく、第一義的には観客という第三者に聞かせることを目的に産出された自律的テキストだからである。発話の場とは無縁の第三者に聞かせることを想定したテキストであれば、たとえ対話の場面であっても個々の発話に<一回性>を付与する動機が抑制されることは十分に予想できる。

したがって、当然、同じドラマのセリフでも、行きつ戻りつしながら何度でも繰り返し鑑賞できる書き言葉のテキストの中では、文末助詞の使用はさらに抑えられる。たとえば、吉川 1997 では《我和春天有個約會》という作品の第一部について舞台脚本と映画の中のセリフを比べたところ、脚本では文末助詞の使用が一文につき 0.469 の頻度で抑えられるという事実が報告されている。

梁仲森 1992 が指摘する文体による文末助詞の出現頻度の差は、<個人性>または<一回性>の要素が欠如する度合いに応じて文末助詞使用の動機付けが失われることの反映と考えられる。文体に敏感な反応を示すということは、文末助詞がテキストに対して指標を付ける機能を本質とすることの表れなのである。

このように、文末助詞はそれが付く文(発話)に、発話者たる「私」と発話現場である「今、ここ」を離れては存在しない、非自律的なテキストであるという指標を付ける役割を第一義的に持つ。報道のようなオフィシャルな場面のテキストやドラマのセリフなどと異なり、日常会話のことは発話の現場から離れて独立に存在するような自律的テキストとなることを志向しない。³そのため、発話現場を指標する道具立てである文末助詞という文法形式を有する広東語においては、日常会話では 7 割もの文や発話に何らかの文末助詞が付けられることになるのである。⁴

文(テキスト)への発話現場の指標付けという点において、文末助詞は、日常会話に特有な別の言語形式である談話標識(discourse markers)とは異なる機能を持つ。広東語の談話標識には例えば“咁”[gam2]「じゃあ、でも」、 “呢”[ne1]「ほら、ねえ」、 “噏”[na4]「そら、いいか?」といった語句が挙げられよう。

³ 会話分析の分野では通常「日常会話」と言えば、会議や教室場面といった特定の社会制度を背景とした会話と区別して、会話者にほぼ同等の発言権が期待されるような普通の日常会話場面が想定される(好井ほか 1999)。しかし、本稿では文末助詞が典型的に生起する環境としてそれ以外に、聞き手の存在を想定しない独り言も含めるので、「発話の現場」を指標するとしておく。

⁴ 日常会話でも文末助詞が何らつかない文も 3 割は存在するということになるが、文末助詞の無い文でもイントネーションのかぶさりにより、自律的テキストとの違いが示されると考えられる。例えば Matthews & Yip 1994:28 の次の例では返答の“會”にイントネーションがかぶさり、母音が長く伸ばされ、声調の現れ方も通常の調形とは異なると言う。

你 會 唔 會 返 嚟 香港 a3? — 會!
あなた [可能性][否定][可能性] 帰る 来る 香港 SP [可能性]
[香港へ帰って来ますか? — もちろん!]

第2章 文末助詞の全体像

(1) 港生: 嗰陣 得 呢 個 單位 jilma3, 而家 就 買唔起 lo3!

あの時 ~しかない この CL 部屋 SP 今 なら 買えない SP

[あの時はこの部屋しかなかったんだもん。今ではもう買えないよ。]

周樹: 呢, 佢 話 想 油 過 個 尾房 同 廚房 廁所 a3 咁, 睇 吓

ほら 彼 言う ~たい 塗る[やり直し] CL 角部屋 と 台所 トイレ SP のような 見る 少し

有 冇 人 租 wo5!

有る 無い 人 借りる SP

[ほら、彼女角部屋や台所トイレとかを模様替えして誰かに貸したいって言ったじゃない。]

港生: 咁 好 少 嘢 jel, 你 做 室內設計 嘅, 你 負責 油 一個

とても 少ない こと SP あなた する インテリアデザイン の あなた 請け負う 塗る 1CL

可以 租得出 嘅 房 le4! (出租:53)

できる 貸し出せる の 部屋 SP

[そんなのたいしたことないじゃないか。君、インテリアデザイナーなんだから賃貸の部屋をやってみたら?]

(2) OK! 嘩, 家姐, 你 自己 執生 la3, 有 乜 事 call 我 手提, 我哋 而家

OK いいかい 姉さん あなた 自分で 切り抜ける SP ある 何 こと 電話する 私 携帯 私達 今

返 去 同 你 執手尾。(出租:52)

帰る 行く ために あなた 後片付けする

[OK。いいかい、姉さん、自分で何とか切り抜けてよ。何かあったら携帯に電話して。僕たちこれから戻って姉さんのために後片付けしてくるから。]

談話標識も日常会話に偏在して現れる言語形式である。しかし、文末助詞がそれが付けられる文(テキスト)から独立して用いられないことができない粘着形式であるのと異なり、談話標識は文から独立した自由形式である。したがって、非自律的テキストの産出という文末助詞のような機能を本質とするのではない。むしろ文よりも大きな単位である談話を対象として作用すると考えられ、その機能も文末助詞とは自ずと異なる。

以上のように、文末助詞の意味機能は、テキストに<個人性><一回性>といった指標を付けることを本質とするが、これは類全体の機能であり、類の成員である各文末助詞は当然それぞれ異なった意味機能を持つ。つまり、各文末助詞は以下の各章で見えていくように、それが付く文に対していくつかの異なった側面において作用しているのである。

そこで以下では、文法特徴に基づいた文末助詞の下位分類を行い、次の章以下で具体的に述べられることになる各下位類の文末助詞の意味特徴説明への足がかりとしたい。

3. 文末助詞の下位分類

3.1. はじめに

従来の文末助詞の研究では、ともすれば形式の数の多さと意味の捉えにくさばかりが強

第2章 文末助詞の全体像

調されてきた。しかし、文末助詞の個々の形式は、雑然と同じ平面に位置づけられるのではなく、文法的特徴の違いからいくつかの類に分け得ることは、先行研究が既に示唆している。文法的な違いを有するという事は、その背後に意味の違いを有しているということである。したがって、文法的特徴を抛り所に各類の意味機能が説明できるはずである。それにもかかわらず、これまで文法的な振る舞いを根拠に文末助詞体系の解明を過不足なく行ったものはない。

1章で述べたとおり、Kwok 1984 は文末助詞と文類型とに相関関係があることを指摘した。また、梁仲森 1992:77-8 は複数の形式の連用という統語的特徴を根拠に6つの類を帰納し、それぞれの類の意味機能を説明した。しかし、これらの研究はいずれも一つの文法的特徴を抛り所にし、残りは意味的根拠に基づいて分類を行ったところに限界があった。

本稿は、Kwok 1984 が述べる文末助詞の文類型への生起状況と、梁仲森 1992 が述べる連用規則は、そのどちらもが文末助詞の意味特徴を反映する重要な根拠として使用可能だと考える。したがって、以下の議論や3章以降の各章ではこの2種類の文法特徴を基準に個々の形式を下位分類し、文末助詞の体系分析が行われることになる。

そこでまず、具体的分類を行う前に、いくつかの前提や原則について確認しておきたい。

3.1.1. 文末助詞の音声・音韻的特徴

文末助詞は他の文法カテゴリーと異なり、その成員の認定自体がそもそも難しい。先行研究では例えば Yau 1980 は42個の基本形式を認定し、個々の形式が組み合わせられた複合形式のパターンは合計206にも上るとしている。一方、Kwok 1984 は30個を基本形式と認定している。

このように文末助詞の数え方に差があるのは、文末助詞の成員がほかの文法カテゴリーの成員と比べ、音声的に独立度が低いことにも一因がある。例えば、2つ以上の文末助詞が連続して用いられる場合、しばしば同化(assimilation)や縮約(contraction)が起こるが、これは文末助詞という類に特有の現象である。

李新魁等 1995:522-523 の例を挙げると、ge3 に a3 が後続する場合、1つ目の文末助詞 ge3 からは声母だけが残り、結果として[ga3]のように一つの音節に縮約される。また、同化現象には ge3 が wo3 に後続される場合、後の形式の影響を受けて[go3wo3]となる例があると言う。他方で実際には同化は起こることもあれば起こらないこともある。また、ge3 は後続の形式がある場合 [ə]の音価を持つという指摘(Law 1990:192)もあり、複合形式が形成される場合には特に音声的なバリエーションが多い。

こういった縮約や同化によって複数の形態を持つ形式を同一の形態素であると認定するかどうかの段階でまず見解の相違が生じる。上述の ge3 の例は、縮約や同化であるということが比較的わかりやすいが、複雑な複合形式になると元の形式が何であるかをめぐり見解の相違が生じる。

さらにこのような同化や縮約現象を念頭において形式を帰納していくと、極端な場合は

例えば声調や韻尾といった独立で音節を成さない要素までが、一つの文末助詞であると捉える可能性も出てくる。これは、いくつかの形式について、互いに同じ声調や同じ韻母を共有し、意味的にも類縁性が感じられる例が少なからずあるからである。実際、声調や-kという韻尾を一つの文末助詞とみなし、それによってより少ない単位で体系の記述を行おうとするものもある(梁仲森 1992 や Law 1990)。

本稿では体系分析の際には、個々の形式の持つ音声的・音韻的特徴にも十分注意を払う必要があると考える。しかし、音声的・音韻的特徴は体系の記述にとってあくまでも補助的に利用可能な根拠として位置づけ、文末助詞下位分類の基準としては何よりもまず文法的特徴が重視されるべきである。

3.1.2. 文の種類について

次に、文末助詞の分類にとって重要な基準の一つである、文末助詞の文類型への生起ということについて定義をしておきたい。

文の種類とは平叙文、疑問文、命令文の3つのタイプを指す。⁵この概念は構造的・文法的なレベルのもので、文末助詞が付けられる部分(以下、「言表内容」と呼ぶこともある)の構造的特徴によって決まる。例えば、広東語では、述語の肯定形と否定形を並列させた構造は独立した文として実現すると、自動的に正反疑問文という疑問文と判断される。また疑問詞を持つ構造が文として実現する場合も然りである(不定疑問文)。命令文は広東語の場合、述語に命令形という形態を特にもたないため形態的特徴からは平叙文と区別がつきにくい。しかし、人称制限があったり、実現が望まれる事態は未然であったり、否定命令(禁止)ならば“唔好”、“咪”「～するな」という語が用いられたりする事実を根拠にすれば、平叙文と区別することができる。そして命令文や疑問文から区別される第三の文類型を平叙文とする。

以上の文類型の判断基準は基本的に Kwok 1984 を踏襲したものであるが、Kwok 1984 では文類型に文末助詞が生起するという点について説明が十分とは言えない。そのため梁仲森 1992:61-62 は文類型を基準に用いることに対して否定的な見解を抱いているのである。

梁仲森 1992:61-62 の批判の趣旨は次の通りである。“唔好食煙”「タバコを吸うな」という文の後に出現しうる形式には12個を挙げることができるが、これら12個の形式はKwok 1984 の分類に基づくと命令文に生起する類、平叙文に生起する類など、複数の類にわたっている。文の種類が一旦決められた上はその種類は変わることはないはずだが、実際にはこの例のように異なる文末助詞の付加によって異なる意味機能を表してしまう。このような表面的な観察を根拠に、そもそも文末助詞を除いた言表内容の種類を先見的に決めることはできない、したがって、文類型という概念は文末助詞の分類にとって有効でないと

⁵ 感嘆文をさらに加えることができるかもしれないが、文末助詞と文類型との相関を調べる上では重要ではないため、さしあたり平叙文に準じて考える。

うのである。

このような批判を未然に防ぐためには、予め文類型に「生起する」ということの意味を丁寧に定義しておいた方がよいだろう。そこで本稿では以下のように規定したい。

まず、一つの文に対しては、構造的特徴からの分類である文類型が考えられるほかに、機能的特徴からの分類である機能類型も想定できる。これはその文が発話としてどのような機能を持つかという機能レベルに関する分類で、構造レベルの類型(文類型)の平叙文・疑問文・命令文に対応して、述べ立て・問いかけ・働きかけという3つの類型を設定することにする。⁶言うまでもなく、平叙文の機能は述べ立て、疑問文の機能は問いかけ、命令文の機能は働きかけである。

文末助詞の文類型への生起状況を見るには、もちろん第一義的には文の構造レベルの類型を考慮しなければならない。例えば、ある特定の形式は平叙文には現れるが、その他の文類型に現れると非文法的になるといった観察が得られれば、その形式は平叙文にしか生起しないと見なされる。

しかし、いくつかの形式については複数の文類型への生起が表面的に見られる場合もある。梁仲森 1992:61-62 が指摘するのはそういった例の一つである。その場合には、構造レベルの類型(文類型)と同時に機能レベルの類型をも考慮しなければならない。具体例を挙げると、wo5 という形式は3つの文類型全てに出現することが可能である。

(3) 唔好 食煙 wo5。(梁仲森 1992:62) [命令文+wo5]

～するな タバコを吸う

[タバコを吸うなってさ。]

(4) 有 乜嘢 玩 wo5。 [疑問文+wo5]

ある 何 遊ぶ

[どんな娯楽があるかってさ。]

(5) 冇 嘢 講 wo5。 [平叙文+wo5]

無いもの 話す

[何も言うことはないってさ。]

このように wo5 は一見するとあらゆる文類型に出現する。しかし、(3)の文は構造レベルでは命令文であるのに、wo5 が付くことによって機能類型は働きかけではなくなっている。同じく(4)は疑問文の構造であるのに、機能レベルでは問いかけ性が失われている。むしろ、「～ってさ」という訳からわかるように、wo5 が付いた発話は文の類型に関わらず常に一定して同じ機能類型に属す。このような場合は「文類型を拘束する」と考え、以下の a3 のような場合とは区別して考えなければならない。

a3 という形式も3つの異なる文類型に生起するが、こちらの方は文類型の違いに応じて

⁶ この発話レベルの機能類型は、実際にその発話をどのように用いてコミュニケーションを行うかという、運用論・語用論的レベルとはまた異なるものである。例えば平叙文(機能類型は述べ立て)を用いることで、間接的に命令を意図するといった例が含まれるが、これらは個別の文脈を参照することではじめて決まるものである。

第2章 文末助詞の全体像

機能レベルでの類型が全て異なる。

(6) 唔好 食煙 a3! [命令文：働きかけ]

～するな タバコを吸う

[タバコを吸うな!]

(7) 有 乜嘢 玩 a3? [疑問文：問いかけ]

ある 何 遊ぶ

[どんな娯楽がある?]

(8) 冇 嘢 講 a3。 [平叙文：述べ立て]

無いもの 話す

[何も言うことはないよ。]

このように、構造レベルの類型の違いに一致する形で機能レベルの類型にも異なりが見られる場合に限り、当該の文末助詞は真にその構造類型(文類型)に「生起する」と言えるのである。どの文類型に生起しても同じ機能類型を表す wo5 のような例は、表面上の生起に過ぎず、真に複数の文類型に生起するとは見なさない。

このように文末助詞と文類型との関係を整理していけば、文類型への生起状況も十分有効な分類基準であり、梁仲森 1992 の批判が当を得たものでないことは明らかである。

3.2. 具体的分析

3.2.1. 周辺の類——A類

以上で述べた前提と原則に基づき、以下では具体的分析に入りたい。

まずは連用の規則を手がかりに、言表内容に近い位置に生起する類から取り上げる。

他の文法カテゴリーの成員の場合と同じく、文末助詞の類の成員をいくつかの弁別的な特徴をもって過不足なく規定することは容易ではない。類の成員として典型的なものとするでないものがあるからである。

文末助詞はその名が示すように文全体を包み、文の表す内容全体と意味関係を構築する成分であり、このような特徴を有するものこそが文末助詞の典型的な成員であると見なされる。

しかしながら一方でこの特徴を有してはいなくても先行研究において文末助詞の一種と見なされてきたものに“添、嚟、住、先”がある。⁷これらの中には文全体というよりは文

⁷ 文末助詞を論じた先行研究でのこれらの形式の扱いは様々である。Yau 1980 では“嚟、添”が取り上げられているが、注で“嚟”はアスペクトマーカでありながら文末尾に付けられる点で他の文末助詞と共通していると述べ、“添”についても動詞としての「加える」という意味を保っていると、これらの特異性に言及している。Kwok 1984 では“添”のみが取り上げられ、Fung 2000 では“嚟”のみが取り上げられている。文末助詞の範囲を比較的広く捉えた張洪年 1972、梁仲森 1992 ではこれら4つが全て取り上げられているが、前者ではその外に単独形式として“法”(“佢點打你法 a3?”「彼は君をどのように殴ったんだ?」)のように常に“咁、點”「このように、どのように」という語と共に現れる形式を認定しているが、これを文末助詞と見なすのは先行研究においては一般的ではない。したがって、文末助詞の範囲を広く規定する場合、周辺の類としてさしあたり問題になるのは“添、嚟、住、先”の4つであると言える。

第2章 文末助詞の全体像

内部の成分と意味関係を持つと見なされる形式がある。例えば:

(9) 我 覺得 好似 俾 人 打劫 完 嚟 一樣。(網)

私 思う まるで ~に 人 強盗する[完結] 同じ

[まるで強奪されたみたいな感じだ。]

(10) 可 唔 可以 唔 講 呢 樣 嘢 住 a3? (19 歳:132)

できる[否定]-できる [否定] 話す この CL こと SP

[それは今話さないでおくってことでいい?]

このように、“好似~一樣”「まるで~のようだ」という節の中の“俾人打劫完+嚟”に“嚟”が生起したり、“住”が“可以~”「~してよい」が従える句“唔講呢樣嘢+住”の一部になっていたりすることからもわかるように、文中の節や句の要素となっていることから、文末助詞の典型的な成員と比べると「文末助詞らしさ」において劣る。しかしながら、(10)のように否定詞を持つ述語とも意味関係を持つことから、動詞や形容詞と直接に意味関係を結ぶ結果補語や動詞接尾辞といったカテゴリーにも入れることができない。

他方でこれらの形式には文末助詞に似た一面もあり、例えば以下の例では代わりに他の文末助詞があればよいが、そうでなければ“嚟”、“先”を取り除くと発話が唐突で不完全に聞こえてしまう。

(11) 嗰 日…我 阿媽 抹 完 張 檯 然後 將 張 相 放 咗 喺 電腦

あの日 私 母さん 拭く 終わる CL 机 それから ~を CL 写真 置く [完了] ~に パソコン

後面 嚟。(19:301)

後ろ

[こないだ母さんが机を掃除して、その時に写真をパソコンの後に置いたんだ。]

(12) 李: 排 完 舞 之後 就 Book la3!

リハーサル[終わる] ~の後 予約する SP

[リハーサルが終わったらチケット予約するわ。]

陳:好 al, 返 香港 返 香港。

よい SP 帰る 香港 帰る 香港

[いいね。香港に帰国だ~!]

李:買 張 頭等 先。(19:206)

買う CL ファーストクラス

[ファーストクラスを買おうっと。]

そこで、本稿ではこれらは非典型的(周辺の)な成員ではあるが、文末助詞のカテゴリーに含めて考えたい。これらを取り込むことで典型的な成員の持つ特徴がより明確になり、文末助詞全体像の把握に役立つと考えるからである。

これら4つの形式は、梁仲森 1992:77-8 では統語的特徴からさらに“嚟”と“住”からなる第1類、“先”と“添”からなる第2類の2種類に分けられている。本稿でも連用規則に基づいて、“嚟”と“住”をA1類、“先”をA2類、“添”をA3類と、3つのグルー

プに分けられると考えるが、その上で全体を非典型的な類として一括りにし A 類と名づけておく。⁸これらはどれも語彙的意味を持つ語がその用法を保ちつつ、個別に文法化・機能拡張の過程を経てきたものであり、元の語との意味的関連を保っている。また、縮約や同化という音声的現象に関与することがなく形態の自立性が高く、これ以降の B 類以下の類とは一線を画している。

3.2.2. 多様な形態を持つ類——B・C類

3.2.2.1. B類 g-

統語的特徴から見れば、A 類の次に配置されるのは g-という声母からなる文末助詞で、従来の先行研究の言う ge3(嘸)に相当する。ただし、ge3 は 3.1.1. で述べたとおり、後ろに配置される形式との組み合わせ方により同化現象が起こり、[go,ga,ge]といったように様々な形態を取って現れる。また後に母音の[a]から始まる文末助詞が続く場合(a1 を除く)は縮約されて[ga]という形になり、声母の部分しか現れない。梁仲森 1992 のように ge3 を基本の形態と見なし、それ以外は音声的な環境による異形態であると見なすこともできるかもしれない。実際、後に何も続かない単独の形式は ge3 だからである。しかし本稿ではとりあえず基本形を設定しないで、g-という、どういう環境にあっても不変である声母の部分でこの類の文末助詞を代表させる。⁹

この g-という文末助詞は統語的に独特の位置を占め、ほかにこれとパラダイグマティックな関係を構成する形式はない。本稿では B 類と呼んで独立の位置付けを与える。

3.2.2.2. C類 ㄊとㄐ

統語的特徴から見て A、B 類の後に生起するのが梁仲森 1992 で第 4 類「変化限界表現の行為」とされる 2 つの文末助詞 la3“喇”、je1“啫”であり、本稿では C 類と呼ぶ。この二つも B 類の g-と同様、他の文末助詞が後続する際には韻母の部分は様々な現れを持つ。

例えば la3 に wo3 が後続する場合、同化によって lo3wo3 となることもあれば、同化しないで la3wo3 となることもあり、どちらも意味的には変わらないので、[lo3~la3]は自由変異である。

je1 についても同様で、後続する形式の音声的特徴の影響を受けたり受けなかったりで、実際の形態は様々である。例えば李新魁等 1995、方小燕 2003 で jilma3 として取り上げる形式は、jalma3(Kwok 1984:10, Matthews & Yip 1994:342)や je1ma3(Matthews & Yip 1994:344)と意味的には等しく、いずれも je1 に 2 音節の alma3 という形式(D 類)が後続した複合形式と考えられ、[ji1~ja1~je1]はこの環境においてはそれぞれ自由変異である。

⁸ なお、“添”は梁仲森 1992 では 2 類と 5 類にまたがっているが、これは“添”が B 類の g-の前だけでなく後にも現れることがあるからである。このように B 類の後にも生起することができる点で A 類の中では特異な存在である。この点については 7 章で再び触れる。

⁹ これは以下の C 類での形式の処理と平行した扱いをし、文末助詞体系全体への位置付けに鑑みての処理である。この点については 7 章で再び触れる。

このように、後続形式との組み合わせにより韻母は様々な現われを持つため、本稿では l- や j- という声母の部分だけを取り出し C 類の文末助詞と見なす。¹⁰他の形式が後続せず単独で生起する場合、l- には la3、laak3、j- には je1、jek1 があり、そのうちのどちらかが単独形式としてそれぞれ l- と j- の基本形態と仮定することもできるが、B 類の場合と同様、この C 類においても基本となる形態を設定しないことにする。¹¹

いずれにせよ、C 類は l- と j- の 2 種類だけから構成され、これらは梁仲森 1992 の分析が示すように、互いに排斥しあう関係にある。

このように、B 類と C 類は音声的に独立度が低く、構成員の数も少ないという特徴を共有する。

3.2.3. 最後尾に位置する類——D 類

A・B・C 類が比較的少ない成員から構成される一方、C 類の後の位置に生起する形式の数はかなり多く、正確にいくつあるのか数えることすら容易ではない。具体的には次のような形式を含むが、いずれもパラダイグマティックな関係にある。

(13) {a3, wo3, a4, wo5, la1, alma3, lo1, gwa3, me1, le4…}

これら一群の文末助詞に対しては、文類型への生起の仕方というもう一つの文法的振る舞いを手がかりにしなければ、もはや有意義な分類をすることはできない。文末助詞が特定の文類型へ「生起する」とはどういうことかについては既に 3.1.2. で定義した。この原則に基づくと、これら一群の形式の中には、複数の文類型にまたがって生起するものとそうでないものとの 2 種類が比較的簡単に区別される。また、後述するように音声的な類似も分類の大きな手がかりになる。具体的な下位分類は 6 章において言及することにしたい。

3.3. その他の問題

以上、連用規則という統語的振る舞いを根拠に連用に伴われる音声的現象に配慮しながら ABCD の 4 類に下位分類した。

A 類の成員内部での共起を捨象して考えると、文末助詞は最大限に用いた場合は ABCD という順序で実現するが、以下に具体例を挙げておく。

(14) 你 知 咩 嚟 ga3 la4?

あなた 知る 何

〔何だかわかったの?〕

[嚟(A 類)+g-(B 類)+l-(C 類)+a4(D 類)]

¹⁰ なお、“嚟”や la1 や le5 なども l- という声母を持つが、統語的特徴や文類型への生起状況からそれぞれ A 類、D 類に属すと見なされる。この点、声母が持つ音声形態のみに着目した Fung 2000 の分類とは異なる。

¹¹ la3 を l- + a3、je1 を j- + la1 (縮約により第 2 音節の声調だけが残る) のように、これらの単独形式も複合形式だと考えることもできるが、後続する形式が何であるかという問題について本稿ではこれ以上検討しない。なお、lo3 や lok3 といった単独形式については、l- と意味的にも音声的にも関連はあるが、l- とは別の形式と考え、本稿での考察からはひとまず除く(5 章で再び触れる)。

第2章 文末助詞の全体像

(15) 我都係 是但 搵 住 先 ga3 ja3 wo3.

私も ~だ 適当に 探す [持続]
[私も適当に探ただけだよ。]

[先(A類)+g-(B類)+j-(C類)+wo3(D類)]

もちろん、ABCDのいずれの構成員も等しく連用されるわけではない。例えば、D類の一つ la1 はC類とは共起せず、j+ la1 や l+la1 といった組み合わせは存在しない。このように現実にはあり得ない組み合わせに関しては、音声的または意味的理由による制約が考えられる。

以上で述べた体系はやや単純化したものであり、実際には、この他に個別の各形式(特にD類)に対して微妙な音声的違いによって区別される形式が派生的に存在する。梁仲森 1992 が「強め」を表す非音節的助詞と見なしている軟口蓋閉鎖音の-k は、本稿では独立の文末助詞とは見なさず、異なる形式を作り出すのに利用される音声的な手段と考えられる。¹²例えば、a3+-k→aak3、je1+-k→jek1、la3+-k→laak3(梁仲森 1992)である。これらはそれぞれ-kを伴わない形式とは別の形式と考えられ、文法的振る舞いも異なる。

他方で、音声的特徴が加味されても、同じ形式の異形態であると見なすのが適切な場合もある。例えば、梁仲森 1992:128-131 が述べる[a]母音の中央化や円唇化は「リラックスした」、「軽薄な」感じを表すが、違う形式であると見なすのは不適當である。

このように文末助詞の場合、体系の細部の分析には音声的な特徴も見過ごすことはできない。本稿の6章では、いくつかの形式について、相互の音声形態の類似を根拠に意味的関連を探ろうとする試みがなされる。

なお、B~D類の文末助詞の中には文末だけではなく、文中でポーズが置かれる位置や節末に生起するものもある。例えば、次のような例である。

(16) 如果你 唔 肯 a4, 咁 我 唔 理 ge3la3. (梁仲森 1992:81)

もし あなた [否定] 応諾する じゃあ 私 [否定] 取り合う
[もし君がいやだって言ったらか?そしたらもう知らないよ。]

(17) 嘩, 係 兄弟 ge3, 今日 呢 鑊 嘢, 你 唔好 話 俾 MissLee 知 a3!

intj ~だ 兄弟 今日 この CL こと あなた [禁止] 話す ~に 知る SP
(港製:119)

[いいか、兄弟なら今日の件のことミス・リーに話すなよ。]

これら文中での用法は文末助詞としての意味機能と密接な関連があり、文末で用いられる場合の意味機能と切り離して考えることはできない。したがって、文中助詞として特にまとめることはしない。

4. 2章のまとめ

この章では文末助詞の本質的性格について、日常会話への偏在という振る舞いから説明

¹² 実際には通常は軟口蓋閉鎖音というよりは声門閉鎖音のように発音される。

第2章 文末助詞の全体像

を与えた。すなわち、文末助詞はそれが付けられる文を、発話現場からの離脱が可能な自律的テキストとしてではなく、発話現場に根ざした<一回的>かつ<個人的>なテキストとして指標付ける役割を有するのである。

文末助詞は統語的位置関係という文法的振る舞いに基づき、連用に伴われる音声的現象に配慮すれば、以下の4類に分類される。

A類はいずれも音声的に安定し独立した形態を持ち、語彙的意味を持つ語からの文法化・機能拡張の結果であることが明らかなものである。文全体にかぶさるように文末に生起するというよりは、文内部の成分として働くという振る舞いを見せる形式もあり、その点はB類以下の形式に比べると文末助詞らしさを欠いた非典型的な文末助詞である。これらは厳密に言えば、構成員内部で互いに共起するものがあるため、A1・A2・A3類というシンタグマティックな関係の下位類を立てる必要がある。

B類、C類は共に後続するD類との組み合わせによって異形態を多く持つため、あらゆる環境において共通する声母の部分で代表させる。前者の構成員はg-だけで、後者にはl-, j-の2つが属す。

最後尾に位置する類はD類である。D類は構成員の数が際立って多いが、これらの形式は文類型への生起状況や音声的形態から体系的に整理される可能性がある。

これら4種類の文末助詞は最大限に用いた場合、ABCDという形で実現する。

以下の各章では以上で行った分類が意味するところを詳述する。すなわち、これらの4つに分類されるという現象には、それぞれの類が持つ意味の違いを反映していると考えるのである。つまり、文末助詞は類全体としてはテキストへの<一回性・個人性>付与という機能を持つものの、各下位類はそれぞれ言表内容に対して様々な異なった側面で働くことが予測されるのである。

第3章 A類 コト目当ての類

1. はじめに

2章で述べた分類基準から帰納されたA類に属するのは“住[jyu6]、嚟[lei4]、添[tim1]、先[sin1]”の4つである。これらはそれぞれ、「留まる、住む」、「来る」、「追加する」、「先に」という語彙的意味を持つ語から文法化ないし機能拡張してきたものであるが、この章の議論で明らかにされるように文末助詞としての意味機能にも元の語彙の意味が反映されている。また、音声的にも自立性が高く、“住、嚟”は文全体と意味関係を持つというよりも文内部の述語と意味関係を持ち、文末助詞の中では非典型的な成員である。

A類の成員はそれぞれが個別に文法化・機能拡張してきたもので、本来は類として共通の意味機能を見出すことが期待できない、いわば寄せ集めの集合である。しかし、4つの中でも、梁仲森 1992 が第一類とする“住、嚟”は互いに共起することではなく、“先”や“添”の前に位置する文法的特徴を持つ。また“住”と“嚟”とは Yiu 2001 が完結(perfective)・非完結(imperfective)というアスペクト性を表す形式として位置づけているように、時間的な概念と関連する意味特徴を持つと見られるため、A類の中でも特にA1類を構成すると見なす。

A1類と共起し得る残りの“先”と“添”については、さらにこの順序で共起し得るため、連用規則の応用を貫いて分類すれば、前者をA2類、後者をA3類と分けられる。ただし、後に見るように“先”と“添”とは意味的共通点を持つため、意味的観点を取り入れて1つの類にまとめ、先の“住、嚟”と対照させた方がより有効な体系化が成し得る。

そこで、以下ではA類に属す4つの形式を“住、嚟”と“添、先”との大きく2つの類に分けた上で、それぞれ各形式の個別の意味機能をそれらの文法化・機能拡張のあり方に言及しつつ説明し、これらの形式がA類全体として持つ意味的な特徴を探してみたい。¹

2. コトの時間的あり方——住と嚟

2.1. 住

2.1.1. アスペクト助詞“住”

文末助詞“住”は、張洪年 1972:153 が述べるように動詞“住”「留まる、住む」に由来する。

文末助詞として“住”はある状況が暫時保持されることを表す(梁仲森 1992、李新魁等 1995)。

¹ これらの4つの形式のように、語彙的意味を持つ内容語から文法化して文末助詞のような機能を持つに至ったと思しき形式は、広東語のみならず他の中国語諸方言にも広く見られる。ほんの一例を挙げれば、徽州方言には“添”、“起”という形式があると言われる(平田 1998)が、これらはそれぞれ広東語の“添”や“先”に意味機能的に類似した形式と思われる。本稿は各形式を広東語の文法体系において位置付けることを第一義的に目指すため、他の方言における文法化の諸相を参照することはひとまず控えておく。

(1) 唔好話 佢知 住。(李新魁等 1995:504)

[禁止] 話す 彼 知る

[彼に話さないでおいてくれ。]

“住”はほかにも結果補語、動詞接尾辞(アスペクト助詞)としても働く。動作行為の結果を表す成分である結果補語としての“住”は「固定する」という意味を表すが、アスペクト助詞のそれとは異なり、動詞との間に“得”や否定詞“唔”を挿入して可能補語形を構成したり((2))、完了を表す接尾辞の“咗”を伴ったり((3))することができる(彭小川 1996a)。

(2) 佢 接 唔住 個 波, 我哋 又 輸 咗 一球。

彼 受け取る [否定] CL ボール 私達 また 負ける[完了] 一球

[彼がボールを受けそこねたので、私達はまた一球入れられた。]

(3) 阿強 捉 住 咗 嗰 個 賊仔, 將 佢 拉 咗 去 派出所。

捕まえる [完了] あの CL 泥棒 ~を 彼 引っ張る [完了] 行く 派出所

[阿強はその泥棒を捕まえると派出所まで連行した。]

他方、このように可能補語形にはできない、あるいは“咗”を付けられない“住”はもはや結果補語ではなく、「持続」を表すアスペクト助詞であると見なされる(張洪年 1972:150、彭小川 1996a)。次のような例がそうである。

(4) 佢 搖 住 頭 講: “唔得, 唔得”。(彭小川 1996a)

彼 振る 頭 言う ダメ ダメ

[彼は首を振って「ダメ、ダメ」と言った。]

アスペクト助詞としての“住”はしばしば普通話の“著”に相当するものとして比較される(彭小川 1996a)。普通話の“著”についてはこれまで様々な論著があるが、木村 1983 及び井上・生越・木村 2002 での論考はとりわけ本質を突いた示唆に富むものである。後者は日本語や朝鮮語のアスペクト形式が<事象と時間の質的關係>(事象を時間軸上に直接位置付ける(状態形)か否か(非状態形))を表すのと異なり、中国語(普通話)のアスペクト形式“了”や“著”は事象の<形>の表現であるとし、その上で“著”は動作の持つ<開いた線>としての<形>を描く標識であるとする。

中国語には日本語や朝鮮語と異なり、アスペクトの表現において事象の<形>の表現を専ら担う形式があるという点は大変重要である。本稿では広東語のアスペクト助詞の“住”についても普通話の“著”と同様に、事象の<形>の表現に与る形式であると考えられる。

しかしながら、“著”と“住”とは動詞としての意味の差ゆえにアスペクト助詞としての意味機能にも当然異なる点が見られる。普通話の“著”についての詳細は上述の論考に譲るが、広東語のアスペクト助詞“住”に関しては、その動詞としての意味「留まる」を色濃く残しており、動作の<形>の表現においてもその反映が見られる。

そもそも持続を表すとされるアスペクト接尾辞“住”は単独での使用がかなり制限され

ている。²例えば以下のような動作行為を表す動詞に“住”を付けて文を言い切りにすることはできない。

(5) *我 食 住 飯。(歐陽偉豪 2001)

私 食事をする

[私にご飯を食べている。]

(6) *小 李 唱 住 歌。(彭小川 1996a)

pref 歌う 歌

[李君は歌を歌っている。]

(5)や(6)が用いられるためには、一つには次の例のように“V1住 V2”のようにして、第二の動作行為(V2)を表す句が後続しなければならない。これは“住”を伴う動作(V1)が起こると同時に平行して第二の動作(V2)が起こることを表す。

(7) 我 食 住 飯 等 小 明。(歐陽偉豪 2001)

私 食事をする 待つ pref

[私にご飯を食べながら小明を待つ。]

(8) 小 李 唱 住 歌 行 入 嚟。(彭小川 1996a)

pref 歌う 歌 歩く 入る 来る

[李君は歌を歌いながら入ってきた。]

ただ、(5)や(6)で見たように単独では許容できないはずの“V住(O)”も、次のように台本のト書きで背景となる動作行為を描くような場合には許容できるようになるというインフォーマント(2人)の語感がある。

(9) 喺 公園 食 住 嘢…

~で 公園 食事する

[公園で何かを食べているところ・・・]

しかし、この場合もト書き以下で語られることになる第二の動作行為(V2)の背景を“V1住(O)”が表すと考えられる。このように、アスペクト助詞の“住”を用いるには、第二の動作が後続することが必須であるがその理由はすぐ下で述べる。

もう一つの方策としては文末助詞“先”「とりあえず、まず」(本章3.2.で後述)を用いることである。張洪年 1972:151、彭小川 1996a で指摘されるように、“先”さえ伴えば、第二の動作(V2)なしに“住”を用いることができる。

(10) 你 食 住 飯 先。(張洪年 1972:152)

あなた 食べる ご飯

[とりあえずご飯を食べておきなさい。]

² どのような類の動詞の場合に“住”が単独で付けられるか、また全く付けることができないか、といった詳細については彭小川 1996a に詳しい。

(11) 我 答應 住 佢 先, 如果 唔得, 先至 再 講 la!(張洪年 1972:151)

私 承諾する 彼 もし ダメ ようやく また 話す SP

[とりあえず彼にはOKだと言っておこう。もしダメならそれからまた考えよう。]

この現象については張洪年 1972:151、彭小川 1996a、Yiu 2001 ほか先行研究では“V 住(0)先”「とりあえず V しておく」を一種の固定的構文と見ており、“先”が必要とされる理由を考察したものはない。しかし、この“住”も同じアスペクト助詞の“住”であり、“先”を伴えば動作行為を表す動詞であれば制限なく生起できることも“住”の意味から説明される。

つまり、アスペクト助詞“住”は動詞としての「留まる」という意味や、補語としての「固定する、留める」という意味を色濃く残しており、「動作行為を留める」という意味機能を持つと考えられる。上で述べたように、アスペクト助詞“住”は動詞が表す動作の〈形〉の表現である。「動作行為を留める」ような〈形〉の表現というのは、「既に実現段階にある動作行為が終結を迎えるのを食い止める」といった描き方をすることである。そして、そのような描き方をするためには、何らかの意図や動機が必要になるのである。

その動機の一つが当該の動作行為を終結させることなく留めおいて、それを第二の動作(V2)が起こる背景とすることである。(7)(8)のような例がそうである。また、ト書きの場合(9)も同じ動機に基づいている。

さらにもう一つ“先”を伴う“V1 住(0)先”であるが、“先”「先に、とりあえず」というのは次に何らかの第二の動作行為が続くことを意味する。したがって、この場合も明示的に言語化されてこそいないが、第二の動作行為が続くことが示されるため、第一の動作が留め置かれるための動機が見い出される。より厳密に言えば第二の行為が成されるための背景的事象として第一の行為を背景化として留めておくと言える。このようなわけで、“先”さえ伴えば多くの動詞が“住”を伴うことができるのである。

このようにアスペクト助詞“住”が用いられる場合、後続句で第二の動作行為が明示的に示されるか、或いは文末助詞“先”が付けられるかしなければならないのは、そうでなければ動作行為をわざわざ「留めておく」ように描く理由に欠けてしまうからである。

2.1.2. 文末助詞“住”

アスペクト助詞としての“住”が動詞の直後に後置し、目的語があれば目的語との間に割って入るのに対して、いわゆる文末助詞としての“住”は次のように目的語をも含めた述語全体に後置され、文の最後尾に来ることもある。³先行研究で文末助詞に含められる所以である。

³ また、アスペクト助詞の“住”と異なり、文末助詞の“住”は jyu6 の他に ji6 という発音ができるという、音声面での違いも指摘されている(李新魁等 1995:505 や Yiu 2001:56)。

(12) 我 唔 想 食飯 住。

私 [否定] ~たい 食事する

[(しばらく)ご飯食べないでおきたい。]

このように否定文で描かれる状況が暫時的な性質であるという意味を表す。

文末助詞としての“住”の文法的特徴は、必ず否定文に現れることである(張洪年 1972、彭小川 1996a、Yiu 2001 など)。⁴つまり、梁仲森 1992:85 が言うように、アスペクト助詞のそれが肯定形にのみ現れるのとちょうど補い合う関係にあるわけである。⁵

(13) 唔好 食 住 a3, 阿 康 未 返 嚟 a3。(梁仲森 1992:85)

[禁止] 食べる SP pref [未実現] 帰る 来る SP

[まだ食べるんじゃないよ。阿康がまだ帰って来てないから。]

(14) 我 一定 會 去 ga3... 不過 呢 幾日 就 去唔到 住。

私 きっと [可能性] 行く SP でも この 数日 行けない

[絶対行くよ。でもここ数日はしばらく行けない。]

(15) 文仙尼 係 賽前 激勵 我哋。「知道！」 眾人 齊呼。 不過... 我有份

Mancini に 試合前 激励する 私達 わかる みな 一斉に叫ぶ でも 私 無い 分け前

出場 住... (網)

出場する

[Mancini は試合前、俺たちを激励した。「了解！」みなは一斉に叫んだ。でも、俺はとりあえずの間は出場機会がないのだ。]

(16) *我 想 食飯 住。

私 ~たい 食事する

[ご飯を食べていたい。]

(17) *佢 好 忙 住。

彼 とても 忙しい

[彼は非常に忙しくしている。]

このように肯定形の場合と異なり、否定文では第二の動詞句が後続したり、文末助詞“先”を伴ったりする必要はなく、“住”はかなり自由に生起する。⁶

否定文にのみ生起することについて、またそもそも二つの“住”には暫時性という意味的つながりが感じられるのに、なぜ否定形の場合には“住”は目的語に後置され、ゆえにその統語的特徴から文末助詞であると見なされるのかということについて、これまで納得

⁴ 李新魁等 1995:505、Yiu 2001 では正反疑問文“V唔V住?”という形式も可能であるとするが、“佢走唔走住?”「彼はとりあえず帰りますか?」を受け入れがたいとするインフォーマント(2人)がいることから、否定形との共起と比較すると容認度がかなり落ちるため考慮しない。

⁵ Yiu 2001:54 では肯定形“我擺住本書。”「私はその本を(手に)持っている。」に対して否定形“我有擺住本書。”「私はその本を(手に)持っていない。」という例があるとしてこの考えを採らないが、本稿ではこの“住”はアスペクト助詞ではなく結果補語であると考える。

⁶ もちろん述語の意味により制限はある。詳しくは後述する。

のいく説明を行った先行研究はない。Yiu 2001 ではどのような否定詞と共起するか、どのようなタイプの事象と共起するかが詳述されており、文末助詞“住”は非完結相(imperfective)を表すアスペクト辞(より限定的に言えば<持続>)であるとの結論が出されるが、なぜ否定文とのみ共起するのか、アスペクト辞の“住”とはどういう共通点があるのかという点は懸案とされている。

本稿では文末助詞“住”もアスペクト辞“住”と同様、事象を「終結させることなく留め置く」ように意図を持って描き出すことをその本質的機能と考える。両者の違いは、留めおかれる対象が、後者では動詞が表す動作行為であり、前者では否定文(述語)が表す非実現状態というコトであるという点である。

アスペクト辞の“住”の場合は前述の通り、動詞が表す動作行為を「留めおく」ように描くことで、実現段階にある動作行為の終結を食い止める働きを持つのであった。したがって、肯定形においては、動作が現実に見えているそのあり方を描く(「留めておく」)アスペクト標識として働くため動詞の直後に“住”が置かれる。一方、否定文ではそもそも動詞が表す動作行為そのものは実現しない。動作が現実には存在しない以上は動作行為そのもののあり方を述べることはできないので目的語をも含めた動詞句全体の後に置かれることになる。そこで、“住”は非実現という状況(コト)のあり方を描くことになる。

アスペクト助詞の場合「既に実現段階にある動作の終結を食い止める」ということであつたが、これはつまり当該の動作行為を時間軸の上で展開し終わりを迎えて消滅するものとして捉えていることが前提にある。何らかの意図のもと、その状態が終局を迎えないようにするために「留めおく」のはこのような時間の流れにおける展開が想定されているからに他ならない。したがって、否定述語+“住”についても同じことで、非実現状態を時間軸の上で展開し終わりを迎えるものとして話し手が捉えているがゆえに、“住”を用いて非実現状態を留めおこうとするのである。非実現状態が時間軸上で展開し終わりを迎えるということは、つまり当面のところ実現していない動作行為が実現へと向かうことによって非実現という状態がいずれは解かれるということの意味する。したがって、否定述語+“住”は、述語が描く非実現状態が暫時的なものであり、否定されている事態がいずれは実現をみることを表すのである。⁷

したがって、述語で表される非実現状態は時間の流れとともに展開する事態として見なされるものである必要があり、そのことが述語句のうちに表されていなければならない。上の(12)(13)(14)(15)の例はみな主体の働きかけや外界からの助けにより非実現状態の終結(=事態の実現)がいずれは達成可能だと見なされていることが述語句のうちに示されている。

他方、次のような例の述語句ではいずれ終結を迎える事態だと(話し手が)見なしているこ

⁷ このように非実現状態を時間軸上において捉える点ですぐ下で述べる否定詞“未”「まだ～でない」と共通する。論理否定詞(注8参照)の“唔”による否定と異なり、“未”による否定は否定される事態がいずれは実現するものであり、したがって非実現状態が暫時的であるという意味合いを持つ。“唔知”「知らない、わからない」と“未知”「今のところは知らない、わからない」の対立を参照。

とが示されていないので不成立である。

(18) *Peter 唔 係 老師 住。(Yiu 2001:63)

[否定] ~だ 先生

[ピーターはまだ先生ではない。]

(19) *Peter 唔 高 住。(Yiu 2001:83)

[否定] 高い

[ピーターはまだ背が高くない。]

“係”「~である」や恒常的な属性を表す形容詞の“唔”による否定は、時間の流れと共に進展し終結を迎えるような時間性を持ち得る「実現の否定」ではなく、単なる論理的な否定でしかない。⁸

(18)は次のように“未”「まだ~でない」という否定詞を用いれば成立する。

(20) Peter 未 係 老師 住。(Yiu 2001:67)

[未実現] ~だ 先生

[ピーターはまだ先生ではない。]

これは“未”「まだ~でない」は当該の動作や作用がいずれ実現するという捉え方をするからである。⁹

このように、否定文で“住”を用いるには、否定されている事態がいずれは実現をみるものであるという捉え方が述語句において示されている必要があるが、そうでなければ“住”によって時間の流れに抗って事態を「留めておく」ような描き方をする必然性がそもそもないからである。

これまで述べてきたように、アスペクト助詞の“住”は動詞が表す動作行為が実現する際のそのあり方を描く。他方、文末助詞の“住”は動作行為のあり方ではなく、コトのあり方を描く。動詞というのは本来的に時間性を持つが、否定文が表すコトは必ずしも時間性を有しているわけではない。そこで文末助詞の“住”はコトに時間性を与える働きを有するのだが、それは別の観点から見ればコトの時間的あり方を表す機能だとも言えよう。

2.2. 嚟

2.2.1. 先行研究の分析と問題点

“嚟”は動詞としては「来る」という意味を表すが、動詞句の後に生起するVP 嚟の“嚟”は「動作が行われてから間もない」(張洪年 1972:187、方小燕 2003)、「ある動作が遠くない過去に起こったことの確認」(梁仲森 1992:84)であるとされる。¹⁰

⁸ 否定詞“唔”普通話では“不”に当たる。木村 1997 が“不”を論理否定詞とするのにならぬ、本稿でも“唔”を論理否定詞と考える。

⁹ なお、Yiu 2001:73 が述べるように、もう一つの否定詞“冇”「無い」を伴った動詞句“冇 VP”には文末助詞“住”は生起できないのは、“冇”が動作行為の存在そのものを否定するものであり、時間の流れに沿った展開を捉えないからである。

¹⁰ 張洪年 1972 は普通話の“來著”に相当すると言うが、動詞句・名詞句後置の両方の場合において“來

(21) 你 琴晚 做乜 嚟?

あなた 昨晚 する 何

[昨夜は何やってたの?]

他方、Fung 2000 や Yiu 2001 では“嚟”は完結(perfective)アスペクトを表し、過去のある時点に起こった出来事であることを示すとされる。これは Yiu 2001:13 が次の例を用いて述べるように、近い過去という概念が必ずしも当てはまらないからであろう。

(22) Peter 十年前 去 非洲 嚟。

十年前 行く アフリカ

[ピーターは十年前アフリカに行った。]

そこで Fung 2000 や Yiu 2001 及びそれに先行する Lee & Yiu 1998b では、“嚟”にとって不連続性(discontinuity)が重要な性質として挙げられている。これは次の例の括弧内の訳から知られるように、VP が完結的に生じるとともに、VP が表す状況からの離脱が表されるということである。

(23) Mary 去 美國 嚟。(Lee & Yiu 1998b)

行く アメリカ

[メアリーはアメリカへ行ってきた。(そしてもうそこ(アメリカ)にはいない。)]

(24) 亞 John 唔 開心 嚟。(Yiu 2001:30)

pref [否定] うれしい

[ジョンは不機嫌だった。(が今はもうそうではない。)]

以上のような“嚟”は動詞句並びに形容詞句に後置するのであったが、一方、“嚟”には名詞句に付き、動詞“係”「～である」を用いた判断文「～は NP である」に生起する用法もある。梁仲森 1992 では判断文の目的語の位置に来る事物の確認を表すとされる。

(25) 呢啲 (係) 咩嘢 嚟 ga3? (梁仲森 1992:84)

これら ~だ 何

[これらはいったい何?]

Fung 2000 の説明も同じ趣旨である。すなわち、次の例のように、“嚟”は当該の事物がその形や色などからテレビだと簡単に判別できないような状況において用いられ、目的語に来る名詞句と当該の物体との間のミスマッチを矯正しようとする働きがあるという。

(26) 呢個 係 電視機 嚟,(唔 係 電腦 a3)。(Fung 2000:89)

この CL ~だ テレビ [否定]~だ パソコン

[これはテレビだ。(パソコンじゃない)]

なお、判断文では動詞の“係”は(25)のように文脈によっては省略されることもあり、また(25)のように“NP 嚟”はしばしば文末助詞 g-を伴う。¹¹

著”とはかなり異なる。普通話の“來著”との異同については Lee & Yiu 1998b 参照。

¹¹ 文末助詞 g-については 4 章で議論する。なお、NP 嚟にしばしば g-が伴われる理由について本稿では検討することはできない。

このように“嚟”には二つの大きく異なる用法が観察されるのであるが、両者については、動詞句に後置する“嚟” (VP 嚟)と、名詞句に後置する“嚟” (NP 嚟)とは別物だとみなす研究(Lee & Yiu 1998b)がある。一方で、両者を積極的に関連付け、統一的に説明しようとした主な先行研究は Fung 2000、Yiu 2001 である。

Fung 2000 は“VP 嚟”は perfective を表すと結論し、その重要な特性の一つに上述の不連続性を挙げる。他方、NP 嚟の“嚟”は目的語に来る名詞句の持つ生得的な本来的性質と当該の事物(主語で表される事物)とがミスマッチであるのを訂正するような状況で用いられる。

このことから Fung 2000 は、VP 嚟と NP 嚟の“嚟”は、前者がシンタックス領域(syntax domain)で働くのに対し、後者は認知的領域(epistemic domain)で働くとして、それぞれ作用する領域が異なると考えれば統一的に説明できるという。すなわち、VP 嚟の場合は上述のように発話時と不連続的な性質のイベントを述べるのであった。他方、NP 嚟では認知的領域において作用するのであるから、目的語に来るモノの名前と当該の事物が本来はマッチしていたのが、発話時には不明瞭になってしまっているために、ミスマッチを矯正する機能を持つといった説明である。

Yiu 2001 も“VP 嚟”が不連続性を表すことから“VP 嚟”と“NP 嚟”とを統一的に解釈しようとする。基本的に Fung 2000 と同じ線に沿ったものであるが、“NP 嚟”の場合、発話時に対話者双方とも全く情報を持っていなかった場合もあり得るため、Fung 2000 のようにミスマッチを「矯正する」というのは正確ではなく、それが新規の情報であることを示すとした方がよいと提案する(Yiu 2001:17)。すなわち、NP 嚟は「元々当該情報を持っていなかった状態」から「情報を得た状態」という段階への変化、あるいは「元々当該情報を持っていなかった状態」と発話時における「情報を得た状態」との不連続性を述べるという点で、“VP 嚟”の持つ不連続性とを結びつける。

このように Fung 2000 や Yiu 2001 は、“VP 嚟”と“NP 嚟”を不連続性という特質を共通項として互いに関連付けながら“嚟”の意味を捉えようとしており、その説明は一見妥当なように見える。しかし、いくつかの疑問点がある。

まず初めに不連続性という特徴は“嚟”にとって本質的な性質なのだろうか。確かに、例(23)(24)についてはそのような読みは当てはまるが、例えば以下の例では、何と何が不連続なのかははっきりせず、不連続性という説明が同じように有効かどうか疑問である。

(27) (日記を書いている)

9月7日, 咦 咦 咦?! 做 過 啲 咩 嚟 a3? 唔記得 咗 添...(網)

9月7日 intj.intj.intj. する [経験] CL 何 忘れる [完了]

[9月7日...あれれ?何をやったんだっけ?忘れちゃった。]

(28) (自分の写真がパソコンの中に飾られていないのを李香蘭に見咎められ、本当は阿煩がパソコンの背後にしまったという真実を隠そうとして)

嗰日…我阿媽 抹完 張檯 然後 將張相放咗 嚟 電腦

あの日 私母さん 拭く 終わる CL机 それから ~を CL 写真 置く [完了] ~に パソコン
後面 嚟。(19:301)

後ろ

[こないだ母さんが机を掃除して、その時に写真をパソコンの後に置いたんだ。]

(29) (マーじゃんで Moon がいつも上がるので手助けをしてるのではないかと他の二人に疑われて)

唔 係 我 鬆章 嚟 wo3, 次次 都 係 阿 Moon 自己 自摸 ja3 wo3! (好天氣:155)

[否定]~だ 私 当てる 毎回 も ~だ pref 自分で ツモる

[俺がわざと当てたんじゃないよ。いつも Moon が自分でツモってるんだよ。]

そして、何よりも Yiu 2001:151 自身が未解決問題であるとしているように、否定詞“冇”を伴う述語に“嚟”が後置する場合は不連続性は生じない。

(30) 我 冇 食 魚生 嚟。(Yiu 2001:37)

私 無い 食べる 刺身

[私は刺身を食べていない。]

Yiu 2001:37 が注で述べるように不連続性があるとするなら、「私は刺身を食べなかった。(しかし今は食べている)」というように発話時現在と切り離された状況を述べるはずであるが、実際には()内に述べたような意味はなく、過去の状態と現在の状態との間はつながっているのである。

これらのことから不連続性という性質が“嚟”にとって本質的なものではないことが示唆されるが、そうするとそれによって説明されていた NP 嚟における“嚟”との関連そのものも見直されなければならないのである。

そこで、以下では先行研究とは視点を変えて NP 嚟 の意味機能の検討から始めることにしたい。その上で VP 嚟 と NP 嚟との関連について触れることにする。

2.2.2. NP 嚟

上述のように NP 嚟の“嚟”は主語に来る事物が目的語の名詞句(NP)が表すモノが持つ生得的性質とミスマッチであるような場合に用いられ、それを矯正しようとする働きがあるという(Fung 2000)。

(31) 呢個 係 電視機 嚟,(唔 係 電腦 a3)。(Fung 2000:89) (=26))

この CL ~だ テレビ [否定]~だ パソコン

[これはテレビだ。(パソコンじゃない)]

(32) 呢啲 (係) 咩嘢 嚟 ga3?(梁仲森 1992:84) (=25))

これら ~だ 何

[これらはいったい何?]

このように主語に来る名詞句が指す事物が何であるのかわかりにくいという状況におい

てしばしば“嚟”が用いられる。

本稿では結論から先に言えば、NP 嚟 は存在が確認されているモノ X の属性を述べることにより、モノ X を定義することであると考えられる。

“嚟”にモノの属性記述を表す機能があるということが明確に見て取れるのは、NP が固有名詞の場合であろう。NP 嚟 は“X(係)NP”「XはNPだ」という名詞述語の判断文に現れるが、NP が固有名詞の場合は通常は“嚟”を用いられないと言われる。

(33) *(等 我 嚟 紹介,) 佢 係 成龍 嚟。(Fung 2000:88)

させる 私 [手段] 紹介する 彼 ~だ ジャッキーチェン

[ご紹介しましょう。彼はジャッキーチェンです。]

“X(係)NP”という名詞述語文そのものには概略、属性記述と同定という2種類の用法があると考えられる。¹²(33)は属性の記述ではなく、同定あるいは指示を表すと見なされる。すなわち“佢”「彼」が「ジャッキーチェン」(と呼ばれる人物その人)と同一であることを表している。そこで属性によりモノを定義する“嚟”は現れることができない。

一方、次のような文脈では固有名詞のNPの後でも“嚟”が用いられると言われる。

(34) A: 嗰個人好面善。

あの CL 人とても 見知ってる

[あの人よく見知ってる人のような気がする。]

B: 嗰個係成龍嚟。(Fung 2000:89)

あの CL ~だ ジャッキーチェン

[あれはジャッキーチェンだ。]

(34)の例では何らかの原因によりAが話題となる人物(主語名詞句“嗰個”「あれ」で指される対象 X)が「ジャッキーチェン」本人だと見分けられないでいる。つまり、(33)とは異なり、特定の個体との同一指示を表すのではない。ここでは“嗰個”「あれ」で指される人物が「ジャッキーチェン」としての属性を有することを表していると考えられる。

このように同一指示ではなく属性の記述という点では、(31)“呢個係電視機嚟。”「これはテレビだ。」のような例と平行している。すなわち、(31)では“呢個”「これ」で指される個体が、「テレビ」と呼ばれるモノが一般に共有する属性を持っていると述べているのと同じように、(34)では“嗰個”「あれ」で指される個体(人物)Xが「ジャッキーチェン」としての属性を有しているという意味である。

このような点から“嚟”は話題となっているあるモノ X について、その属性を叙述することでそれが何であるかを定義する機能を持つと考えられる。

モノ X は現場ないし文脈に存在すれば、明示的に言語化されないこともあるが、それでも“NP 嚟”は必ずそのモノ X の属性記述を表すことになる。

¹² 坂原 1990 が日本語のコピュラ文「AはBだ」に記述と同定の2種類が区別されると述べているのを参照。

(35) (プレゼントを贈る場面で)

古:咩 嚟 ga3?

何

[何だよこれ?]

昕:書 嚟 ga3。 (網)

本

[本よ。]

この場合“咩 嚟 ga3?”から“嚟 g-”を取り去って“咩 a3?”とすると、「(お前が言いたいのは)何だよ?」という意味になり、目の前にあるモノの定義づけをする意味ではなくなるので不自然である。

モノ X は次のような「女の子を家に送ること」という概念のこともある。

(36) 送 女仔 返屋企, 係 男仔 嘅 責任 嚟 ga3。 (網)

送る 女の子 帰宅する ~だ 男の子 の 責任

[女の子を家まで送るのは男の子の義務だよ。]

以上のように、“NP 嚟”はあるモノ X についてその属性を示すことによりそのモノ X の種類を定義づける機能を持つと考えられる。

2.2.3. VP 嚟

次に VP 嚟の“嚟”について、まず先行研究での分析をもとに、その意味特徴や振る舞いを整理しておきたい。

Fung 2000、Yiu 2001 で言われるように“VP 嚟”は完結的アスペクトを表す。ただ、“嚟”は動詞や形容詞と直接に文法的・意味的關係を構成するのではなく、(24)(30)や次の例が示すように否定文や形容詞句とも文法的・意味的關係を結ぶ。

(37) 啲 菜 好 貴 嚟,(而家 平 翻)。(Fung 2000:86)

CL 野菜 大変 高い 今 安い [回復]

[野菜は前は高かったけど、今は安くなった。]

したがって、動詞・形容詞の直後に現れるアスペクト助詞が<動作>のレベルで作用するのは区別され、“嚟”は<コト>レベルにおいて作用していると見なされる。この点は前述の“住”の状況と平行するところである。

Fung 2000、Yiu 2001 が指摘するように“VP 嚟”では確かに出来事(コト)が完結的(perfective)に捉えられている。完結相というのは通常、動詞が表す動作行為が描く状況を内的時間構成に注目することなく、外側から眺めて状況全体をまるごと提示する捉え方を指し、状況を内側から眺める非完結相と対立する概念である(Comrie 1976)。これはあくまでも<動作>のレベルの完結相の表示であるが、“嚟”が関わる<コト>のレベルでも同じことが言えると考えられる。

出来事が完結的に捉えられていることは、次のように“完”が現れることからわかる。

(38) 我個頭好痛 a3 ~~~ 可能今日喊完嚟 la1 ~~~ (網)

私 CL 頭大変痛い SP 多分 今日 泣く SP

[頭痛いよ～。多分今日泣いてたからかな。]

(39) 我尋晚俾人嚇完嚟, 你咪再搞多鑊! (網)

私 昨晚 ~に 人 驚かす あなた [禁止] 再び やらかす 多い CL

[昨日驚かされたばっかりなんだ。これ以上変なことやらかすなよ。]

ここでの“完”は動作の終わりの局面を特に指し示すために用いられているのではない。「～し終える」と日本語に訳してみても意味が通らないことからわかる。また、「今日」、「昨夜」といった時を表す語句は、動作が終局を迎える時点のみを指すのではなく、動作全体が生起した期間を表している。

ここで本来は動作の終わりの局面に言及する“完”が用いられるのは、「泣く」や「驚かす」といった動作に対してその動作を組み立てる個々の内的プロセスを問題にすることなく、一つのまとまりとして外側から捉えるという視点を取っていることを保証するためである。

“完”には実際このように動作の終わりの局面だけを特に差し出しているのではなく、動作が終わりを迎えたことを示すことで動作全体の生起を表すと見なされる用法がある。

(40) 占: 喂! 你 瞓緊覺 a4? 尋晚好夜 a4? 吓嘛?

intj あなた 寝る-[進行] SP 昨晚 大変 遅い SP デショウ?

[おい。寝てるのか? 昨夜遅かったのか? なあ?]

M: 係 a3, 通宵完 alma3! (好天氣:228)

はい SP 徹夜する SP

[うん。徹夜してたんだもん。]

(41) 阿水: 嘩 嘩, 仲未瞓…

intj intj まだ [未実現] 寝る

[わあ。まだ寝てない…]

小胡: 未 a3, 彈吓彈吓 又唔覺眼瞓, 去完邊 a3?

[未実現] SP 弾いているうちに また [否定] 感じる 眠い 行く どこ SP

[うん。弾いてるうちに眠くなくなってきた。どこ行ってたの?]

阿水: 去 搵 阿煩 jilma3. (四點水:77)

行く 訪ねる pref だけ

[阿煩に会いに行っただけさ。]

また、“完”の代わりに“過”が用いられることもある。

(42) 可能今日喊過嚟 la1 ~~~. ((38)')

多分 今日 泣く SP

[多分今日泣いてたからかな。]

このように“VP 嚟”にしばしば“完”や“過”が用いられるのは、これらのアスペクト助詞が動作を一まとまりとして外側から見つめ、動作の内部プロセスに言及しないという

点で、“嚟”が完結的に出来事を捉えるのと一致するためである。

なお、いわゆる“VP 嚟”の「不連続性」も、出来事を一まとまりに完結的に捉えること
の表れであると考えることができよう。「不連続」というのは次のように、“VP 嚟”のVPで表
される状況からの離脱を指すのであった。

(43) Mary 去 美國 嚟。(Fung 2000:85) (= (23))

行く アメリカ

[メアリーはアメリカへ行ってきた。(そしてもうそこにはいない。)]

(44) 我有 嘢好做 ga! 我 瞓覺 嚟 ma3.... (網)

私 無いこと するべき SP 私 寝る SP

[何もやることなんか無いよ。寝てただけさ。(今は起きている。)]

これらのVP 嚟では発話時には「もうその場にはいない」や「今起きている」ということを
意味するが、これは「行く」、「寝る」という動作からなる出来事を完結的に捉えることによ
って必然的にもたらされる含意であると考えられる。すなわち、「行く」や「寝る」に(38)(39)
のような動作が完結的であることを保証する“完”を付けて“去完”、“瞓完”としてみれ
ばわかるように、広東語においては、「行く」、「寝る」といった動作は完結的に生起したも
のとして取り上げられると、「もうその場にはいない」や「今起きている」ことを必然的に意
味することになる。¹³

VPが時間性を持たない述語からなる場合は、述語が表す状況からの離脱という「不連続
性」を表すと言われるが、これは本来は非時間的なコトを時間軸の上において完結的に生起
したもののとして把握しようとする視点に起因すると考えられる。

(45) 啲菜好貴嚟(而家平翻)。(Fung 2000:86) (= (37))

CL 野菜 大変 高い 今 安い [回復]

[野菜は前は高かったけど、今は安くなった。]

いずれにせよ、“嚟”はVPの表す出来事を完結的に差し出そうとしている。本稿でも先
行研究が言うように“嚟”は完結的アスペクトを表示すると考えるが、既に述べたように<コ
ト>のレベルで働くという点は区別しておかなければならない。また、いわゆる不連続性は
あるタイプの出来事について見られるに過ぎず、完結的に捉えることから生じる副次的効
果だと説明できる。よって本稿では不連続性をその本質とは見なさない。

“VP 嚟”のもう一つの特徴はそれが設定時点を持つということである。張洪年 1972:187、
梁仲森 1992:84、方小燕 2003 では“VP 嚟”は近い過去に起こった出来事を表すと指摘さ
れるが、これは時点を指す語が特にない場合には、発話者の位置する時点が自動的に設定

¹³ これは、ほかの言語の完結相では必ずしもそうならないことを意味する(Comrie 1976を参照)。これらの動詞について、なぜ広東語では完結相ではその状況からの離脱を表し、状況の始動(inchoative)を表さないのかといった問題については、別のアスペクト助詞“咗”との関わり、ひいては広東語の動詞のアスペクト性やアスペクト助詞が表す意味機能についても触れなければならず、この問題についての議論は別の機会に譲りたい。

時として定められ、そこからコトの生起を完結的に眺めることになるからである。

(46) 李:做 咩 a3?

する 何 SP

[どうしたの?]

陳:我 覺得 今晚 好 瘡。

私 感じる 今晚 大変 疲れる

[なんか今夜は疲れてるんだ。]

李:做 苦工 嚟 a4 你? (19:110)

する 肉体労働 SP あなた

[肉体労働してたの?]

特定の時点が指定されることもある。

(47) 事發當日, 你 做 (過) 乜嘢 嚟 a3? (梁仲森 1992:84)

事件發生当日 あなた する[経験] 何 SP

[事件当日、あなたは何をしていましたか?]

いずれにせよ“嚟”は設定時という概念と無縁ではあり得ない。

以上の点を整理すれば、“VP 嚟”の“嚟”は、「何らかのコトが完結的に生起したことが設定時点で観察される」といった意味を持つと暫定的に規定される。

ところで、“VP 嚟”の“嚟”についてはそれを“NP 嚟”のそれと結びつけて考察することが先行研究(Fung 2000、Yiu 2001)ではなされてきたが、それらは“VP 嚟”の“嚟”から“NP 嚟”の“嚟”へという方向で機能拡張を説明しようという試みであった。本稿ではこれらとは異なり、“NP 嚟”の“嚟”から“VP 嚟”の“嚟”へと機能拡張したという考えを提案したい。

上述したように“NP 嚟”は既存のモノの属性定義づけを行う機能を持つのであったが、“VP 嚟”の“嚟”についてもそれと平行して既存のコトの属性定義を行うことだと考えることを提案したい。

すなわち、NP 嚟においてはモノの属性を定義するのであった。属性を定義付けるのであるから、当然そこに対象となるモノが存在する。同じように、コトの属性定義をするのであれば、そのコトは既存でなければならない。既存するコトというのは要するに設定時以前に起こった既然の出来事である。つまり、VP 嚟はある何らかのコト X が存在したのを前提に、それがどういう種類のコトであったのかを定義する働きを持つと考えるのである。また、“嚟”がコトを完結的に差し出すのは、定義付けるためにはコトの生起全体を捉えている必要があるからである。

したがって、上述の「何らかのコトが完結的に生起したことが設定時点で観察される」という意味は、既存のコトが何であるかその属性を定義するという“嚟”の機能から結果として生じるものであると考えられる。

2.3. まとめ

以上で述べてきたように、文末助詞“住”は否定文で表される非実現状態が時間軸に沿って展開するものであるという前提のもと、時間の流れに抗ってその状態を「留めておく」ような描き方をする。他方、VP 嚟の“嚟”はコトの属性定義付けを行う機能を持つと考えられる。このようにそれぞれ個別に語彙的意味を有する内容語から文法化してきたものであるが、1.で述べたように互いに排斥しあう。それは Yiu 2001 が結論するように、“住”と“嚟”とがアスペクト的にそれぞれ非完結的、完結的という対立した捉え方を表すことに起因すると言えよう。ただ、“嚟”にはコトの生起を観察するための設定時があるが、“住”はアスペクト助詞としての動作の形の表現の機能を引き継ぎ、設定時に関係なくコトの形を描き出す点で非常に性質が異なる。

VP 嚟の“嚟”の意味機能については本稿では十分に考察できたとはいえないが、文末助詞“住”、“嚟”はA類文末助詞の中にあつて、ともにコトの時間的あり方を表すと位置づけられる。なお、NP 嚟の“嚟”の位置付けについてはVP 嚟の“嚟”との関連も含めて、今後の検討課題とし本稿での以下の議論ではひとまず考慮しないことにする。

3. コトとコトの関係——添と先

A類“住、嚟、添、先”の4つのうち、前述の“住、嚟”の後、B類gの前に位置するのが“添、先”である。

これらもまたそれぞれ“添”「追加する」、「先」「先に」という意味を持つ語から文法化した形式であり、元の語彙的意味を持つ用法も保たれているが、文末助詞としての用法とは区別できる。文末助詞としての“添”と“先”はそれぞれ次のようなものである。

(48) 佢好似好鍾意我, 仲送埋花添。(Matthews & Yip 1994:356)

彼 まるで大変好き 私 さらに 贈る [拡充] 花

[彼は私が好きみたいで、花までくれる。]

(49) 聽日我陪你 去 a1, casting 時間 我問吓我朋友先。(19:185)

明日 私 付き添う あなた 行く SP 収録 時間 私 尋ねる 少し 私 友達

[明日一緒に行つてあげようか。キャスティングの時間は友達に聞いてみよう。]

“添”は Kwok 1984:44、Matthews & Yip 1994:356 で“in addition to”、“even”、“also”の意味を表すとされてきたものである。“先”は文字通り「まず、とりあえず」といった意味を表す。

これら二つは前述の“住、嚟”の後に置かれることから、梁仲森 1992 と同様、別のグループとみなされるが、このように文法的根拠から異なるグループに配置されることの意味を検討したい。

3.1. 添

“添”はまず動詞として「追加する」という意味を持ち、たとえば“添飯”「ご飯をさらに

よそう」のように用いられる。

そして、上述(48)の「さらに、～までする」という文末に生起する用法の他に、本来の「追加する」という意味に由来した、数量や程度が増加する用法も持つことが知られている。こちらの方は動詞句内の成分に属し、本稿では文末助詞とは見なさない。

(50) 食 一 碗 添 就 夠 la3・¹⁴ (張洪年 1972:179)

食べる 1 CL ～なら 足りる SP

[もう一杯食べれば足りる。]

以下では、このような非文末助詞としての用法と結びつけながら(48)のような文末助詞“添”の意味機能について考えたい。

3.1.1. モノ・動作の追加

まず、動詞“添”「追加する」の意味を確認しておく。例えば“添飯”であればご飯が既にいくらかあった上にさらに数量の上でご飯の量を増加させるということであり、まだ全くご飯が存在していない状態でご飯をよそう場合には使われない。このように既に同種のモノがあることが前提になって始めてモノの数量追加が表される。

同じように動詞句内に現れる(50)のような場合も、すでに存在することが前提になっている同種のモノの数量の増加、すなわち追加を表すと考えられる。もう一つ例を挙げておく。

(51) 俾 兩 蚊 佢 添 la1。 (張洪年 1972:179)

あげる 2 ドル 彼 SP

[あと2ドルあげろよ。]

また、“添”はモノだけではなく動作行為の数量的増加を表すこともできる。動作に関連する数量には動作の持続する時間、程度、回数があるが、以下の例で“添”が表すのはそういう動作の数的増加である。

(52) 等 吓 添 la1。

待つ ちょっと SP

[もうちょっと待ちなよ。]

(53) 放 高 啲 添 la1!

置く 高い 少し SP

[もうちょっと高いところへ置いて。]

(54) 多 啲 上 去 添 wo3～ (網)

多い 少し 上る 行く SP

[もうちょっと頻繁に行ってくれよ。]

モノの追加と同じく、動作の追加においても、既に出現している動作と同じ動作が行わ

¹⁴ このように述語末に生起する非文末助詞としての用法の“添”(後述の(51)も同様)では、動詞の直後に“多”「より多く」が共に用いられることが多い。この例では“食多一碗添”となる。

れることになる。

周小兵 1993 が言うようにモノと動作の追加では“(一)啲”、“(一)吓”「ちょっと」のように数量詞に類する表現が必須で、例えば(52)を“等添啦。”などとは言えない。これは、数量増加に言及することで、当該のモノや動作と同じモノや動作が既に前提とされていることが保証され、それによってモノや動作のレベルでの追加が行われていると見なすことが可能になるからである。

3.1.2. コトの追加

以上のようなモノや動作の追加機能が、コトのレベルに拡張されたものが(48)で挙げた文末助詞としての用法であると考えられる。

(55) 佢好似好鍾意我, 仲送埋花添。(Matthews & Yip 1994:356)

彼まるで大変好き私さらに贈る[拡充]花

[彼は私が好きみたいで、花までくれる。] (=48)

(56) 如果有記錯嘅話, 佢好似仲係某一個會嘅財政嚟添。(網)

もし無い記憶違い~ならば彼どうやらさらに~だある1CL会の財務係SP

[もし記憶違いでなければ彼は確か何かの会の財務係でもある。]

これらの例からもわかるように、コトの追加用法ではしばしば副詞“仲”「さらに」が共起する。実際、“添”のコトの追加用法ではこれがないと非文になることもしばしばである。

(57) *佢好叻, 好靚添。

彼女大変有能だ 大変きれい

[彼女は有能できれいでもある。]

(58) *我打咗波, 食咗飯添。

私球技をする[完了] 食事する[完了]

[私は球技をした上に食事までした。]

そのため Law 1990 では“仲~添”「さらに~までする」を“連~都~”「~ですら~する」と同じように一種の構文とみなそうとしている。しかし、“仲”が必要とされるのは、モノ・動作の追加において数量詞が必要とされるのと平行した理由によると説明できる。

“仲”は普通話の“還”に相当する機能を持ち、本来は「まだ」という意味を表す副詞であるが、次のように二つの独立した個別の事態(コト)を結び付ける用法も持つ。

(59) 我去咗一間賣“玩具”嘅舖頭, 仲買咗少少嘢。(網)

私行く[完了] 1CL 売る 玩具の店 さらに買う[完了] 少しもの

[私はあるおもちゃ屋に行ったうえに、(そこで)少し買い物をした。]

ここでは“仲”は「玩具屋に行った」という出来事と「そこで何か買った」という出来事を関係付ける働きをしている。その際に、「玩具への関心の高さ度」とでもいった外在的な尺度を導入し、二つの個別の出来事をその尺度において関連付けている。

このように、複数のコトに言及する場合、“仲”はこれら本来何の関連もない別個のコト

を何らかの尺度を導入することでまとめあげる。このように“仲”が尺度を導入することが、“添”がコトの追加を表すのに一役買っているのである。例えば、次の例を見てみよう。

(60) 佢 唔只 好 叻, 仲 好 靚仔 添。

彼 だけでなく 大変 有能 さらに 大変 かつこいい

[彼はかしこいだけでなくさらにかつこいい。]

ここでは「彼のすごさ度」とでもいった尺度を導入することによって、「頭がいい」というコトが1ポイント、「かつこいい」というコトがまた1ポイントというように、累加的に加算される。このように本来二つの個別のコトがポイント加算的に捉えられるのは、“仲”によって「彼のすごさ度」という尺度が導入されるからである。

同じく複数のコトを述べる場合でも例えば“又”は、二つの事態を並列的に並べるだけで、それらを累加的に捉えるために必要な尺度は導入されない。したがって、二つのコトは単なる同種のコトとして並列的に提示されるだけなので、“添”は生起できない。

(61) *佢 又 叻, 又 靚仔 添。

彼 有能 かつこいい

[彼はかしこいしかつこいい。]

このように二つのコトをポイント加算的に捉えにくい場合であればあるほど“仲”が必要になるが、もちろん文脈によって尺度が想定されれば“仲”は特に必要でない。

(62) (マーじゃんをしていて、Aが大当たりなのをCが他の1人Bと組んでいんちきをしているのではないかと問い詰めているところで)

P: 我 a3, 都 未 開 過 糊 添 a3!(好天氣:155)

私 SP 全く [未実現] あがる-[経験] SP

[俺なんかあがってもいないんだぞ!]

(63) 3: 你 同 阿 Moon 拍拖? 傻仔 la1, 幻想 je1 你, 叫 你 唔好

あなたと pref 付き合う ばか 幻想 ~だけ あなた 命じる あなた [禁止]

睇 咁 多 鹹碟...

見る そんな 多い アダルトビデオ

[Moon と付き合ってるって? ばかだな。空想だろ? そんなにアダルトビデオばかり見るなって言ったじゃ.....]

占: 真 ga3.

本当 SP

[ほんとだよ。]

3: 遲早 眼盲 添 a3. (好天氣:133)

早晚 目が見えない SP

[そのうち目まで見えなくなるぞ。]

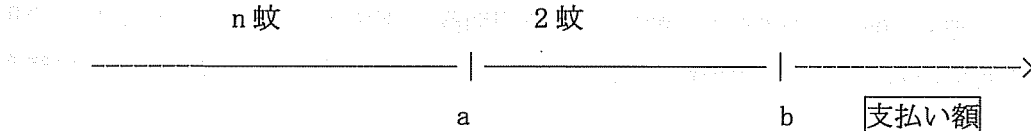
以上で述べてきたように、コトの追加は何らかの尺度のもとで二つの個別のコトをポイント加算的に配置するのであった。モノ・動作の追加で数量に当たるものがコト追加にお

いて導入される「～度」という尺度である。以下のように図示されよう。

(64) 俾 兩蚊 佢添 la1. (張洪年 1972:179) (=51)

あげる 2ドル 彼 SP

[あと2ドルあげろよ。]



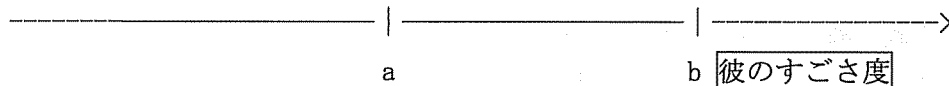
(65) 佢 唔只 好叻, 佢 好 靚仔 添。 (=60)

彼 だけでなく 大変 有能 さらに 大変 かつこいい

[彼はかしこいだけでなくさらにかつこいい。]

佢好叻

佢好靚仔



(64)はモノの追加の場合で、既に何ドルか(nドル)与えていた上に2ドルを与えることで、支払額という数量の尺度上に占める値が a から b へと大きくなるということである。(65)はコトの追加で、「彼のすごさ度」とでもいった尺度が導入され、「彼がかしこい」というコトによって a という値が指し示されていたのを、さらに「彼がかつこいい」というコトに言及することで値を b へと進ませるということを表す。

馮淑儀 2000 では本稿で述べたモノ・動作の追加をシンタックスのレベル、コトの追加をディスコース(文以上の単位)のレベルというように説明している。ディスコースレベルというのは前の文と“添”が付いた文の二つの文を連結する働きを指して言っているのだが、このように二つの文の連結を行うというのは、すなわち“添”が二つのコトに言及するということである。このように、文末助詞が付けられる文の表すコト一つだけではなく、二つのコトに触れる点で“住、嚟”とは性質を異にしているのである。

なお、“添”には話し手がある事態に突然気づき、それが予想外のものであることを示す用法(梁仲森 1992:89)がある。

(66) 哎呀! 唔好意思 添, 將 LSC 打成 LSE 添! (網)

intj. 申し訳ない ~を 打つ なる

[あ、しまった。ごめん! LSCをLSEと打ってしまった!]

この意外の“添”もコト目当てではあるが、これまで述べてきた追加が明示的・非明示的な二つのコトに言及するのは異なり、文で述べられるコト一つにしか言及しない。したがって、ここではポイント加算的にコトが提示されるのではなく、むしろ「追加」という意味特徴だけが拡張されて用いられていると考えられる。すなわち、品物の注文などの状況を考えればわかるが、追加ということは本来の予定外に数を増やすわけで、初めから数

量が把握できていれば追加する必要はない。そこから当該のコトが予測外、意外であるという意味が生じるのである。

3.2. 先

“先”は、麥耘 1993 や李新魁等 1995 では「時間助詞」と呼ばれているが、主に3つの用法が区別されている。¹⁵以下では麥耘 1993、李新魁等 1995 の分類をもとにそれぞれの特徴を見てみたい。

まず第一の用法は文字通り述語が表す出来事が時間的に先に位置することを述べる。このような“先”は文末助詞であるというよりは動詞句を構成する成分であると見なされる。

(67) 佢 嚟 先 過 我。

彼 来る ～より 私

[彼は私より先に来た。]

(68) 邊個 到 先 就 贏。

誰 到着する ～すれば 勝つ

[先に着いた人が勝ち。]

(67)は形容詞のような振る舞いをしていると言えよう。比較を表す標識“過”は、程度性を持つありさま的表現(典型的には形容詞)の後に現れるからである。

麥耘 1993、李新魁等 1995 で第二の用法とされるのは「あることをとりあえず先に実現させ、ほかのことは後回しにしよう」という意味を表す“先”で、次のような例がそれに当たる。

(69) 你 喊 a3? 你 唔好 喊 住 先 la1. (19:150)

あなた 泣く SP あなた [禁止] 泣く SP

[泣いてるのか? まあちよっと泣くなよ。]

(70) 李: 排 完 舞 之後 就 Book la3!

リハーサル[終わる] ~の後 予約する SP

[リハーサルが終わったらチケット予約するわ。]

陳: 好 a1, 返 香港 返 香港。

よい SP 帰る 香港 帰る 香港

[いいね。香港に帰国だ～!]

李: 買 張 頭等 先. (19:206)

買う CL ファーストクラス

[ファーストクラスを買おうっと。]

麥耘 1993、李新魁等 1995 で第二の用法とされるこれらの用法は、専ら命令文や意志文

¹⁵ 馮淑儀 2000 も同様な根拠により“先”に三つの異なる用法を見い出しているが、それぞれ「シンタックス」、「ディスコース」、「言語行為」の平面での作用であると説明する。

など、未然の動作行為に言及する文の末尾に現れる。

そして第3の用法は、疑問文末に現れ「ある事柄(議題)をとりあえず片付けて、ほかの事は後で議論しよう」といった意味を表す(麥耘 1993、李新魁等 1995)。

(71) 講俾 你 知 都 得, 不過 要 扮 乜 都 唔 知, 得 唔 得 先?!(網)

話す ~にあなた知る も OK でも 必要だ 振る舞う 何も [否定] 知る OK [否定] OK

[教えてあげてもいいけど知らないふりをしなきゃだめ。いい?]

この用法での“先”は鄧思穎 2003 が言うように、本稿で言うB類のg-に相当する文末助詞の後にも出現する。

(72) 呢啲 係 乜 嘢 嚟 ge3 先?¹⁶ (鄧思穎 2003)

これら ~だ 何

[これらは何なんだ?]

このように、「先に」という意味が強く文法的にも動詞句を構成する成分の一つとみなされる特徴を持つ(67)(68)のような“先”と、文末助詞的な振る舞いを見せる(71)(72)のような“先”との間には(69)(70)のような中間的な“先”があり、それぞれ振る舞いは異なるものの連続体をなしている。¹⁷

本稿では第3の用法と共に第2の用法をも文末助詞と見なす。なぜなら、これらは(67)(68)とは異なり動詞句の一部なのではなく、また(69)からわかるように別のA類助詞(A1類)“住”の後ろに生起するため、文法上の振る舞いから見れば、文末助詞体系の枠組みにおいて捉えられるべき理由を持っているのである。

そして、その振る舞いに応じて意味的な側面でも文末助詞体系の中に位置づけを与えられるべきと考える。そこで以下では“先”が文末助詞としてどのような位置づけを持つのか、意味的観点から解釈したい。

3.2.1. 先の意味

まず第一の用法から確認しておく。

(73) (発話がオーバーラップした状況で)

你 講 先 la1~.

あなた 話す SP

[君が先に話せよ。]

説明するまでもないが、「あなたが話す」ことが「私が話す」ことよりも時間的に前だという意味である。

ここで重要なことは“先”は時間上の前後としてある出来事(コト)と別の出来事(コト)との相互関係を捉えている点である。例えば(73)の例は、それぞれ「あなた」と「私」という二つ

¹⁶ 原文では ge3 は“啖” [ga3]だがインフォーマントによれば ge3の方がよいと言う。

¹⁷ このほかに普通話の“才”「～してはじめて、ようやく～だ」に相当する意味を持つ副詞としての用法もあるが、本稿での議論に直接の関連はないため述べない。

のモノが素材として作り上げる二つの別個のコト、「あなたが話す」と「私が話す」とを時間的前後の関係で比較して捉えている。

この第一の用法では「話す」という共通の動作行為があることで二つのモノ、「あなた」と「私」が比較の焦点となっている。他方、第2の用法では麥耘 1993、馮淑儀 2000にも同様の趣旨が述べられているが、比較の焦点が設定されない。

(74) 你 喊 a4? 你 唔好 喊 住 先 la1. (19:150) (=69)

あなた 泣く SP あなた [禁止] 泣く SP

[泣いてるのか? まあちよつと泣くなよ。]

(75) 李: 排 完 舞 之後 就 Book 喇!

リハーサル[終わる] ~の後 予約する SP

[リハーサルが終わったらチケット予約するわ。]

陳: 好 吖, 返 香港 返 香港。

よい SP 帰る 香港 帰る 香港

[いいね。香港に帰国だ~!]

李: 買 張 頭等 先. (19:206) (=70)

買う CL ファーストクラス

[ファーストクラスを買おうと。]

この場合は文で述べられるコトよりも時間的に後に何らかのコトが生起するという含みしか表さず、第二のコトが何であるかは全く不明である。そして第一の用法と異なり、二つのコトの間には何らの共通点も保証されていない。そのため、この用法では“先”は常に命令文や意志文といった、コトの実現に向かって働きかける未然の文に専ら出現する。

このように、“先”はその本来の意味から見られるように、述語で表されるコトの生起を相対的な時間的前後関係において捉える性質を持ち、したがって、非明示的ではあるが二つのコトに言及すると言える。“先”の2番目の用法においてすら第二のコトの存在が含意されるのは次のことからわかる。

2.1.1.で述べたように、アスペクト助詞としての“住”を用いて、動作を終結させることなく「留めておく」ように描述する“V 住(O)”が文として成立するためには、動作 V1 と同時平行的に行われる第二の動作(V2)を述べる必要があった。しかし、第二の動作を述べる代わりに“先”を用いることで文として成立する。

(76) 你 食 住 飯 先。(張洪年 1972:152) (=10)

あなた 食事する

[とりあえずご飯を食べておきなさい。]

これは既に述べたように“先”が時間的に後から生起する第二のコトに言及するので、それによって、第二の動作(V2)の存在も保証されるため、第一の動作を「終結させずに留めておく」(背景化する)に足る動機が得られるからである。

このように、2つのコトに言及する点は先に述べた“添”と共通する。すなわち、“住”

や“嚟”がそれが生起する文ないし句の描くコトそのものだけを対象にするのに対し、“添”と“先”はそれが生起する文ないし句の描くコトと別のコトとの関係を表す点で共通しているのである。“先”が“添”と同じように、“住”や“嚟”の後、B類 g-の前という位置に現れる文末助詞として振る舞うという言語事実は、“先”が持つこのような意味から説明されると考えられる。

ただし、既に述べたように、文末助詞“先”(第2用法)は常にコトの実現に向けて働きかける文(命令・意志文)に出現する点で、コトの追加を表す文末助詞“添”とは非常に異なる。

このような振る舞いの違いはそれぞれ文が表すコトと第二のコトとの時間的前後関係の差に起因していると考えられる。つまり、“先”は何らかのコトが時間的に後に生起する含みだけを述べるが、他方、“添”は「追加」であるから、既に何らかのコトが時間的に前に存在していることを表す。¹⁸

3.2.2. 疑問文+先

ところで、前述したように“先”にはさらに専ら疑問文に分布する第三の用法がある。

(77) 講俤 你 知 都 得, 不過 要 扮 乜 都 唔 知, 得 唔 得 先?!

話す ~に あなた 知る も OK でも 必要だ 振る舞う 何も [否定] 知る OK [否定] OK

(網) (=71)

[教えてあげてもいいけど知らないふりをしなきゃだめ。いい?]

(78) 占:唔係, 咁……可能 佢 真係 有 啲 重要 嘢 傾 緊 ne!

ちがう じゃあ 多分 彼女 本当にある 少し 重要な こと 話す[進行] SP

[いや、じゃあ・・・もしかしたら彼女本当に大事なことを話してるのかもよ。]

P:重要? 有 咩 重要 得 過 你 先? (閃:168)

重要 ある 何 重要 [可能] ~より あなた

[大事? お前より大事っていったいどんなことがあるんだよ?]

この事実について、馮淑儀 2000 はこれは発話行為のレベルでの現象で、“先”は「質問」という発話行為を差し迫ってすることから、聞き手はこれらの質問にできるだけ早く答えなければならないという催促の意味が生じると説明している。

本稿でも馮淑儀 2000 のようにこの用法は発話行為レベルでの作用であると考えられる。しかし、“先”にとって「差し迫る」(“迫切”)という意味は本質的とは考えられないため、疑問文が持つ意味的特徴という別の理由に説明を求めたい。

そもそも疑問文は無標の場合は、話し手のうちに何か不確定なことがあり判断を成立さ

¹⁸ なお、“添”について、コトレベルの追加は已然でも未然でもあり得るが、モノ・動作レベルの追加は、動作実現へと働きかける未然の文でしかあり得ない。“我坐咗一陣添。”という已然の出来事の文は「私はひとしきり座るとのことまでした。」(コトの追加)という意味で「さらにもうしばらく座った」(動作の追加)にはならない。このようにコトと、素材としてコトを構成する動作やモノとは異なるレベルの概念として明確に区別される。

することができない状態であることを表すと同時に、その不確定状態を解消してもらおうべく聞き手に情報開示を要求するという、ある意味で命令文と似た側面も持つ。このような疑問文が本来的に持つ聞き手への情報開示要求という側面で“先”が作用していると考えられるのである。

つまり、(73)のような命令文では「あなたが話す」コトが他のコトに先んじて実現するよう働きかけるのに対し、疑問文+“先”では「あなたが質問に答える」コトが他のコトに先んじて実現するよう働きかけるのである。そこに馮淑儀 2000 が言う切迫感や催促のニュアンスが生じることになる。

このように、命令文が文の表すコトそのものが実現するように働きかけるのと異なり、疑問文の使用によって「聞き手が情報開示する」というコトの実現を起こそうとするという意味で、前者が命題レベルであるとすれば、後者は発話行為レベルとして、作用するレベルが区別されるべきである。

このような疑問文に生起する第三の“先”は明らかに第一、第二用法からの機能拡張と考えられるが、(72)のように B 類の g の後に生起する。したがって、連用規則における振る舞いの点から、専ら未然の事態を表す文に生起する第二用法の“先”を“先 1”とし、このように専ら疑問文に生起する第三用法の“先”を“先 2”として区別しておくのがよいだろう。

疑問文に生起する“先”への機能拡張のあり方は、疑問文に生起すると見られる他の文末助詞についても同様に適用される可能性があることを示唆する。

4. 3章のまとめ

この章では文法的特徴からすれば非典型的な文末助詞と考えられる 4 つの形式を取り上げた。いずれも本来の語彙的意味と文末助詞としての意味機能との間につながりが見出され、文末助詞として専用に働くわけではない。しかしながら、文末助詞 A 類として機能する場合はいずれも述語句や文が描くコト目当てに作用する形式であると言える。すなわち、“住”や“嚙”は述語が描くコトを時間軸の上において捉えるが、“住”はコトを非完結的に、“嚙”はコトを完結的に差し出すというように、両者はコトの時間的あり方を表示するとまとめられる。そして、これらが文ないし述語の表すコトそのものの捉え方を表すのに対して、“添、先”は当該のコトを第二のコトに関係付ける役割を持つ。“先”は<時間軸>の上で、“添”は<尺度>の上で、当該のコト 1 が別のコト 2 との間に持つ関係を規定する。このように、A 類の 4 つの形式の中でもさらに 2 種類を区別することを提案した。

第4章 B類 命題の一般化

1. はじめに

2章では、A類とC類の間に位置するという統語的特徴を手がかりに、B類のgが帰納された。

確認のためまず具体的にB類のgの統語的特徴を示しておこう。次のようにA類の“嚟”や“添”の後に生起する。¹

(1) 之前 有人 話 download 唔到 啲 嘢~ 我 搞 過 佢 嚟 ga3 la3~ (網)

前 ある人 言う ダウンロードできない CLもの 私 いじる [経験] それ

[前に誰かそれをダウンロードできないって言うたが、直してきたぞ。]

(2) 佢 哋 都 幾 鍾意 食 米 同 方飽 ga3, 都幾 有益 添 ga3! (網)

彼ら も かなり 好き 食べる 米 と 食パン 結構 ためになる

[彼らも結構米や食パンが好きなんだ。結構体によかったりもするんだよ。]

これは先行研究で“嘅”[ge3]と呼ばれている形式に相当する。2章で述べたとおり、この文末助詞は後ろに他の文末助詞が続かず単独で現れる場合にはge3という形態をとるが、後ろにC類やD類が続く場合、後続形式の影響を受けて実際には様々な音声形態を取って現れる。²したがって、本稿ではg-という語幹部分でこの類を代表させることにする。

文末助詞g-はいわゆる構造助詞の“嘅”と意味的音声的関連を持つ。そのため先行研究では文末助詞のg-と構造助詞の“嘅”とが必ずしも意識的に区別されていない。そこでまず初めに文末助詞g-の範囲を規定する。次に構造助詞“嘅”との関連から、文末助詞g-が持つ意味機能を説明したい。

2. g-と“嘅”の区別——多機能の“嘅”

文末助詞g-は音声的・意味的に明らかに構造助詞の“嘅”[ge3]と関連を持つ。構造助詞の“嘅”は普通話の構造助詞“的”に相当するもので、以下のような用法を持つ。

(3) 我 嘅 朋友

私 の 友達

[私の友達]

(4) 我 想 要 有 浴缸 嘅 房。

私 ~たい 所望する ある 浴槽 の 部屋

[バスタブ付きの部屋が欲しい。]

(5) 我 要 平 啲 嘅。

私 所望する 安い 少し の

¹ “添”はA類としては例外的にg-よりも後に生起することができる。このことについては7章で再び触れる。

² 具体的には次のような例がある：[g-+a3→ga3] [g-+wo3→go3wo3] [g-+la3→ga3la3]

[もう少し安いのがほしい。]

(6) 呢 啲 蛋糕 係 用 麵粉 做 嘅。

この CL ケーキ ~だ で 小麦粉 作る の

[これらのケーキは小麦粉で作ったものです。]

木村 2002 は普通話の構造助詞“的”は、存在が前提とされている事物に何らかの基準で区分限定を加え属性規定を行う意味機能を持つことから、動作を目当てにした動作の区分限定を行う de 構文への機能拡張を説明する。de 構文とは“小王(是)在西單買的(de)車”「王君は西単で車を買ったのだ。」のような構文で、「特定の動作行為に対して、その動作行為に関与する何らかの関与項を基準に区分的限定を加える」もので、構造助詞“的”と区別して“de”と表される(木村 2002)。

広東語には普通話の de 構文に相当するような構文はなく、一回的な既然の動作に対する区分限定を表す場合でも“嘅”は必ず文末に位置する。Lee & Yiu 1998a が述べるように“張三(是)昨天打的電報”「張三は昨日電報を打ったのだ。」という普通話の文は広東語では(7)ではなく(8)のように言わなければならない。³

(7) *張三 (係) 琴日 打 嘅 電報。

~だ 昨日 打つ 電報

[張三は昨日電報を打ったのだ。]

(8) 張三 (係) 琴日 打 電報 嘅。

~だ 昨日 打つ 電報

[張三は昨日電報を打ったのだ。]

このように、普通話では de 構文における“的”と構造助詞の“的”とは文法的にも意味的にも別のものであると見なすのが妥当である一方、広東語には de 構文に相当するものがないため、(3)(4)(5)(6)のような“嘅”と、普通話では de 構文で表される例(8)の“嘅”とを明確に区別する文法的根拠がない。これら(3)~(8)の“嘅”はむしろすぐ下で述べる文末助詞の g と文法的振る舞いの上で対立するものであるため、本稿では一括して構造助詞と見なす。

なお、構造助詞の“嘅”も直後に来る文末助詞の影響を受け、縮約や音韻同化による異形態を持つ。

(9) 有 冇 平 啲 㗎[ga3]?

ある 無い 安い 少し の

[もう少し安いのはありますか?]

(10) 呢 啲 係 你 個 㗎[go3wo3]。

この CL ~だ あなた の SP

[これらは君のだよ。]

³ 広東語にこの de 構文が欠けている原因については本稿では紙幅の関係上述べられないが、いずれ稿を改めて論じたい。

第4章 B類 命題の一般化

構造助詞の“嘅”が命題(言表内容)を組み立てる成分の一つであるのに対して、この章で論じる文末助詞 g-は命題内部の成分ではなく、第4章 3.1.で後述するように先行研究ではある種のムードを表すとされてきたものである。⁴

(11) 我 會 去 ge3。

私 [可能性] 行く

[私は行きます!]

(12) 你 同 佢 有 來 往 ge3 me1? (電影:62)

あなた と 彼 ある 付き合い SP

[あいつと付き合いってたのか?]

(13) 喂! 你 有 冇 諗 過 ne1! 即係……有陣時 一 起身 之後 都

intj あなた ある 無い 考える [経験] SP つまり 時には ~するなり 起きる ~の後

癩居居 唔 知 嗰 日 想 做 啲 咩 嘢 go3 wo3。 (電影 2:64)

ぼんやり [否定]知る その日 ~たい する CL 何 SP

[ねえ。こんなこと考えたことあるかな?例えば、時々朝起きてぼおとして、何がしたいのかわからないんだよ。]

g-と構造助詞の“嘅”とを区別する文法的振る舞いは次の通りである。構造助詞の“嘅”((14)(15))は否定形に“唔係”[~ではない]が用いられるが、文末助詞の g-((16))はそれができない。⁵

(14) 呢 啲 蛋糕 唔 係 用 麵 粉 做 嘅。 [(6)の否定]

この CL ケーキ [否定] ~だ で 小麦粉 作る

[これらのケーキは小麦粉で作ったのではありません。]

(15) 張三 唔 係 琴 日 打 電 報 嘅。 [(8)の否定]

[否定]~だ 昨日 打つ 電報

[張三は昨日電報を打ったのではない。]

(16) *我 唔 係 會 去 ge3。 [(11)の否定]

私 [否定]~だ [可能性] 行く

[私は行くのではありません。]

モノの属性規定にせよ、動作の属性規定にせよ、分類の仕方の適否を言うことはできるが、文末助詞の g-は命題全体にかぶさるので、“唔係”[~ではない]の否定の範囲内にはない。つまり、「~ではない」という判断そのものも命題の一部を成すが、文末助詞の g-はそれをも含んだ命題全体を包むのである。

このように、構造助詞の“嘅”はそれ自身が命題を組み立てる成分の一部であるのに対し、語気助詞の“嘅”は命題(言表内容)全体に外側からかぶさるように付加されたものであ

⁴ 普通話の“我會來的”の“的”にほぼ相当する。

⁵ 普通話の“的”(注4参照)についても他の“的”構文と異なり“不是”を用いて、“*我不是會來的”のように否定することはできないとの指摘が杉村 1982 にある。

る。つまり g-は言表内容外部の要素で、言表内容をめぐる話し手の言表態度に関与しているのである。

このように、構造助詞の“嘅”と文末助詞の g-とは文法的に異なったものであることを確認したうえで、以下では文末助詞 g-の意味機能について述べたい。⁶

3. 文末助詞 g-の意味機能

3.1. 命題の一般化

文末助詞 g-が表すムードについて、張洪年 1972:186 は「決定性の語気辞」と述べ、また Kwok 1984 は話し手が真だと信じることを事実として言明する文を表し、言明(assertion)をより強めて「こうなのである」といった語気で文全体を覆う働きがある、と述べている(張洪年 1972:42-43)。また、梁仲森 1992 は事実についての判断や事件の必然性を予測することを表すと述べる。

しかし、これらの主な先行研究では文末助詞 g-が構造助詞の“嘅”とどのような意味的つながりを持つのが明らかにされていない。その中で Fung 2000 では両者の意味的関連に着目し、前者の意味を後者の持つ名詞化(nominalization)の機能から導こうとしている(Fung 2000:146)。その結果 g-の特徴を、[situationally given, deictic, focus]であると結論付け、さらに文末助詞 g-を deictic の特徴を持つという共通点において量詞の go3(個)、指示詞の go2(個)、指示代詞 gam2(嘅)と関連付け、これらの機能語が一つの大きなグループをなすと提案する。しかしながら、名詞化することがなぜ g-の特徴として挙げた 3 つの特性と結びつくのか、説得的な論考となっておらず、またそのうちの一つの特性 deictic に基づいたより大きなグループの存在についても大いに検討の余地がある。

本稿でも文末助詞 g-の意味機能は構造助詞の“嘅”のそれから導かれると考えるが、以下のように考える。

周知のように構造助詞“嘅”はモノ化の働きを持つ。⁷

(17) 大「大きい」 → 大嘅「大きいもの」

大 嘅 三蚊, 細 嘅 一蚊。(Fung 2000:144)

大きい 3ドル 小さい 1ドル

[大は3ドル、小は1ドル]

(18) 讀中文「中国語を勉強する」 → 讀中文嘅「中国語を勉強する者」

我 係 讀 中文 嘅。

私 ~だ 勉強する 中国語

⁶ 梁仲森 1992:87 や Matthews & Yip 1994:129,349 では本稿の言う構造助詞“嘅”と文末助詞 g-とを明確に分けずに説明されており、一貫性のないものとなっている。

⁷ ただしここで言うモノ化とは、木村 2003 が普通話の構造助詞“的”について述べるところと同様、意味レベルのモノ化を指し、統語レベルの名詞化ではない。広東語の“嘅”も“的”と同じく日本語の“の”に見られるような文の名詞化機能を持たない。したがって、統語レベルの名詞化(名詞代替)ではなく意味レベルのモノ化と考えるのが妥当である。ゆえに、広東語の文末助詞 g-は、「文の名詞化」を基盤とする日本語の「のだ」とは異なる性質を持つ。

〔私は中国語専攻だ。〕

このような“嘸”のモノ化機能が命題(言表内容)目当てに拡張されたのが g-だと考えられる。つまり、命題が表すところの事態ないしデキゴトというのは本来的には個別的で一回的な性質を持つものである。このように、事態やデキゴト(まとめてコトと呼ぶ)が特定の時空間上に生起する一回的なものであるのとは対照的に、モノというのは時間性や個別性とは無縁の性質を持つ。したがって、コトをモノ化(非コト化)するということは、そこから時間性や個別性を捨象することを意味する。

ゆえに、命題をモノ化する g-は、命題(言表内容)の個別性を捨象し、それがあつ種的一般的・普遍的性質を持つものであるかのように変える機能を持つ。つまり、命題をあつかも「～というものだ」、「～ということになっている」というように、一般的言明であるかのように提示するわけである。⁸

張洪年 1972:186 が言う「決定性」のムード、或いは Kwok 1984:42 の言う “It is a fact that...” 「事実はこちらなのだ」という但し書き的な意味は、このように命題を一般的なものとして提示することから生じる効果である。

(19) 佢 唔 會 去 ge3。(Kwok 1984:42)

彼 [否定] [可能性] 行く

〔彼は行かない。〕

例(19)のように、「彼は行かない(見込みだ)」という命題は、普遍的・恒常的言明として「彼は行かないということになっているのだ」というように提示する方が、話し手個人の見解として述べられるより決定的で確信に満ちて聞こえるのは当然である。

以上のことから、本稿では文末助詞 g-の意味機能は「命題の一般化」であるとする。命題の一般化とは言表内容から個別性を除去することにより、言表内容の性質を変えようとする話し手の命題に対する態度表示の一種である。以下で述べるように g-は平叙文だけではなく疑問文にも生起する。このような疑問文に現れる g-については先行研究の言う「決定性の語気」や「言明の強め」ではうまく説明できないが、本稿のように定義づければ、平叙文だけでなく疑問文における生起も問題なく説明でき、なおかつ構造助詞“嘸”の持つモノ化の意味機能とのつながりも説明できる。

3.2. 命題の一般化の動機—疑問文を例に

文末助詞 g-の意味は構造助詞“嘸”との関連から、命題の一般化と定義された。次に以下では g-によって命題の一般化が発動される動機について考察したい。

以下の考察は専ら疑問文について行われる。先行研究では g-(嘸)の意味について「決定性の語気」や「言明の強め」と記述することからわかるように、平叙文における用法を専ら考察

⁸ 小野 2001 は普通話の“要～的”、“會～的”に現れる“的”を語気詞であるとし、“的”のモノ化機能が関わっている可能性を述べる。

していたと思われ、疑問文に現れる場合は考慮されていなかった。⁹本稿では g は命題の一般化を表す標識であると考えるので、平叙文においても疑問文においても同じように妥当であることを証明するため、以下では疑問文のみを取り上げたい。

上述の通り、文末助詞 g は平叙文の場合は話し手が命題を一般化することで、あたかもそれが一般的・普遍的な言明であるかのように変え、決定的で確信に満ちた語気を表すのであった。一方、疑問文に生起する場合は命題を一般的なものとして提示することで、話し手としては普遍的・一般的なレベルの言明に関心があることを示し、ひいては聞き手からも一般化された命題を引き出すことを期待しているのである。

なお、2章で述べたように、広東語では平叙文であろうと疑問文であろうと何らの文末助詞も伴わない発話は現実には極めて少ない。疑問文の場合は Kwok 1984:71 が言うように、文末助詞がない発話はぶっきらぼうに響くため、通常 a3 という文末助詞が語調を緩和するために伴われる。¹⁰したがって以下で論じられるのは、“[命題]+a?” (無標)と “[命題]+ga3?” (gあり)ということになる。

3.2.1. 脱個人化——普遍化志向

文末助詞 g による命題一般化が発動される状況の一つは、例(19)で既に見たような、「～ということになっている」とでもいった一般的性質のものとして示す場合で、命題に対する個人的コミットメントを放棄するという、命題の<脱個人化>である。したがって以下の疑問文の例では聞き手から<脱個人的>命題を引き出すことを期待している。

(20) 醫生:你 嘅 病 已經 好 翻 晒 la3 bo3! 恭喜 你!

あなたの 病気 既に よい[回復][全部] SP SP おめでとう あなた

[病気はもうすっかりよくなりましたよ。おめでとう。]

羅拔圖:真係 ga4? 會 唔 會 再 發 ga3, 醫生?(903:311)

本当だ SP [可能性][否定][可能性] 再発する 医者

[本当ですか? 再発したりしませんか、先生?]

(21) P:...我 諗住 叫 埋 你 一齊 去 ga3。

私 するつもり 呼ぶ [拡充] あなた 一緒 行く

[お前も一緒に呼ぼうかと思ってたんだ。]

占:吓? 係 唔 係 ga3!? (閃:56)

intj ~だ [否定] ~だ

[何? 本当か?]

このように聞き手から<脱個人的>命題を引き出すことを期待する動機にはしばしば話し手(問い手)の側に、(20)のような不安や(21)のような疑いの念がある。そこで、話し手はそ

⁹ 平叙文のみを考慮していたというよりは、あらゆる環境において現れる g を一つの文末助詞であると見なさなかったという方が実情にあっている。

¹⁰ a3 の意味機能については6章で詳述する。

第4章 B類 命題の一般化

ういった疑念を解消すべく、より確定的な返答を引き出そうと試み、聞き手(答え手)から一般化された言明による返答を得ることを期待するのである。返答は聞き手<個人>の見解として提示されるよりは普遍性のある言明として提示される方がより確実に聞こえるからである。

このような<脱個人的>コミットメントを要求する例として次のような例がわかりやすい。

(22) 生 BB 痛 唔 痛 ga3?

生む 赤ちゃん 痛い [否定] 痛い

[子供を生むのって痛いの?]

「痛い」という形容詞は多分に個人的な感覚に基づいた評価を表すため、無標の疑問文“生BB痛唔痛 a3?”は、例えば父親や男性のように、出産を直接経験していると思えない人に尋ねるものとしては非常に奇妙である。したがって、(22)のようにg-を用いて命題に<非個人的>に関わるよう指定し、「あなたの個人的見解としてではなくて、一般的に言って、出産は痛いものなのかどうか」といった問い方をするしかない。

これとは裏返しに、聞き手のその場での感覚や意志などを表す命題は、g-によって<非個人的>命題として取り上げると逆に有標的な疑問文となり、疑念解消を試みる確定要求的語気を伴う。それは聞き手自身の直接経験であるのに聞き手個人からわざと切り離れた問い方をするからに他ならない。

(23) 你 睇唔睇到 ga3?

あなた 見える-見えない

[見えてるのか?]

(24) 你 想 唔 想去 ga3?

あなた ~たい[否定]~たい 行く

[(本当に)行きたいのか?]

3.2.2. 脱一回性——恒常性志向

g-による命題一般化のもう一つの動機は、命題が発話場その場だけに関与する一回的な性質を持つものでないことを示す、<非一回的>な命題の提示の仕方を行う場合である。たとえば次のペアーを比較してみよう。

(25) 你 飲 唔 飲 酒 a3?

あなた 飲む [否定] 飲む 酒

[お酒飲みますか?]

(26) 你 飲 唔 飲 酒 ga3?

あなた 飲む [否定] 飲む 酒

[お酒飲みますか?]

この2文はどちらも「あなたはお酒を飲みますか」という意味の疑問文であり同じ命題を持つが、命題の提示の仕方が異なる。(25)はこの場において一回的な関わりのある事態とし

て命題を提出するため、場合によっては「お酒飲みませんか?」といった誘いかけの機能をもち得る。一方、(26)は g-を含む疑問文であるから、話し手が命題の<非一回的>な性質に関心があることを示している。つまり、命題の表す事態の恒常的な性質が取り上げられるのである。したがって、飲酒習慣を持つかどうかを尋ねることになり、発話の場における聞き手の一時的意向を問題にした誘いかけ機能は持ち得ない。¹¹

このような聞き手の習慣を問う具体例を以下に挙げておく。

(27) (レストランで音楽を聴きながら音楽の話をしているところ突然話題を変えて)

朗: 你 睇 唔 睇 波 ga3?

あなた 見る [否定] 見る ボール

[君はサッカーは見るの?]

羅拔圖: 淨係 知 有 個 球員 叫 巴治奧!! (903:316)

だけ 知る ある CL 選手 ~という

[バジジオっていう選手がいることしか知らない!]

また次の例も命題を非一回的な性質のものとして提示しようとしたものである。

(28) (インターネットで知り合ったお互いに顔を知らない相手に向かって)

我 識 唔 識 你 ga3? (網)

私 面識がある [否定] 面識がある あなた

[私はあなたのこと知ってるでしょうか?]

「私は家に帰りたいですか?」などという問いがおそらく何語においても意味をなさないように、会話の場における話し手自身の知識感覚は話し手には自明であるため普通は疑問文化できない。同様に、無標の疑問文「我識唔識你 a?」「私はあなたのことを知っていますか?」は、命題を発話の場である「今ここ」においてのみ関わらせることになるので、話し手自身のその場の知識感覚を問うナンセンスな疑問文となる。しかし、一回的な発話の場を離れた恒常的属性としての知識状態であれば、話し手以外の者にもうかがい知ることができる。(28)では g-が必要になるのは命題を発話が行われる「今この場」から引き離すことで、話し手自身の恒常的な性質を問題にしようとするからである。

このように、当該命題が「今この場」だけに関わるのではない、という<脱一回的>な性質であることを示そうというのも g-の発動動機であると考えられる。

3.3. まとめ

以上、g-の命題一般化には<脱個人化>と<脱一回化>という二つの側面があることをみてきた。これらの動機付けは結局は命題を一般化するという二つの側面にすぎないわけであるから、実際には多くの例において両方の動機が関与し、どちらとも分かちがたいことが多い。

いずれにせよ、命題の一般化というのは、当該命題を<個人>のものから引き離すという

¹¹ 逆はありえる。すなわち(25)が文脈などにより習慣を尋ねる文として用いられることは妨げない。

第4章 B類 命題の一般化

ことと、<一回>限りの場面から引き離すという、2つの線に沿って行われ、いずれも個別性を捨象するということを志向する。このようにコトの個別性を捨象する作用を持つ点において、構造助詞の“嘸”の持つモノ化機能とつながりを持つと考えられる。

4. 4章のまとめ

この章ではB類文末助詞gについて考察した。gは構造助詞“嘸”のモノ化の意味機能が、命題のレベルにおいても引き継がれたもので、命題のモノ化を行うと考えられる。命題のモノ化とは、命題を一般化するということで、命題を<非個人的>・<非一回的>な性質のものとして扱う働きを担う。

第5章 C類 事態に対する見立て

1. はじめに——形式の整理と先行研究

この章では2章の分類によって帰納されたC類の文末助詞の意味機能を考察する。

C類はl-とj-から構成され、B類とD類の間に位置する。これらはB類のg-と同様、後に他の形式を伴う場合、韻母の部分は後続形式の音声の影響を受けて様々な形態で現れ、声母のl-、j-だけが不変である。後続形式がなく単独で生起する場合の単独形式として、l-にはla3とlaak3があり、j-にはje1とjek1がある。¹

l-の単独形式の一つであるla3(喇)は“吃了₁飯了₂”「ご飯を食べた」の“了₂”に相当し、後述するように「新しい状況の出現」を表すとされてきた(Kwok 1984:46、李新魁等 1995:505)。²

(1) 而家 唔 啱 著 la3・(Kwok 1984:47)

今 [否定] 合う 着る

[(服が)今ではもう合わなくなった。]

一方、laak3(嘞)は意味や生起の仕方はla3とほとんど同じだが、より確信度が強いとされる(Kwok 1984:48)。李新魁等 1995もこの両者を基本的に同義とするが、la3の方がより口ぶりが重く、感嘆のニュアンスを含むこともあると言う。本稿ではこれら二つの形式も共にl-を含むと考える。

なお、多くの先行研究でla3やlaak3と関連すると見なされる形式にlo3(嘍)、lok3(咯)がある。lo3はそれ自身で現れる単独形式であり、l-が後続のwo3に同化して生じる異形態(lo3wo3の[lo3])とは区別されなければならない。lo3はla3と似た意味を持ち、同じような文脈で出現することができるが、起こったことの「取り返しの付かなさ」に重点があると言う(Kwok 1984)。

(2) 佢 瞓 咗 好耐 lo3・(Kwok 1984:48)

彼 寝る [完了] 長い間

〔彼はもうずっと寝てるよ。〕

また、lok3はlo3よりも状況の不可避性や修復不可能性の意味が強いと言われている(Kwok 1984:49)。本稿もlo3とlok3はla3、laak3と意味的に関わりが深いと考えるものの、現段階ではその位置付けが不明であるため、本章で述べるl-には含めて考えない。³

以下で議論の対象になる、l-を含む単独形式及び複合形式の全ては次の通りである。l-に

¹ あるいはこれらも何らかのD類形式と縮約を起こしてできた複合形式と見なすこともできるかもしれないが、その問題をこれ以上議論することは当面の関心事ではない。ただ後で述べるように、本稿はB類、C類は単独では生起することがなく何らかの後続形式を伴ってはじめて生起すると考える。(第7章1.2.)

² ちなみにこれに相当する広東語は“食咗飯喇”となり、いわゆる“了₁”と“了₂”に当たるものには全く異なる形式が用いられる。そこで、普通話ではあり得ない“吃了₁了₂”は“食咗喇”と言い表される。

³ la3とlo3の関係はD類のla1とlo1の關係に平行すると推測されるが、現段階ではこれ以上検討することはできない。

D類が続く際には同化・縮約といった現象が起こることがある。

(3) {la3,laak3,l+D類}

C類のもう一つの構成員であるjについては、従来の先行研究ではje1“啫”、jek1“啣”といった単独形式と、ja3“咋”(j+ɹa3)、jilma3“之嘛”(j+ɹalma3)のような複合形式がそれぞれ個別に取り上げて意味記述がなされていた。例えばKwok 1984はje1とja3を別個に項目を設けて意味記述を行うが、いずれも“only”「～だけ」の意味を表し、しばしば機能において重複が見られると言う。4一例を挙げておこう。

(4) 學 咗 十 幾 個 鐘頭 ja3。(Kwok 1984:53)

習う [完了] 10 いくつか CL 時間

[10 数時間習っただけよ。]

(5) 三 蚊 je1。(Kwok 1984:53)

3 ドル

[たった3ドルじゃないか。]

李新魁等 1995:514はこれらの単独形式や複合形式は微細な違いを持ちながらも、全て“往小裡評估”「低く評価する」という意味を表すことを指摘した。Fung 2000はさらにjという声母で始まる一群の形式を一つのグループとして扱い、共通の意味を帰納し、jの本質的意味を制限(restriction)と見なした。

本稿もFung 2000と同様、jを含む形式には、単独形式であれ複合形式であれ、全て共通の意味が含まれていると考え、jという声母でこの形式を代表させる。以下で議論の対象となるjを含む単独・複合形式の全てを挙げておく。なお、jにD類が続く際には同化・縮約といった現象が起こることがある。

(6) {je1,jek1,j+D類}

(3)(6)で挙げた単独・複合形式は、個々の形式の意味はl、j以外の後続の部分の違いに応じて当然それぞれ異なるが、いずれもl、jという声母を共有することから意味的な共通性を含む。l、jの意味は先行研究では概略それぞれ「新しい状況の出現」、「過小評価」のように説明されてきたとまとめられる。

既に述べたように、C類はlとjの二つから構成され、これらは互いにパラディグマティックな関係にあり排斥しあう。

(7) *唔 計 今日, 淨 翻 三日 ja3la3 / la3ja3。

[否定] 勘定する 今日 残る [回復] 3日

[今日を計算に入れなければ残り3日しかなくなった。]

この章では、C類の各成員が持つ意味と、lとjとが互いに排斥しあうという言語事実がどう結び付けられるのかという問題の究明を行い、C類全体の持つ意味特徴を明らかにしたい。

4 普通話では文末助詞“而已”がjに近い意味機能を持つ。

2. 1-の意味機能

1-については前述のように先行研究では「新しい状況の出現」とされてきた。いくつか用例を見ておこう。

(8) 天 黒 la3。(Fung 2000:79)

空 暗い

[空が暗くなった。]

(9) 辛苦 咗 咁 耐, 終於 寫 完 本 書 laak3。(Matthews & Yip 1994:350)

苦勞する[完了] こんな 長い ついに 書く 終わる CL 本

[ずいぶん長らく苦勞してきたが、ついにその本を書き終えた!]

(10) 蔣生:羅拔圖 响 邊 a3?

ロバート いる どこ SP

[ロバートはどこ?]

芝: 哦! 羅拔圖 冇 做 呢度 la3 wo3。(903:87)

intj ロバート 無い する ここ SP SP

[ああ。ロバートはもうここをやめましたよ。]

このように 1-が付く言表内容(文)全体が表す事態、「空が暗い」(8)、「ついにその本を書き終えた」(9)、「ロバートはここで働いていない」(10)が「新しい状況」として提示されている。

このように一見すると 1-もコトの時間的あり方に関わると考えられそうである。

しかし、3章で述べたように、A類コト目当て形式“住、嚟”は主に述語が描く<コト>が時間的にどのようなありさまで現実に現れているかを描き出す形式である。これらは客体的事実として文が叙述する事柄的意味の一部である。他方、1-は主語述語を含めた文(言表内容)全体が表す事態について、話し手がそれを「新しい状況」と主観的・能動的に見立てることを表す。

ここで「新しい状況として見立てる」という点について注釈しておきたい。

新しい状況というのはそれ以前の古い状況との間に意味のある区別を設定してはじめて認識されるものであるが、1-は話し手が自分もしくは聞き手との関係において、ことさらに当該の状況とそれ以前の古い状況との間に区切りがあるかのように見立てて述べる言表態度を本質的機能とする。したがって、客観的事実として新しい状況が立ち現れたことを描くことに本質があるわけでは決してない。

このように、話し手が自分もしくは聞き手との関わりにおいて、意図的に「新しい状況」と見立てて、それ以前の状況との間に区切りを設けるような述べ方をするには様々な動機が考えられるが、本稿でそれを網羅的に検討する準備はない。

ここではほんの一例を見てみよう。

(11) 羅拔圖:咁 你 實 唔 知 佢 去 咗 邊 ga3 la1!

では あなた きつと [否定] 知る 彼 行く [完了] どこ SP SP

「じゃあ彼がどこに行ったか絶対知らないでしょ？」

DJJohn: 唔使 打 俾 佢 la3, 電話 cut 咗! 嘩! 佢 都 好嘢 bo3!...(903:141)

不必要だ かける ~に 彼 電話 切る[完了] intj. 彼 も すごい SP

「やつに電話しなくていいよ。電話切られてるから。おっと。やつも大したもんだぜ。」

これは「これまでは彼に電話しなければならなかったが、今ではしなくてよくなった」という客観的事実として新しい状況の出現を言いたいのではない。話し手自身は電話しなければいけない、または電話しようとは後にも先にも考えてはいない(なぜなら電話線が切られているのを知っているから)。むしろ、聞き手が「電話をかける必要がある」と想定している(らしい)のを受けて、「電話しても無駄だからしなくてよい」という事態を聞き手にとって新たな状況として見立てていると考えられる。これが聞き手との関わりにおいて状況の変化だと見立てて述べるということの一つの表れである。つまり、ここでは聞き手の想定を取り込むことによって事態を新状況と見立てているのである。

また、次の例でも同じように聞き手との関係において、I-を用いて新状況出現だと見立てることが動機付けられている。

(12) Naughty: 等 我 扮 吓 攞枕 先! 似 唔 似 a3?

させる 私 真似る 少し 抱き枕 SP 似る [否定] 似る SP

「枕のふりしてみようっと。似てる？」

公主: 似 la3, 似 la3, 晩晩 都 霸 咗 我 半邊床~。(網)

似る 似る 毎晩 みな 占領する[完了] 私 ベッドの片側

「似てる、似てる。毎晩ベッド半分占領してくれちゃって~。」

「(君が枕に)似ている」という事態が今(発話時)に実際に新しい状況として現れたという客観的な状況変化を表現しようとするのではない。また、後述するように、I-は話し手の認識変化を表すこともできるが、ここでは「(それ以前は似ているとは思っていなかったが)今では似ていることを意識した」という話し手の認識変化そのものを伝えることが動機としてあるわけでもない。そうではなく、そういう認識変化があたかも生じたかのように述べてみせることで、ひいては「今では似ていることを認めたから、もうそれ以上きかないでくれ」とでもいった、多少煩わしそうな口ぶりを(繰り返すと相まって)聞き手に伝えたいのである。つまり、聞き手とのやりとりないし関係において事態「似ている」を「新しい状況」として見立てることが動機付けられているのである。

新しい状況というのは文字通りに解釈すれば古い状況と対比的に考えられるもので、時間の流れを想定したものである。しかし、I-による新状況の見立てには必ずしも現実の時間の流れは必要はない。⁵

⁵ 定延 2002 はデキゴトには現実の時間の流れを含まないものがあることを指摘し、人間が環境に対して「そこはどんな様子なのか」と働きかける「探索」や、人間が環境から情報を受け取る「体験」は「状態をデキゴト化する」という趣旨のことを述べている。このように現実の時間の流れを想定しない認知体験をもあたか

(13) Peter: 嘩, 部 電話 a3, 我 幫 你 俾 咗 錢 ga3 la3. 你 出糧

ほら CL 電話 SP 私 助ける あなた お金を払う[完了] SP SP あなた 給料が出る

先 分期 付款 俾 我 la1.

分割で 支払う ~に 私 SP

[ほら、電話だよ。代わりにお金は払ったから。給料が出てから分割で払
ってくれ。]

陳: Peter, 你 實在 太 好朋友 la3. (19:117)

あなた 実に ひどく よい友達

[ピーター、お前は本当になんて友達がいるんだ!]

ここでは“好朋友”「友達がいる」の程度の度合いが時間軸になぞらえて見られてお
り、時間軸における「新状況出現」という状況変化に横して捉えられるのは程度の尺度にお
ける「もうこれ以上あり得ない」という限界点への到達である。そこで、「これ以上に友達
いのある状況は考えられない」という意味を表すことになる。

なお、上述の(8)(9)(10)(11)のような例が言表内容で表される事態を(話し手もしくは聞き
手との関わりに動機付けられて)新状況と見立てていたのに対して、次の例では話し手の認
識状態そのものが「新しい状況」だと見立てられている。

(14) Vicky: 有 冇 諗住 拍 喇 咩嘢? 或者 嚟緊 有 冇 咩嘢 大計劃

ある 無い 考える[持続] 撮る CL 何 あるいは 近いうち ある 無い 何 大きな計画

係 想 接 拍 喇 咩嘢 戲 咁?

~だ ~たい 引き受ける 撮る CL 何の 映画 みたいだ

[何か撮影するつもりはあるの?あるいは近い将来に何か大きなプロジェク
トはある? どういう映画の仕事を引き受けたいか、みたいなの?]

Jackie: er... 冇 wo3, 哈哈~!!... 好 被動 ga3, 唔係 你 話 想 接 咩

intj. 無い SP ははは とても 受動的 SP [否定]~だ あなた 言う ~たい 受ける 何の

戲 就 有得 接 ga3.

映画 ~なら できる 受ける SP

[う~ん。ないね。ははは。すごく受け身のなんだ。こうこうこういう映画
が撮りたいからってすぐにそんな仕事ができるってわけじゃないんだ。]

(Vicky & 德仔: 唔!)

intj

[ん。]

Vicky: 即係 睇 機遇 laak3?

つまり 見る めぐり合わせ

も時間上に生起するデキゴトかのように見なすとすると、「新状況の出現」という見立てについても説明が
しやすくなる。なお、木村 2003 においても普通話の“了₂” (広東語の1に相当)の説明に、定延氏の議論
が有用であることが述べられている。

[つまりめぐり合わせによるってことだね?]

Jackie: 係 a3.

~だ SP

[そう。]

(14)は聞き手の言おうとすることが何であるかについて正解と思しき内容“睽機遇”「めぐり合わせによる」に思い当たったことを表す。ここでは話し手の発話時の認識状態を「新状況」として見立てることで、正解への到達という意味を表している。

また、Kwok 1984 が疑問文助詞と見なす“la3wo3”に含まれる“l-”も同様に考えられる。

(15) (ペンキを入手した店の所在地を説明してもらっているくだりで)

即係 近住 電車路 嘸度 la3wo3? 嘸 横街 嘸度 la3wo3? (Kwok 1984:94)

つまり 近い[持続] トラム 道 あそこ ~にある 横道 あそこ

[つまりトラムの道に近いあそこだな? 裏通りのあそこだな?]

“la3wo3”の“l-”はやはり言表内容をめぐる話し手の認識状態を新状況として見立てる「認識変化」の表現である。wo3は聞き手の情報更新を促す伝達の仕方を表す形式であるが、ここでは話し手自身に再帰的に向けられている(6章で詳述)。

これら(14)(15)の場合は(8)(9)(10)のような例とは異なり、もはや言表内容で表される事態を話し手もしくは聞き手との関わりにおいて新状況と見立てているのではない。これらは振る舞いの点でも異なる。例えば次の例は(15)と同じく話し手の認識状態における「新状況の出現」(認識変化)を表すが“未”「まだ~でない」という否定詞と共起できる。

(16) A: 咦, 罐 嘢 過 咗 期 wo3.

intj CL もの 期限が切れる-[完了] SP

[あれ? この缶(詰)期限切れてるぞ。]

B: 唔係, 嘸 個 係 出產日期, 唔係 有效日期 wo3.

いいえ その CL ~だ 製造年月日 [否定]~だ 有効期限 SP

[いや、それは製造年月日で賞味期限じゃないよ。]

A: 咁 即係 未 過期 la3wo3?

では つまり [未実現] 期限が切れる

[ってことはまだ期限切れじゃないってことだな?]

他方、言表内容が表す事態「まだ教会に行っていない」そのものは新状況として見立てることが困難である。

(17) *佢哋 未 去 禮拜堂 la3. (Yiu 2001:114)

彼ら [未実現] 行く 教会

[*彼らはまだ教会に行かなくなった。]

これはl-によって新状況出現を述べることと、“未”「まだ~でない」による事態の未実現という捉え方とが抵触するからであり、このように文の事柄的意味によって「見立て」が制

限を受けることがある。

1-が用いられる様々な動機付けを詳しく考察することは当面の関心事ではないが、このように、(8)(9)(10)は言表内容(文)が表す事態(客体)が「新状況」と見立てるのに対し、(14)(15)(16)は言表内容をめぐる話し手(主体)の認識状態そのものが「新状況」と見立てるというように、1-には少なくともレベルの異なる「見立て」があるということは以下のj-の考察においても関わってくるので指摘しておきたい。

3. j-の意味機能

3.1. 尺度上での位置付け

j-の本質的意味を Fung 2000 は制限(restriction)であると見なし、制限という意味から一種の尺度(価値を図るものさし)や価値評価の意味が導かれるとした。尺度のもとでの「過小評価」という具体例を見ておこう。

(18) 我 見 過 佢 一 次 ja3!

私 会う [経験] 彼 一回

[私は彼に一回しかあったことがないんですよ。]

(19) 酒 ji1ma3, 大把。(方小燕 2003:65)

酒 たくさん

[(たかが)酒だろ? いっぱいあるさ。]

これらは動詞句中の「一回」、名詞「酒」がとりたてられている。すなわち、(18)では回数の尺度において「一回」というのは相対的に度合いが低いと捉えられ、(19)では他のモノとの比較からすると何らかの尺度において「酒」というのは度合いが相対的に低いと見なされている。

また、次のように形容詞が表す性質が問題になる場合もある。

(20) 間 屋 好 細 ja3.

CL 家 とても 小さい

[その家はすごく小さいんですよ。]

この“細”「小さい」のように、一方向のスケール(尺度)において、度合いの小さいことを指し示す形容詞に現れる。すなわち、例えば“大”「大きい」と“細”「小さい」という反義語から成るペアの形容詞は共に一つの尺度上に位置するが、そのうち有標な方(度合いの小さい方)の形容詞と共起することができる。⁶

細「小さい」

大「大きい」

—————>

このようにj-には何らかの度合いを表す尺度において、当該のモノや事態が相対的に小さな値をとることを示す機能がある。従来の研究ではしばしば過小評価と言われてきたが、

⁶ 相原 1976 が言うアナログペアの形容詞ペアのうち程度の低い方を指す。

本稿では尺度における最大値ではないという「度合いの相対的小ささ」を表しさえすればよいと考える。いずれにせよ、次の例が示すように、「相対的な度合いの小ささ」を表し得ない言表内容(文)には現れることができない。⁷

(21) *間屋好大 ja3 / jilma3.

あなた CL 家 とても 大きい SP 歩く全部 [否定] 見える
 [その家はすごく大きいんですよ / 大きいじゃない?]

このようなことから j は言表内容が表す事態・モノが「度合いの少ない要素」と見立てる機能を持つと考える。そして、1の場合と同様、話し手ないし聞き手との関係において事態を「相対的に度合いが少ない要素」と見立ててみせる述べ方を本質的機能とする。「話し手または聞き手との関係における見立て」という点を略述しておく。

(22) (Elgin 通りがあると教えられたレストランを探しているところで)

一條伊利近街好短 ja3 wo3, 行晒都唔見。(網)

CL Elgin 通り とても 短い SP 歩く全部 [否定] 見える

[Elgin 通りってえらく短いじゃないか。全部歩いたけど見当たらない。]

ここでは Elgin 通りにある店を探しているため、Elgin 通りがそれなりの長さがあるだろうという想定があったが、予想外に短かったという発見がある。したがって、当該の事態は「あり得べき状況」と比較して「長さ」の尺度において「度合いが小さい状況」と見立てているのだと考えられる。すなわち、話し手自身との関係において(自己の知識の訂正という意味で)、所与の状況が「相対的に度合いの少ない状況」と見立てているわけである。他方、次のような場合は“短”という同じ形容詞が用いられているが、「長さ」の尺度そのものが活性化されていないので j が使われていないのだと考えられる。

(23) (生活指導の先生に校門で見咎められて)

你一條裙好短 wo3。(網)

あなた CL スカート とても 短い SP

[君のスカートえらく短いねえ。]

ところで、Fung 2000 で詳細に論じられているように j には実に様々な用法があり、以上の例とは異なり言表内容が描く事態そのものに対して尺度を想定することができない場合がある。例えば Fung 2000:63 が譲歩を表すとする(24)などがそれにあたる。

(24) 呢邊整好咗 je1, 嗰邊仲未 ga3。(Fung 2000:63)

こちら 修繕する [完了] あちら まだ [未実現]

[こっちはできたよ、確かに。でも、あっちはまだだよ。]

また、Fung 2000:48-49 が論駁あるいは嫉妬などを表すという je1 があるが、これは形容詞“大”「大きい」が尺度上で占める位置とはもはや関係がないので“大”とも共起できる。

⁷ ただし後述するように je1 は共起できるが、もはや形容詞“大”「大きい」が尺度上で占める位置とは関係がない。

(25) (自分の家が狭いという聞き手に対して)

間屋 好 大 je1. (Fung 2000:48)

CL 家 とても 大きい

[家、大きいじゃない?]

Fung 2000 は j の持つこのような多様な用法について、命題やディスコース、言語行為、認識(epistemic)の領域において「制限」という基本的意味が適用されると見なし、je1、jek1 などの個別の形式の用法を説明しようとしている。

本稿では j は事態を「何らかの尺度において相対的度合いの小さな要素」として見立てることを表し、これらの様々な用法もその線で説明することが可能であると考え。ただし、ここではあらゆる用法を検討することは関心事ではないので、ほんの一例を挙げて見てみよう。

3.2. j の多様な用法

j が対象の度合いを測る尺度は評価的な価値基準(優劣・好悪など)とは本来無縁である。例えば、形容詞や程度を表す語句の場合がそうである。

(26) 咽度 哟 牛仔裤 好 平 ja3. (網)

あそこ CL ジーンズ とても 安い

[あそこのジーンズはすごい安いんだよ。]

これは“貴”「値段が高い」を頂点として“平”「安い」を最低値とする尺度が用いられているが、より小さな値の“平”「安い」に近ければ近いほど、(買い手の立場に立った)社会的な通念からは評価が高い。

また次の例は形容詞の表す性質の程度が尺度になっている。

(27) 考 A level 唔係 好 辛苦 ga3 ja3. (網)

受験する A レベル ~ではない とても つらい

[A レベルの受験はそんなに大変じゃないよ。]

これは形容詞“辛苦”「つらい、しんどい」が表す様子の程度が尺度になっており、例えば“好”「とても」などに比べて“唔係好~”「あまり、たいして~でない」は相対的に度合いが低いと見立てられている。この場合も「あまりつらくない」は、評価的価値判断からすれば「非常につらい」よりは高いはずである。

このように、尺度上で小さな値を取るからと言って、評価的な価値基準の上でも値が小さいとは限らない。評価的基準の上で値が小さい(評価が低い)とは、わかりやすく言えば、「たかが~」、「~にすぎない」という意味である。上の(26)は「たかがすごく安い」あるいは「すごく安いにすぎない」、(27)は「たかがあまりつらくない」または「あまりつらくないにすぎない」とは訳せない。

しかし、このように言表内容の語彙の意味から一方向の尺度が指定されており、その意味で論理的な序列が用意されていることはむしろまれで、多くの場合、尺度には「完全さ」

や「優れている度」といった評価的基準が自然と伴われることになる。

以下でそのような例を見てみよう。

(28) 見 你 努力不懈, 我先作出呢個智慧 嘅 選擇 ja3! (903:57)

見る あなた 努力を怠らない 私こそ なす この CL 賢明な [連体修飾] 選択

[あなたが努力を怠らないのを見てこの賢明な選択をしたまでのことですよ。]

このように j-は“P 先 Q”「P であってこそはじめて Q である」という構文と相性がよくしばしば共起する。これは P が Q 成立のための必要条件である、すなわち、Q の成立には必ず P という条件がなければならないということから、“P 先 Q”という事態(要素)は条件なしで Q が成立する事態に比べれば相対的に小さな値をとるとみなされる。この場合は、「あなたが努力を怠らない」という条件があってはじめて、「私がこの賢明な選択をした」が成立する。

このように、多くの場合には「完全さ」という(絶対的)評価的な基準が用いられる。つまり、条件付きで成立する事態は条件なしで成立することに比べると「不完全」だからである。

このような用法に連続するのが、上で触れた譲歩の用法で、これは j-を含む形式のうち、je1 にのみ見られる。

(29) 呢邊 整好 咗 je1, 嗰邊 仲 未 ga3. (Fung 2000:63) (= (24))

こちら 修繕する [完了] あちら まだ [未実現]

[こっちはできたけど、あっちはまだだよ。]

(30) 雖然 今日 12 點 起身 je1, 但 都係 好 眼瞓 ga3... (綱)

~だが 今日 12 時 起きる しかし それでも 大変 眠い

[今日は 12 時に起きたことは起きたさ、でもそれでも眠いんだ。]

このように je1 には複文を構成する接続機能のような用法があり、後ろに逆接(譲歩)の命題内容を導く。つまり、前件の内容を述べておきながら、後にそれと相対立する内容を伴うことは、前件を反論や対立命題を伴うことなく手放しで述べることに比べると、「不完全」だと考えられるのである。⁸

j-を含む形式の一つ je1 にはさらに上述のように、Fung 2000 が言う論駁あるいは嫉妬などを表す用いられ方がある。

(31) (自分の家が狭いという人に対して)

間屋 好 大 je1. (Fung 2000:48) (= (25))

CL 家 とても 大きい

[家、大きいじゃない?]

論駁については次のように考えられよう。すなわち、これは譲歩のように話し手自身の発話を目当てにしているのではなく、相手の主張する命題(なり想定)を目当てに、それが反

⁸ 日本語の限定を表す副詞「ただ」と関連を持つと思われる接続詞「ただし」が前件に但し書きをつけるのと相通じるところがある。

論ないし対立要件を伴い得るといふ、それだけの価値のものでしかないということを示す。譲歩の場合と同様、何の反論も伴わない命題に比べると「不完全」だからである。

このほかにも *jek1* は Kwok 1984 や Fung 2000 が指摘するように、疑問文や命令文にも生起する。

(32) 喂, 你 拖完地 未 *jek1*? (Fung 2000:43)

intj あなた 床掃除する・終わる [未実現]

[ねえちょっと、床掃除したの?]

Fung 2000:43 では *j* が質問(内容)を「控えめに表し」(downplay)、それによって単純な質問だから聞き手は速やかな返答をすることがわけなくできるはずだ、という含みを持つと言われている。したがって、聞き手の返答を求める質問(反語ではないという意味)では返答の催促を表すという。本稿も基本的にはそのように考えるが、これ以上詳しい議論はここでは行わない。

このように、*j* には少なくとも言表内容で述べられる事態そのものが何らかの尺度において「度合いが低い」と位置づけられる(18)(19)(20)のような例と、譲歩や論駁または質問といった文以上のレベルにおいて「度合いの小さい要素」を見出すような例((29)(30)(31)(32))があり、これらは連続的につながっているものの、先に見たように振る舞いが異なる。

言表内容が述べる事態そのものについての見立てを表す場合は、次のように尺度上で相対的に度合いが低いことを表さない述語とは共起しないのであった。

(33) *間屋好大 *ja3 / jilma3*. (=21)

CL 家 とても 大きい

[その家はすごく大きいんですよ / 大きいじゃない?]

しかし、言表内容(文)が表す内容そのものではなく、文以上のレベルで「度合いの低さ」を言う場合、例えば譲歩(34)や論駁(35)ではその限りでない。

(34) 間屋好大 *je1*, 但係我覺得你 襯唔起 呢間屋 *bo3*...

CL 家 とても 大きい しかし 私 思う あなた 似合わない この CL 家 SP

[家は確かに大きいけどさあ、でも君には似つかわしくないと思うよ...]

(35) (自分の家が狭いという聞き手に対して)

間屋好大 *je1*. (Fung 2000:48) (=25)

CL 家 とても 大きい

[家、大きいじゃない?]

このように *j* による「度合いが低い」との見立てには関与するレベルの違いがあることを指摘しておきたい。

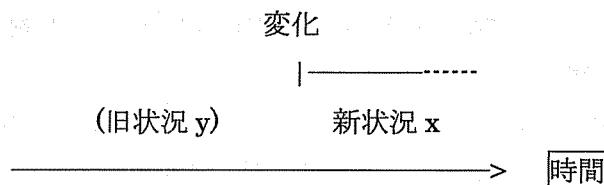
4. Iとjの類似点・相違点

以上のように I 及び *j* は事態への話し手の見立てを表すと考えられた。ここでその類似点を探ってみたい。

第5章 C類 事態に対する見立て

話し手がある状況を「新しい状況」だと見立てるということは、上からの議論で既に明らかであるが、状況変化を捉えるのと同じことである。変化という事象は木村 1997 が言うように完成後の状態を設定してはじめて言及できる性質のものである。したがって、変化という事象を描くには必然的に「新しい状況(変化後の状況)」を設定しなければならない。逆に言えば、ある状況をとりたてて「新しい状況」として「以前の状況」から区別してみせることは、とりもなおさずそこに何らかの意味で<変化>という事象を見い出しているのにほかならない。ある状況 x が「新しい状況」だと見立てるということは同時に「古い状況」 y があったことが含みとして示される。

これを図示すると次のようになろう。



木村 1997 の論考から明らかであるが、変化という事象を捉えるには<時間>の推移が必要である。ただし、上述したように客観的現実の時間の流れがなくても「新しい状況」は生み出される。その場合は現実の時間ではないが、いわば仮想の時間の流れといったものが想定される。したがって、やはり t は<変化>という事象の存在を捉えるからには<時間>とは切り離せない関係にあると考えてよい。

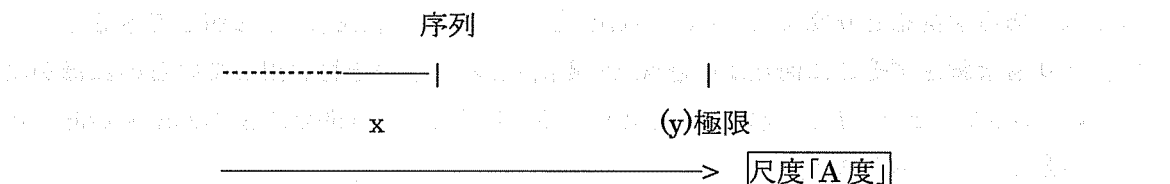
このように、 t は<変化>を見い出す話し手の見立て作用だとも言える。そのことに鑑みて t とパラディグマティックな関係にある j の意味機能を振り返って考えると、 j は<序列(関係)>の存在を捉えようという見立て作用だと考えられる。<序列>というのは何らかの<尺度>のもと、所与の要素を位置付けることで得られる階層的関係のことである。

しかしながら、なぜ序列の存在を見い出すには常に尺度上で相対的に度合いの小さい要素に言及することになるのか、ということについては説明が必要かもしれない。これはしかし序列というものの性質から説明ができると考える。

序列というのは特定の尺度に基づいて本来は同種である複数の要素が差異化された関係と言える。尺度はある一方向の価値付けを持ったベクトルであるから、その尺度の度合いを十分に持っているような要素ばかりいくら言及しても、複数の要素の差異化は得られない。例えば、鳥らしさ度という尺度に基づく序列を想起しようとする場合、鳥らしさの度合いを欠かない(と思われる)要素(例えばスズメやハトなど)をいくら挙げてみても、そこに階層関係(序列)があることが見えてこない。ペンギンやニワトリのような、明らかにその尺度からするとかなり度合いが小さいか、あるいは相対的に度合いが小さい(と思われる)要素について言及してはじめて、階層関係(序列)の存在が確認できるのである。そもそも特定の「～度」という尺度自体、それを用いて要素間に差異を見い出そうという意図のもとに名づけられ、導入されたものであるから、それによって相対的に度合いの小さい要素が一つも見い出されなければ意味がない。

したがって、序列(関係)の存在を捉えるには、わずかでも相対的に度合いが少ない要素(x)に最低限一言及すればよく、度合いの大きい要素(y)の存在は尺度自身の名前(「A度」の「A」が表す性質)から自動的に含みとして理解される。

これを図示すると以下のようなだろう。



これはちょうど1によって<変化>を見出すプロセスとよく似ている。<変化>が時間軸上で「新しい状況」を設定することで捉えられるのと同様、<序列>は尺度軸上で「度合いの小さい要素」を設定することで捉えられるのである。

このように<時間>や<尺度>といった一方向のベクトルの上で当該の状況 x に関する見立てを行う点では1とjは似ている。しかし、もちろん違いもある。

まず、jは当該の状況を<尺度>において「相対的に度合いの小さい要素」として見立てるのであるが、対象はモノであってもよい。そこで名詞句だけからなる文に自由に現れる。

(36) 酒 jilma3, 大把・(方小燕 2003:65)

酒 たくさん

[酒だろ? いっぱいあるさ。]

このように、jは「酒」とその他のモノというように個体どうしを比較できる。

他方、<時間>の上で「新しい状況」を捉える1は、対象はモノではなくコトであり、したがって述語は名詞句でないのが普通である。たとえば、「春天 laak3!」「春だ!」(彭小川 1996b)のように名詞句「春天」が述語として現れても、それは「(今は)春だ」というコト(デキゴト)として捉えているのであって、モノとして、個体として見ているのではない。したがって、どのような名詞句でも自由に生起するわけではなく、季節の変化のような自発的变化を暗示し得ない名詞句、例えば「酒 laak3」「??酒になった」などとはおよそ言うことができない。

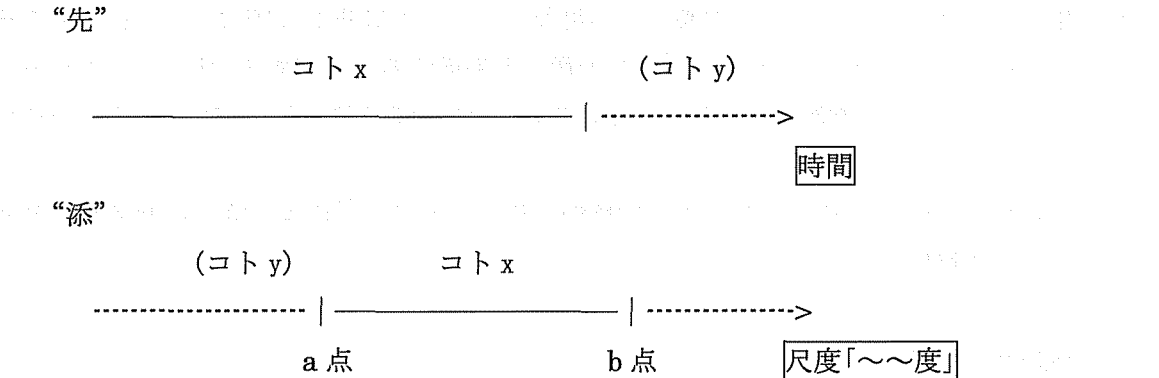
また例えば、jには言表内容が描く事態目当ての序列関係のみならず、前後の発話との関係において序列の構築が見られた。je1による譲歩接続や論駁がその一例である。これは1には見られない特徴である。

このことは序列の構築は既に存在が確認されている要素 x の尺度上での位置付けから始められることを考えれば不思議なことではない。一方、1は変化を捉える。変化とは既述したように完成後の状況を設定することではじめて存在が確認される性質を持ち、完成前には何も存在しない。したがって、当該の言表内容を話し手が発する前に予め存在する先行発話や想定などに関連付けることはない。そのような性質の違いから1には譲歩や論駁といった発話の関係付け機能が見られないのだと考えられる。

なお、<変化>には<時間>、<序列>には<尺度>という概念が必要である。ここで見られた

第5章 C類 事態に対する見立て

<時間>と<尺度>の対立は、コトの関係のあり方を示すA類の“先”と“添”において見られたものと平行しているとも考えられる。すなわち、“先”は当該のコトxが別の非明示的なコトyよりも時間軸の上で先行するよう配置する。一方、“添”は当該のコトxを既に存在するとされる別のコトyの上に追加することで、尺度における目盛りをa点からb点へと進ませるのであった。



このようにA類のコトの関係付けで用いられる<時間>と<尺度>がこのC類の話し手の見立てを表す1-やj-においても利用されていると考えるのもあながち無理ではないだろう。

5. 5章のまとめ

C類にはj-と1-とが属し、共に事態を話し手が様々に見立てることを表す。すなわち、言表内容が表す事態を、それぞれ「新しい状況」(1-)、「相対的に度合いの小さい要素」(j-)であると見立てる。話し手によるこのような見立ては、話し手自身または聞き手との関係において動機付けられている点で言表態度の一種だと考えられる。

ただ、1-には客体としての事態が「新しい状況」であるとの見立てを行う基本的用法以外に、言表内容をめぐる主体(話し手)の認識状態が「新しい状況」であると見立てる認識変化表示の用法がある。また、j-にも先行発話もしくは当該の発話そのものが「相対的に価値の低いもの」と位置付ける拡張用法がある。

このように事態を「新しい状況」、「度合いの小さい要素(価値の低い要素)」だと見立てることは、言い換えればそれぞれ<変化>(1-)や<序列>(j-)の存在を捉えようとする話し手の見立て作用でもある。

第6章 D類 言表内容の差し出し方

1. はじめに

2章で述べたように、文末助詞連用に当たって最後尾に位置する形式は、構成員が非常に数が多い。そこで、D類内部の体系的分析を行うには文類型への生起という別の文法特徴を適宜用いる必要がある。また、声調だけが異なるといった音声的な類似を互いに有する形式が多く見られることから、同時に音声的特徴にも配慮する必要がある。例えば、a3とa4、wo3とwo5はそれぞれ声調だけを異にしているが、意味的関連性を持つ可能性があると仮定できる。

この章では、D類の個々の形式の意味機能の検討を通じて、D類内部にも体系性が認められることを指摘したい。

2. 発話内容の種類

D類に属す成員は夥しいが、平叙文・疑問文・命令文の三種類の類型いずれにも生起し、文類型を拘束しない形式は決して多くない。具体的には以下のa3、wo3及びa1に限られる。

(1) 佢 早 過 我 一個禮拜 到 香港 a3。 [平叙文]

彼 早い より 私 一週間 着く 香港

[彼は私より一週間早く香港へ着いたんだよ。]

(2) 唔好 食煙 a3! [命令文]

～するな タバコを吸う

[タバコ吸うなよ!]

(3) 有 乜嘢 玩 a3? [疑問文]

ある 何 遊ぶ

[何して遊べるの?]

(4) 佢 早 過 我 一個禮拜 到 香港 wo3。 [平叙文]

彼 早い より 私 一週間 着く 香港

[彼は私より一週間早く香港へ着いたぞ。]

(5) 唔好 話 俾 人 聽 wo3。 [命令文]

[禁止] 話す ～に 人 聞く

[他言するんじゃないぞ。]

(6) 做乜 唔 睇 wo3? [疑問文]

なぜ [否定] 見る

[なんで見ないのよ?]

(7) 我行 講 佢 a1, 點解 佢 對我 黑口黑面 ge2? [平叙文]

私 無い 言う 彼 なぜ 彼 に 私 仏頂面

[彼のことなんか言っていないわ。どうして彼は私に怒った顔するのよ?]

(8) 請 入 嚟 坐 a1! [命令文]

どうぞ 入る 来る 座る

[どうぞ中へ入ってくつろいでください。]

(9) 試 唔 試 a1? [疑問文]

試す [否定] 試す

[試してみる?]

このうち、a1 は実際には平叙文への生起はそれほど自由ではなく、どんな言表内容にでも後続するわけではない。

(10) ??佢 早 過 我 一個禮拜 到 香港 a1。

彼 早い より 私 一週間 着く 香港

[彼は私より一週間早く香港へ着いたわ。]

(11) ??村長 唔 想 有 意外 發生, 叫 我 嚟 睇住 你哋 a1。

村長 [否定] たい ある 事故 起こる 命じる 私 来る 見張る あなた達

[村長は事故が起こってほしくないのので私に君たちの見張りに来るよう命じたよ。]

a1 については本稿では詳しく検討することはできないが、平叙文に生起する場合は「申し開きをする」(李新魁等 1995:510)ニュアンスを持ち、自分の意見を述べるなど、何らかの特別な文脈が必要になる。そこで、(10)(11)のように単純に出来事を語る文には用いられにくい。一方 a3 や wo3 は問題なく生起する。

(12) 村長 唔 想 有 意外 發生, 叫 我 嚟 睇住 你哋 a3。

村長 [否定] たい ある 事故 起こる 命じる 私 来る 見張る あなた達

[村長は事故が起こってほしくないのので私に君たちの見張りに来るよう命じたんだよ。]

(13) 村長 唔 想 有 意外 發生, 叫 我 嚟 睇住 你哋 wo3。

村長 [否定] たい ある 事故 起こる 命じる 私 来る 見張る あなた達

[村長は事故が起こってほしくないのので私に君たちの見張りに来るよう命じたぞ。]

また、a3 や wo3 は行為の提案を表す副詞「不如」「なんなら」を含む言表内容に接続しないが、a1 は問題なく生起する。

(14) *不如 我 幫你 做 a3。

なんなら 私 助ける あなた する

[なんなら私が代わりにやってみようよ。]

(15) *不如 我 幫你 做 wo3。

なんなら 私 助ける あなた する

[なんなら私が代わりにやってみようよ。]

(16) 不如 我 幫你 做 a1。

なんなら 私 助ける あなた する

[なんなら私が代わりにやってみようか。]

このように、3種類の文類型に生起するとはいえ、a1はa3、wo3とは振る舞いの点で一線を画している。a1については本稿では考察が不十分であり暫定的な提案しか述べられないが、3.1.で再び触れることになる。ただ、a3、wo3とは別の位置付けがなされるべきことだけはここで明言しておく。

以上のように、a3とwo3は生起する環境に共通する部分が多いことから、本稿では意味的共通性を有していると考え、以下ではその共通点と相違点を明らかにしながらこれらが形成する類の意味的特徴を考察したい。

2.1. a3とwo3 —発信者側から—

すぐ上で述べたように、a3とwo3は3つの文類型のいずれにも出現する。また、両者ともに述語を完備しない単語やフレーズという非充足的な言表内容にも自由に後続する。

(17) 入 錢 a3。 — 錢 a3。 — 入 a3。 入 la3。 齧居居 咁。(梁仲森 1992:93)
 入れる お金 お金 入れる 入れる SP ぼんやり-sfx

[お金を入れるんだよ。お金だよ。入れるんだってば。入れろよ。ぼおっとしやがって。]

(18) 喂! 已經 算 好 go3 lo3 wo3, T-shirt 加 長褲, 長褲 wo3, 唔係
 intj. 既に見なされる よい SP SP Tシャツ 足す 長ズボン 長ズボン ~ではない

短褲! (19:13)

短パン

[なんだよ! これでも十分にちゃんとしてるんだぜ。Tシャツに長ズボン、長ズボンだぞ!短パンじゃない。]

命題(proposition)が真偽や成立を問題にし得るレベルの概念だとすれば、a3やwo3が関与するのはそういったレベルの概念ではなく、言語活動において発せられる言語表現、すなわち発話(utterance)ということになる。したがって、この二つは発話に対する話し手の捉え方の違いを表し分ける機能を持つと考えられる。

しかしながら、仔細に検討すると生起する環境と生起制限に微妙な違いがある。その違いを通じて両者の意味機能の差異を見てみよう。

2.1.1. 文中挿入と呼びかけ

まず、a3はwo3と異なり、文中においてポーズを置く箇所挿入されることがある。

(19) 李:喘氣 a4 你? 嘻嘻 …

息切れする SP あなた intj intj

[息切れしてるの?ふふふ。]

占:邊有 a3? 你 又 話 會 講 俾 我 知?

どこある あなたまた言う [可能性] 話す ~に私知る

[どこが?なあ、教えてくれるって言ってたじゃないか。]

李:我話 a3, 今日 好 好天氣 a3, 冇 落雨 a3, 同埋 a3, 我 想 知
 私 言う 今日 とても いい天気 無い 雨が降る それから 私 ~たい 知る
 你 究竟 有 幾 鍾意 我 a3!(好天氣:286)
 あなた いったい ある いくら 好き 私

[あのねー、だから、今日はすごくいい天気だって。雨も降ってないし。あとねえ、私のこと一体どれぐらい好きなのか知りたいの!]

下線部のように a3 は 1 文中において複数個挿入されることも珍しくないが、wo3 はこのような箇所には生起することはできない。

(20) *我話 wo3, 今日 好 好天氣…

言う 今日 とても いい天気

[あのねー、だから、今日はすごくいい天気…]

ここで a3 が付着する語句に注意されたい。例えば、“我話~”「あのねー」というフレーズは、ここでは次に来る発話の内容に注意を払うよう聞き手に要請する一種の前置きであり、発話行為的機能しか持たず、「私は~と言う」といった文字通りの情報内容を持たない。また“同埋”「それから」という接続詞も発話と発話の接続機能だけしかない。つまり、これら二つのフレーズには聞き手へ伝えるべき情報価値がないのである。“我話呀”、“同埋呀”と単独で言ってみれば情報的に非充足的なことは明白であろう。

a3 が情報的価値を持たない発話に後続することは、呼びかけに生起する現象からも伺われる。呼びかけには、日本語で言えば「おい」や「やあ」に当たる呼びかけ専門の語句(広東語では“喂”wai3)による場合と、名前や 2 人称代名詞による場合の 2 種類があるが、このうち後者の場合に a3 が生起することができる。

(21) Mark 哥 a3, 唔好 咁 玩 我 la1. 豪 哥 a3, 冇 咗 你 我哋 唔 掂

兄さん [禁止] こんな遊ぶ私 兄さん 無い[完了]あなた 私達 [否定] いける

go3 wo3. 我(哋) 仲 有 好多 嘢 要 向 你 學 ga3. (電影:72-74)

SP SP 私(達) まだあるたくさんもの 必要だ ~にあなた 学ぶ SP

[マーク兄貴、おちよくらないでくださいよ。ホー兄貴、兄貴がいなくなったら俺たちダメですよ。まだまだ兄貴に学ぶこといっぱいあるんですから。]

(22) 唉... 你 a3 你 a3. 唔好 成日 蝦 我 a3... (網)

intj あなた あなた [禁止] しょっちゅういじめる私

[まったく…あんたね～、いつも私のこといじめるんじゃないよ。]

呼びかけに付く a3 が、名前や人稱を情報として伝えているのではないことは明らかである。呼びかけに用いられる呼称には伝達内容としての情報価値などないからである。他方、wo3 は呼びかけ語句に付くことはない。

このような両者の振る舞いの違いを考えると、a3 と wo3 の付着する発話の性質の違いが見えてくる。すなわち、wo3 が後続する発話は常に情報的価値を持つが、a3 が後続する発話に対しては話し手は情報的価値を与えていないということである。この点から wo3 が後

続する発話は<情報>であると見なすことにする。

それでは a3 が付着する発話は何かといえば、話し手によって発せられるあらゆる言語表現、言ってみれば<声>や<音>である。a3 はしたがって話し手の<声>—何を言っているか—を聞き手にとりたてて聞かせるための標識であると考えられる。

したがって、a3 は表現機能から言えば、話し手の<声>が届いているかどうかというコミュニケーションにおける最低限の条件が問題になり得るような状況で用いられることになる。例えば、聞き手が不注意で話し手の言ったことが聞こえていない時に、発話をことさらに強調してきちんと聞くように注意を促す場合で、これが梁仲森 1992:93 が言う a3 の「重点提示」である。

(23) 輪 到 你 a3。—— 你 a3。(梁仲森 1992:93)

～に順番がくる あなた あなた

[君の番だよ。…君だよ。]

(24) 入 錢 a3。—— 錢 a3。—— 入 a3。入 la3。 鱸居居 咁。(梁仲森 1992:93)

入れる お金 お金 入れる 入れる SP ぼんやり-sfx

[お金を入れるんだよ。お金だよ。入れるんだってば。入れろよ。ぼおっとしやがって。] (= (17))

(21) (22) で例を挙げた呼びかけに付く a3 も同様に、聞き手に対して話し手の<声>を届けることを目指すため、聞き手に対して自分が呼びかけていることに注意を向けさせる効果が生じる。

なお、a3 は以下のような感嘆文にも現れる。

(25) 嘩! 真係 好 有 日本 feel a3! (網)

intj. 本当に 大変 ある 日本 感覚

[わあ、すごい日本っばい～。]

感嘆文は本稿では平叙文の下位類に含めて考えたが、本来的には聞き手目当てではない。したがって、話し手の<声>を現実の聞き手に届くよう要請するわけではないが、仮想的受信者に「聞かせたい」とでもいった切迫した気持ちが発話に込められていると言えるだろう。

2.1.2. 疑問文への生起

a3 と wo3 の扱う発話内容の性質の違い、すなわち、<声>と<情報>の違いは、両者が疑問文に生起する場合にさらに明確に見て取れる。

しばしば指摘されるように広東語の疑問文は a3 を頻繁に伴う。Kwok 1984:71 は疑問文に生起する a3 についてもこれといった意味的内容はなく、何も文末助詞が付かない疑問文が唐突でぶっきらぼうに響くのを防ぐために用いられる中立の形式であると述べている。

(26) 買 咗 個 波 未 a3? (Kwok 1984:71)

買う[完了] CL ボール [未実現]

[ボール買った?]

(27) 我哋 幾時 去 a3? (Kwok 1984:72)

私達 いつ 行く

[私達いつ行くんですか?]

まず、疑問文に a3 が必要な点であるが、2章で述べたとおり広東語では、そもそも疑問文に限らず、あらゆる種類の文がしばしば文末助詞を伴う。それほどまでに文末助詞が文法カテゴリーとして確立されているということである。

a3 が疑問文に後続する文末助詞としては最も無標な形式であるとすれば、他方、wo3 は有標な形式である。以下のような例文が挙げられる。

(28) 我 幾時 有 話 過 我 鍾意 佢 wo3? (19:2)

私 いつ ある 言う[経験] 私 好き 彼女

[俺がいつ彼女のこと好きだなんて言ったんだよ?]

(29) 占: 你 唔好 諗 我 咁 多 la! 諗 得 我 多, 個 病情 會 惡化

あなた [禁止] 考える 私 そんな 多い SP 考える 私 多い CL 病状 [可能性] 悪化する

ga3! 真 ga3!

SP 本当 SP

[そんなに俺のこと考えるなよ。俺のことばっか考えてると病状が悪化するぞ。本当だぞ。]

M: 咁 我 唔 諗 你 諗 邊個 wo3? (好天氣:275)

では私 [否定]考える あなた 考える 誰

[だって、でも、そしたら誰のこと考えたらいいのよ?]

(30) 助: 今次 你 一定 要 走。

今回 あなた 必ず 必要だ 帰る

[今回は絶対帰らないとだめ。]

記: 點解 wo3? 做乜嘢 a3 ? (網)

なぜ どうした

[なんでよ? どうしたっていうの?]

(31) 件 衫 貴 唔 貴 wo3? 講 清楚 好 wo3!

CL 服 高い[否定]高い 話す はっきり よい SP

[その服高いのか? はっきり言えよ。]

(28)~(30)の例は不定疑問文であるが、話し手の中に不確定な要素 x があり、聞き手にそれを補ってくれるよう期待した無標の疑問文ではない。むしろ、どのように不定箇所を補ってみても正しい命題を構成することはできないといった<情報>(メッセージ)を、聞き手に伝達しながら、同時に回答することを要求しているのである。

また、方小燕 2003 は wo3 があらゆる種類の疑問文に出現するとし、正反疑問文の(31)は方小燕 2003:155 の例(原文は bo3)に後半は作例で補ったものであるが、(28)~(30)の不

定疑問文のような反語的メッセージはないものの、言表内容を一種メタ的に扱っていると考えられる。¹すなわち、(31)の例について言えば「私が問うているのは」「その服は高いか？」だよ。」という<情報>を伝えようとしている。

いずれの場合にせよ、wo3 が付いた疑問文は聞き手から<情報>を得ようとする本来の無標の疑問文ではなく、疑問の形を取りながら逆に聞き手に<情報>を伝達することを意図した有標な疑問文になる。<情報>を聞き手に知らせる wo3 の機能と、疑問文の持つ<情報>を得ようというという意味とが齟齬をきたすため、無標の疑問ではあり得ないのである。一方、a3 は<情報>ではなく、話し手の<声>—疑問文という言語表現—を聞き手の耳に届けるための標識であるから、疑問文に生起しても聞き手から<情報>を得ることを期待する本来の機能そのものには変更はない。ゆえに、疑問文に現れる最も中立の文末助詞とされるのである。

2.1.3. 認識変化の有無

a3 と wo3 が付く言表内容が、情報価値があるかどうかという発話(言表内容)の性質によって<声>と<情報>とに分けることを提案したが、次に wo3 の<情報>伝達の特徴について述べてみたい。

李新魁等 1995:508 などの先行研究で指摘されるように、平叙文に wo3 が後続する場合、聞き手に何か気づかせて認識の変化を促す意味を持つ。

(32) 蔣生: 羅拔圖 响 邊 a3?

ロバート いる どこ SP

[ロバートはどこ?]

芝: 哦! 羅拔圖 冇 做 呢度 la3 wo3。

intj ロバート 無い する ここ SP SP

[ああ。ロバートはもうここをやめましたよ。]

蔣生: 冇 做? (903:87)

無い する

[やめた?]

(33) 喂! 已經 算 好 go3 lo3 wo3, T-shirt 加 長褲, 長褲 wo3, 唔係

intj. 既に 見なされる よい SP SP Tシャツ 足す 長ズボン 長ズボン ~ではない

短褲! (19:13) (= (18))

短パン

[なんだよ! これでも十分にちゃんとしてるんだぜ。Tシャツに長ズボン、長ズボンだぞ!短パンじゃない。]

¹ なお、wo3 は Kwok 1984 には疑問文に生起する文末助詞としては挙がっていない。なお、bo3 と wo3 とはほぼ同じ意味を表し、互換可能な場合が多い(李新魁等 1995:509)。

認識の変化を促すということは、聞き手がそれまで持っていた古い情報を捨てて、話し手が伝える情報に更新するよう要請することだと考えられる。

一方、a3 は聞き手に話し手の言うこと—〈声〉—が届いているかが問題視される場面で、当該の発話を聞かせることを意図するが、古い情報との入れ替えによる情報の更新までは意図しない。

(34) 入 錢 a3。—— 錢 a3。—— 入 a3。入 1a3。 嚟居居 咁。 (梁仲森 1992:93)

入れる お金 お金 入れる 入れる SP ぼんやり-sfx

[お金を入れるんだよ。お金だよ。入れるんだってば。入れろよ。ぼおっとしやがって。] (= (17) (24))

そもそも〈情報〉は古いとか新しいとか言うことができるが、〈声〉には古いとか新しいとかいった価値付けをすることができない。

wo3 が情報の更新を意図するのは独り言に現れることからわかる。李新魁等 1995:508 で指摘されるように、wo3 は話し手が何かに気づくこと、すなわち、自分自身の認識の変化を表す。

(35) 咁 奇! 黃玲 係 舞蹈藝員, 佢 嚟 香港, 唔 係 表演 跳舞? 「時裝!」

そんな 不思議 ~だ ダンサー 彼女 来る 香港 [否定] ~だ 演技する ダンス ファッション

哦! 咁 黃玲 又 一定 可以 勝任 wo3。 (香港仔 4:5)²

intj では きっと できる 任に堪える

[変だなあ。黄玲はダンサーで、香港に来てダンスの演技をするんじゃないのか?

「ファッション!」ああ、そういうことなら黄玲はきっと適任だぞ。]

(36) 啱啱 打咗 好多 嘢 ga3... 撇 咗 個 esc 就有 晒 啲 嘢 1a3...

ちょうど 打つ[完了] たくさん もの SP 押す[完了] CL esc 無い[全て] CL もの SP

鳴鳴~~~~ (中略) 係 wo3... 我 係 嚟 幫襯 你 ga3 wo3... (網)

intj そう 私 ~だ 来る 最真にする あなた SP

[たくさん書いたところだったんだよ。エスケープキーを押したら全部消えちゃった…(略)うう〜。そうだ。僕は君のサイトを訪ねに来たんだった。]

(36) にも見られる“係”「~だ」が wo3 を伴った“係 wo3”「そうだ」は、Luke 1990:246 にも指摘があるが、何かに思い至った場合にしばしば使われる。³

(37) 陳: 嗰 日... 我 阿媽 抹 完 張 檯 然後 將 張 相 放 咗 喺 電腦

あの日 私 母さん 拭く 終わる CL 机 それから ~を CL 写真 置く [完了] ~に パソコン 後面 嚟。

後ろ SP

[こないだ母さんが机を掃除して、その時に写真をパソコンの後に置いたんだ。]

² 原文ではここは“啱” (bo3)であるが、wo3 にも置き換え可能である。

³ wo3 については、Luke 1990 では noteworthyness という基本的意味が導き出されている。

李:係 wo3, 係 wo3... 嘅度 wo3。 (19:301)

そう そう ある

〔ほんと、ほんと。あったわ。〕

これらの文は独り言として成立していると思わせる。仮に a3 に入れ替えると、独り言ではなくなるので不自然になる。

(38) 咁 奇! 黃玲 係 舞蹈藝員, 佢 嚟 香港, 唔 係 表演 跳舞? 「時裝!」

そんな 不思議 ~だ ダンサー 彼女 来る 香港 [否定]~だ 演技する ダンス ファッション

哦! #咁 黃玲 又 一定 可以 勝任 a3。 (香港仔 4:5)

intj では きっと できる 任に堪える

〔変だなあ。黄玲はダンサーで、香港に来てダンスの演技をするんじゃないのか?〕

〔ファッション!〕ああ、そういうことなら黄玲はきっと適任だよ。〕

森山 1997 は独り言として成立する文とはどういうものかを日本語を例にとりて考察している。それによると独り言にならない文とは、内容的に話し手にとって自明であり、思考・認識において何の変化も伴わないものであり、したがって、独り言として文が成立するには発話時における話し手の認識変化や思考展開を表していなければならないという。

すぐ上で述べたように、wo3 は聞き手に<情報>の更新を要請する。そしてそれが現実の聞き手に向けられずに、話し手自身に再帰的に向けられた場合、話し手自身に<情報>更新を要請することになる。森山 1997 が言うように、ある情報を意識内で活性化させることは、思考の展開をもたらす。したがって、wo3 のついた文は独り言として成立するのである。⁴

補足して言うならば、Kwok 1984:94 が疑問文助詞 (interrogative sentence particles) とみなす la3wo3 (または lo3wo3) も話し手の認識変化を表す独り言的用法に他ならない。⁵

(39) 星期日 帶 晒 一班 去 行街 la3wo3? (Kwok 1984:94)

日曜日 連れる 全部 CL 行く 外をぶらつく

〔日曜日は一行を連れて外に出かけるんだね?〕

(40) 占:…小心 啲 la1! 早啲 休息 la1!

気を付ける 少し SP 早めに 休む SP

〔気をつけなよ。早く休むんだよ。〕

M:咁 你 即係 叫…我 依家 要 返屋企 休息 la3wo3? (好天氣:145)

では あなた つまり 命じる 私 今 必要 帰宅する 休む

〔つまり…何、要するに…今から家に帰って休めって言うのね?〕

⁴ 森山 1997 では話し手の思考展開を表すのに役立つ日本語の形式がいくつか挙げられているが、その中の一つである文末形式「ぞ」は、「新たに生じた情報内容を意識の中へリアルタイムで書き込んでいく」といった意味を持つとされ、また聞き手目当てにも用いられると言われており、本稿で述べる wo3 と似た性質を持つと考えられる。ただ、本稿では wo3 は聞き手の情報更新要請の方が話し手自身の情報更新要請よりも本質的であると見なす。

⁵ la3 (本稿でいう 1-) は話し手の言表内容をめぐる認識状態が「新しい状況」であると見立てることを表す認識変化表示を表せるため、このような確認用法と相性がいい。la3wo3 の用法については 5 章 2. をも参照されたい。

このように wo3 はそれが扱う発話が<情報>であることにより、伝達相手の情報の更新を要請することができるが、a3 は発話を<声>と見なしているので、聞き手の認識変化を要請することはしない。

ところで、なぜこのように、wo3 によって情報を伝達しようとするのが、聞き手の情報の取り替えを促すことを必然的に意味するかというのは、広東語の発信伝達プロセスのうち、声を届ける部分が特別にカテゴライズされているからだと考えられる。つまり、発話の伝達プロセスにおいて、a3 という話し手の<声>を聞き手に届けることのみを専ら担う標識があるからには、wo3 による<情報>の伝達は相手が発話内容を聞き取るという以上の結果、すなわち、「情報の更新」を必然的に意味するようになるからである。

2.1.4. まとめ

以上見てきたように、a3 と wo3 とは生起する環境から、共に発話の発信伝達プロセスに関わる形式である。しかし、a3 が聞き手に対して発話内容(言語表現)を聴取するよう要請するだけなのに対して、wo3 は発話内容を新情報として取り込むよう促すというように、伝達プロセスにおいて機能分担が見られる。

このように機能分担があることから、a3 は発話を話し手の<声>という、伝達的情報価値がない言語表現であると見なすのに対し、wo3 のそれは<情報>であると考えられる。

なお、a3 は文中で並列的語句を列挙するのにしばしば用いられる。

(41) 英國 a3, 法國 a3, 度度都 有 靚 風景。(Matthews & Yip 1994:341)

イギリス フランス CL CL みな ある 美しい 風景

[イギリスとか～、フランスとか～、どこでもきれいな風景はある。]

(42) 喺 英國 ne1, 其實 真係 冇 咩嘢 好做, 多數 都 係 同人 傾吓計 a3,

で イギリス SP 実は 本当に 無い 何 するべき だいたい みな ~だと 人 閑談する少し

食吓飯 a3, 出吓 town a3, 上吓網 a3 咁樣 ga3 ja3. (網)

食事する少し 町へ出る少し インターネットをする少し みたいな SP SP

[イギリスではさ、本当言うと特に何もすることがなかったんだ。まあだいたいは人とおしゃべりしたり～、ご飯食べたり～、街に出かけたり～、インターネットしたり～とか、そんなもんだよ。]

このような a3 は列挙を示す際の区切りとして用いられ、(19)(23)(24)のような「重点表示」の機能とは異なる。a3 は発話が聞き手に聴取されているかどうかの問題になる状況で使用が動機付けられるわけであるから、これも話し手がまだ自分の発話が続いているのだということを、聞き手に<声>を聞かせることによって示そうとしているのだと解釈できるだろう。いずれにせよ、wo3 にはこのような用法はない。

以上の考察を基にして、以下では音声的に類似する a4 並びに wo5 についてその意味機能を探りたい。

2.2. a4とwo5 —受け手側から—

前節で述べた a3 と wo3 とは文類型への生起状況など、平行した文法的振る舞いが多く見られたため、意味的にも同じグループを構成すると見なした。ここでは、この二つと声調のみを異にする a4 並びに wo5 を意味的にも a3 と wo3 と関連付けて考察してみたい。⁶

具体的に考察の中心になるのは a4 と wo5 である。これらはいずれも表面的には複数の文類型に生起することがあるが、文類型を拘束する。

(43) 冇 嘢 講 a4? [平叙文]

無いもの 話す

[何も言うことはないんだね?]

(44) 唔好 食煙 a4? (梁仲森 1992:62) [命令文]

～するな タバコを吸う

[タバコを吸うなってか?]

(45) 冇 乜 嘢 玩 a4? [疑問文]

ある 何 遊ぶ

[どんな娯楽があるかだつて?]

(46) 冇 嘢 講 wo5。 [平叙文]

無いもの 話す

[何も言うことはないってさ。]

(47) 唔好 食煙 wo5。 (梁仲森 1992:62) [命令文]

～するな タバコを吸う

[タバコを吸うなってさ。]

(48) 冇 乜 嘢 玩 wo5。 [疑問文]

ある 何 遊ぶ

[どんな娯楽があるかってさ。]

このように a3 や wo3 とは生起状況が異なっているため、もはや話し手による発話の発信伝達の仕方を表すとは捉えることができない。しかしながら、a3 は発話を<声>として、wo5 は<情報>として見なすという点においては共通すると予測される。

以下ではその仮説を検証する形で説明を行いたい。

2.2.1. a4

まず、先行研究では a4 は Kwok 1984 によって「疑問文助詞」と見なされ、張洪年 1972 :176 や李新魁等 1995 :519-520 でも真偽疑問文を作ると見なされてきた。ただし、中立の疑問文を構成するのではなく李新魁等 1995:520 の以下の記述に代表されるように確認疑問を表す

⁶ Ricard 1992 では wo5 と wo3 が関連付けられているが、両者の文類型への生起状況の違いが議論されておらず、説得的な論考とはなっていない。

とするのが多い。すなわち、「あることについて少しは知っていたり予測を持っていたりする上で尋ねることで、相手に正しいということを証明してもらいたい」という。

a4には次のような例が挙げられる。

(49) 新業主:唔…恕 我 唐突……我 好似 响 中環 見過 你。

intj 許す私 ぶしつけ 私 どうやら ~で 会う[経験] あなた

[え～、ぶしつけですが、どうもセントラルでお見かけしたことがあるように思うんですが。]

蔣生:係 me1?! 我哋 識得 ga4? 7(903:134)

そう 私たち 面識がある

[そうなんですか? 私たち面識があるんですか?]

(50) 男:陳秀雯 ne1, 拍 咁 耐 戲 以嚟, 你 覺得 最 難 做 嘅 一次

SP 撮る こんな 長い 映画 以来 あなた 思う 一番 難しい する の 一回

鏡頭 係 點樣 ne1?

シーン ~だ どんだけ SP

[陳秀雯さん、これまで長いこと映画を撮ってきてるけど、一番難しかったシーンってどういうのですか?]

秀雯:最 難 做 嘅 鏡頭 a4?

一番難しい する の シーン

[一番難しかったシーンですか?]

男:有 冇 a3? (網)

ある 無い SP

[ありますか?]

(51) Elva:你 有 冇 女朋友 a3?

あなた ある 無い 彼女 SP

[彼女いるの?]

陳占:我 a4?

私

[俺か?]

Elva:係 a3。

はい SP

[そう。]

陳占:我…冇 a3。(19:65)

私 無い SP

[んー。いないよ。]

7 ここでは a4 は前に来る g(B類)と組み合わせさせて縮約を起こしている。

Chao 1947:102 は a4 の意味について “Do I hear you right? Am I repeating your statement correctly?” とし、相手の言ったことを正しく受け止めているかを問うものであるとしている。本稿でも同様に考えるが、以下の例のように、まだ発信者が現実には何も言っていない、または言おうともしていないのに、先取りしたような解釈を示すこともあるため、「相手の言おうとすること」について、話し手なりの解釈の仕方を聞き手に開示して見せる意味機能を持つと見なす。

(52) 占:喂, 你 今次 返 嚟 會 留 幾耐 a3?

intj あなた 今回 帰る 来る [可能性] 滞在する どのぐらい SP

[ねえ、今回の帰国はどれぐらいになるの?]

李:大概 十零日 度 la1。

だいたい 10 数日 ぐらい SP

[だいたい 10 日ぐらいかな。]

占:跟住 返 去 讀 幾耐 wa2?

それで 帰る 行く 勉強する どのぐらい ~って

[それからあっちへ帰ってどれぐらい勉強するんだって?]

李:如果 讀 埋 大學 a4? 五 年 度 la1。(好天氣:177)

もし 勉強する [拡充] 大学 五年 ぐらい SP

[もし大学にも行ったらってこと? 5 年ぐらいかな。]

(53) 你 做咩 用 咁 嘅 眼神 望住 我? 你 唔 信 我 你

あなた なぜ ~で こんな の 目つき 見つめる 私 あなた [否定] 信じる 私 あなた

懷疑 我 a4? ! (903:395)

疑う 私

[なんでそんな目で私を見るんだ? 私が信じられない、疑ってるのか?]

(54) 阿煩:我……其實 好 唔 開心……我 同 佢 噏交……

私 実は 大変 [否定] 嬉しい 私 と 彼 口論する

[私……ほんとは... すごく落ち込んでるの.....彼とけんかして...]

陳占:你 喊 a4? 你 唔好 喊 住 先 la1。(19:150)

あなた 泣く あなた [禁止] 泣く SP SP SP

[泣いてるのか? まあちよっと泣くなよ。]

前節での a3 は話し手の<声>を聞き手に届けるために用いられる標識であるとした。そこで、a4 は逆に発信者(聞き手)の<声>として何が聞こえるかという、受け手側の聞き取り解釈を示す標識と考えたい。Chao 1947 が “Do I hear you right?” と言っている通りである。ただ、a4 の場合、聞こえた内容の「解釈」を提示するということであり、(53)(54)のように、発信者は現実には<声>にして言おうとしているとは考えられない場合もある。

また、a4 には Matthews & Yip 1994:341 や梁仲森 1992:81 が言うように文末以外に位置しトピック導入を行うという用法があるが、これも情報受信解釈の延長線上にあると考え

られる。例えば梁仲森 1992:81 の次の例には以下のような文脈が補足されるが、トピックとなる部分の情報は受信者による先取り解釈という仕方で導入されている。

(55) (いつもお見合いに連れて行かれて困ると嘆く A に対して、B が「どうやって相手の人と接してるの?」と質問すると)

A:鍾意 a4, 同 佢 有講有笑 lo1, 唔 鍾意 a4, 我 睬 都 唔 睬 a3。

好き と 彼 談笑する SP [否定] 好き 私 相手にする ~も [否定] 相手にする SP

[気に入ったら(ってか?そしたら)楽しくおしゃべりするよ。気に入らなかつたら(ってか?そしたら)相手にもしないよ。]

この例では目の前の聞き手 B があたかも下線部の発話内容を発したかのように受け取ったことを示し、それに引き続いて話し手自身で返答を供給するという形で発話を進めている。

前述の例(52)(以下に再掲)とこのようなトピック導入用法とが連続することは言うまでもない。

(56) 占:喂, 你 今次 返 嚟 會 留 幾耐 a3?

intj あなた 今回 帰る 来る [可能性] 滞在する どのぐらい SP

[ねえ、今回の帰国はどれぐらいになるの?]

李:大概 十零日 度 la1。

だいたい 10 数日 ぐらい SP

[だいたい 10 日ぐらいかな。]

占:跟住 返 去 讀 幾耐 wa2?

それで 帰る 行く 勉強する どのぐらい ~って

[それからあっちへ帰ってどれぐらい勉強するんだって?]

李:如果 讀 埋 大學 a4? 五 年 度 la1。(好天氣:177) (=52))

もし 勉強する [拡充] 大学 五年 ぐらい SP

[もし大学にも行ったらってこと?5年ぐらいかな。]

最後に、a4 が疑問文を形成する「疑問文助詞」と見なされてきたのは、発信者を前にして自分なりの解釈結果を開陳することから生じるものであると考えられる。

そもそも a4 は“竟然”「なんと~だ」のような要素と共起することからわかるように、構造的特徴から定義される本来の疑問文((58))とは全く性質が異なっているのである。

(57) 咁 好食 嘅 壽司, 你 竟然 唔 食 a4?

こんな おいしいの 寿司 あなた なんと [否定] 食べる

[こんなおいしいお寿司を食べないっていうの?]

(58) *你 竟然 係唔係 唔 食?

あなた なんと ~ですか? [否定] 食べる

[あなたはなんと食べないのですか?]

2.2.2. wo5

wo5は先行研究では reported speech(Kwok 1984, Matthews & Yip 1994, Lee & Law 2001)や hearsay(Luke & Nancarrow 1997)のように、いわゆる「伝聞」を表す標識であると考えられている。例えば、以下のような例がある。

(59) 經理 話 卸 响度 就 得 lo3 wo5。(李新魁等 1995:509)

支配人 言う 下ろす そこにある ok SP

[支配人がそこに下ろしておけばいいってさ。]

(60) 阿爸 叫 你 即刻 翻 去 wo5。(李新魁等 1995:509)

父さん 命じる あなた すぐ 帰る 行く

[父さんがすぐに帰るようにつてさ。]

(61) A: 我 同 佢 拍 咗 拖 兩 個 月 ja3!

私 ~と 彼女 付き合う-[完了] 2ヶ月 だけ

[僕は彼女とたった2ヶ月しか付き合っていないよ。]

B: 吓? 幾耐 wa2?

intj どれぐらい って

[ええっ? どれぐらいって?]

C: 兩 個 月 ja3 wo5.

2ヶ月 だけ

[たった2ヶ月だつてさ。]

また、次の例が示すように、wo5は当該の発話内容が何らかの言語的情報源によって得られたものであることを聞き手に示すだけで、情報を新規なものとして提示することで聞き手の認識を変えようとするわけではない。その点でwo3とは異なる。

(62) 阿傑: 唔好意思, 唔好意思 a3, 咁 多位, 我 想 同 我 女 朋 友 ne1,

すみません すみません SP こんな 多く CL 私 ~したい ~と 私 恋人 SP

靜靜咗 食 餐 浪 漫 啲 嘅 飯, 希 望 大 家 唔 好 介 意

静かに 食べる CL ロマンチック 少 しの ご飯 希望する 皆さん [禁止] 気にする

我 陪 我 女 朋 友。

私 付き添う 私 恋人

[すみません。みなさん。彼女と静かにロマンチックな食事を楽しみたいので、僕が彼女と一緒にいるのを気にしないでいただきたいのですが。]

街坊: 浪 漫 wo5, 吓 話! 我 哋 又 浪 漫 吓 la1 喂, 喂…。(電影:196)⁸

ロマンチック デショウ 私たちも ロマンチックする ちょっと SP intj. intj.

[“ロマンチック” だつて〜。ええ? 俺たちもロマンチックしようぜ。なあ。]

⁸ 元の出典では wo3 と転写されてあるが、筆者自身が映画のせりふを聞き、またインフォーマントに聞いたところでは wo5 が適切である。

wo5 が聞き手に対して新規情報を導入することを本質的機能とする形式なのではないことは次のような反語用法(李新魁等 1995:510、方小燕 2003:71)からもわかる。

(63) (仕事も探そうとせずぶらぶらしてる友人が、「力のある者には自然と仕事口が見つかるものだ」とうそぶくのに対して)

係 lo3 wo5, 全世界 咄 工 等 住 你 去 做 wo5?

そう SP 世界中 CL 仕事 待つ[持続] あなた 行く する

[へええ?そうかい。世界中の仕事が君を待ってるんだ~?]

(64) B: 阿 甲 話 同 你 做 生日 bo3。

pref A 言う ~のために あなた 誕生日を祝う SP

[A が君の誕生日を祝ってやるって言ってたぞ。]

C: 佢 有 咁 好 死 wo5。

彼 ある そんな いいやつだ

[あいつそんなにいいやつかって。]

このような用法では wo5 が付く発話内容を強く否定する作用を持つと言われる(李新魁等 1995:510)が、伝聞用法と異なり、現実には情報元である発信者はそのような情報は発していない。しかしながら、受け取り側(話し手)はわざとその情報をあたかも発信者が発したかのように解釈する。そこで、反語的用法が生じる。

これと同じメカニズムで、発信者による架空の発言を解釈処理する形を取って話題を導入し、それについてのコメントを展開させようとするのが次のようなトピック導入用法である。

(65) 呢 隻 係 叫 KING 企鵝~ 同 emperor 係 同一個 種族 ga3~ 叫

この CL ~だ ~という ペンギン ~と ~だ 同じ 種族 SP ~という

得 king la3 wo5~ 睇 呢 張 相 就 知 佢 犀利 la1~ (網)

~する以上は SP 見る この CL 写真 わかる それ すごい SP

[これは king ペンギンとって、emperor と同じ種族なんだ。king と言うからにはだねー、この写真を見ればすごいってことがわかるよ。]

(66) 俾 我 同 到 佢 結婚 la3 wo5..... (佢 肯定 幸福 到 痺!)

させる 私 ~と できる 彼女 結婚 SP 彼女 必ず 幸せ しびれる

[私に彼女と結婚させてごらん~...(彼女はすごく幸せになるよ!)]

このような wo5 は、次にくる発話を何か興味をそそる面白い話題であるかのように提示する効果があるという。

このように、発信者が実際にそのようなことを言おうとしているかどうかに関わりなく、受け取り側としては発信者の発話に由来すると見なす点は、前述の a4 についても同じことが言える。

以上の wo5 の伝聞や反語用法を含めた言語現象を、前節で述べた wo3 の意味機能の観察を踏まえて説明すると次のようになる。すなわち、wo3 は発信伝達プロセスにおいて、聞

き手の情報更新を促すような発信の仕方をする標識であった。これを逆に受け手から眺めた情報受信プロセスを表すのが wo5 であると考えられる。そこで、wo5 は発信伝達行為を通じて得た<情報>の受け手側の解釈案を示す標識だと暫定的に規定しておく。

2.2.3. <声>と<情報>の違い

このように a4 と wo5 は、発信者が何を言おうとしているか、あるいは何を言ったかという受け手側の解釈案を示す点で共通するが次のような点で異なる。a の文末助詞は目の前の発信者が言おうとすることを受け取った解釈案を当の発信者に向き合って突きつける。他方、wo5 も発話内容の受け手側の解釈案を示すが、発信した本人が発話現場にいるかいないかはどちらでもよい。仮に発話現場に聞き手がいたとしても、a4 の場合のように発信者本人としてあるのではなく、「伝聞」によって得られた発話内容を伝達される単なる「聞かされ役」に過ぎない。

この違いはやはり発話の種類の違いから来ると考えられる。2.1.では a3 は発話を話し手の<声>として、wo3 は<情報>として見なすという見解を述べたが、それと平行して a4 は発信者の<声>を、wo5 は<情報>を扱うと考えられるのである。

すなわち、<声>は発した人から切り離して考えることができない。喩えになるが、歌を歌って人に聞かせたり、語学練習で発音を先生に聞かせたりする場合、相手に聞かせる声が本人のものでなければ意味をなさない。そのため、<声>の内容を確かめる a4 では、受け手(話し手)は発声者本人に直に面していなければならない。

一方、<情報>は時間空間を越えて誰にでも保持される性質を持つ。<声>と異なり、「誰のものか」ということは問題にならない。そこで、wo5 は発信伝達プロセスを通じてどのような<情報>を得たかを表すと言える。

<声>の内容解釈を提示する形式には a4 の他に a5 という形式もある。

a5 は Kwok 1984:89 によれば、真実に突然気づいたことを表し、感動詞“哦”「ああ」としばしば共起するという。

(67) 哦! 明日世界 ja5? 9 (Kwok 1984:90)

intj. [固有名詞]

[ああ、“明日の世界”のことだろ?]

(68) A: 喲 毛長 唔係 要 吹乾 佢 lol.

CL 毛 長い ~ ジャナイ 必要だ 風で乾かす それ SP

[毛が長いのならドライヤーで乾かさないとだめじゃない。]

B: 哦, 隻 牧羊狗 a5? (Luke & Nancarrow 1997)

intj. CL シェパード

[ああ、あのシェパードのことだね?]

9 ここで a5 は前に来る j (C類) と組み合わさって縮約を起こしている。

Kwok 1984:89 が “Oh, is that what you mean?” と言い換えられると言うように、発信者の言ったことの受け取りが正しく行われているかどうかを問題にする形式だと考えられる。このことは同著で a5 のほとんどの例文の英語訳で “you mean ~?” と注釈されていることから伺われる。

したがって、a4 と同様に a5 も受け手側から発信者の<声>の内容が何か解釈し提示すると考えられる。ただ、a5 は発信者の<声>の内容に対する話し手の推測が正しいことを発信者たる聞き手に承認するよう要請する点が a4 とは異なる。¹⁰

なお、wo 系統には他に wo4 という形式があるが、これはもはや発信伝達プロセスとは直接関連しないようである。

- (69) 阿 John 琴日 擺 住 本 Maths 書 話 呢 條 數 好 難, 係 佢 先
 pref 昨日 持つ[持続] CL 数学 本 言う この CL 計算 とても 難しい ~だ 彼 ~こそ
 計 到。 哈, 佢 以 為 我 唔 識 計 呢 條 數 wo4。
 計算できる Intj. 彼 思う 私 [否定] できる 計算する この CL 計算
 點知 我 一 計 就 計 到。
 なんと 私 計算するとすぐに 計算できる

[ジョンが昨日数学の本を持ってきて、この計算はすごく難しく、自分にしか解けないって言うんだ。ふん、あいつ俺には計算できないと思ってたんだよ。ところがどっこい俺はすぐに解けたんだ。]

- (70) Inv:佢 可以 坐 呢 張 凳 度 la1。 又 可以 坐 喺 啲 梳化 度 wo3,
 それ できる 座る この CL 椅子 loc SP また できる 座る に CL ソファ[場所詞] SP
 你 睇 吓。
 あなた 見る ちょっと

[このいすに座らせてもいいし、ソファに座らせてもいいんだよ。ほら。]

Chi:呢度 又有 梳化 wo4。 (Lee & Law 2001)

ここ また ある ソファ

[ここにもソファがあるぞ。]

wo3 や wo5 とは音韻的に類似するものの、その位置付けをめぐってはさらに詳細な検討が必要で、本稿ではひとまず考慮しないことにする。

3. 聞き手依存の発話方式

3.1. 聞き手情報保持状態配慮

2.1. で取り上げた a3 や wo3 は発し手側から見た発話の発信伝達プロセスに関わり、文類型を選ぶことなく生起した。D類には他にも夥しい数の形式があるが、そのうち平叙文と命

¹⁰ a5 は後述(4.4 第6章 4.4)の le5 と同じ声調を持つが、聞き手の承認要請という点で両者には意味的類縁性が感じられる。

令文に生起し、疑問文には生起しないという特徴を持ついくつかの形式がある。

具体的には la1、alma3、lo1 である。これらは、平叙文及び命令文には生起するが、疑問文にだけは生起しない。

[平叙文]

(71) 你 哋 識 ga3 la1, 唔使 介紹 la1。(19:93)

あなた達 知り合いだ 必要ない 紹介する

[お前ら知り合いだろ？紹介しなくていいよな？]

(72) cat 係 猫 alma3。(網)

～だ 猫

[cat つてのは猫じゃないか。]

(73) 後尾 佢 哋 上山 lo1。(李新魁等 1995:516)

その後 彼ら 山に登る

[それから彼らは山に登ったんじゃないん。]

[命令文]

(74) 你 唔好 諗 我 咁 多 la1! (好天氣:275)

あなた [禁止] 考える 私 そんな 多い

[そんなに俺のこと考えるなよ。]

(75) 你 叫 佢 自己 去 做 alma3。(方小燕 2003:78)

あなた 命じる 彼 自分で 行く する

[お前もあいつに自分でやるように言えよな～。]

(76) 冇 嘢 好 講 咪 唔好 講 lo1~ (網)¹¹

ない もの よい 話す ジャナイ [禁止] 話す SP

[話すことないんだったら話さないでおけよ。]

[疑問文]

(77) *你 有冇 去 la1?

あなた ある 無い 行く SP1

[*行きましたかでしょ?]

(78) *你 有冇 去 alma3?

あなた ある 無い 行く SP1

[*行きましたかじゃないですか?]

(79) *你 有冇 去 lo1?

あなた ある 無い 行く SP1

[*行きましたかじゃないんですか?]

¹¹ “咪”「ジャナイ」というのは“唔係”「～ではない」の縮約形で、これ自体も後述の聞き手情報配慮の形式の一種と言えるかもしれないが、lo1 と相性がよく、しばしば一緒に用いられる。

これらは前節で扱った a3 や wo3 とは、生起状況から見て別のグループを構成すると考えられる。a3 や wo3 は発信伝達というプロセスに関わるものであった。発話内容を聞き手に聞かせたり、知らせたりするという営みは、確かにコミュニケーションの一側面であるが、そこにはもう一方の参加者である聞き手の情報保持状態に対しての配慮がない。

聞き手の情報保持状態への配慮と文末形式の関係について、木村・森山 1992 は日本語と中国語を例にとり、話し手聞き手の情報保持の仕方を平叙文と疑問文のそれぞれの場合について議論している。そこで述べられているように、平叙文は無標では話し手は聞き手の情報に依存しないで発話を行う。他方、疑問文の方は無標では話し手が聞き手の保持する情報に依存した発話の仕方を行うものである。したがって、平叙文において聞き手の情報に依存しながら発話したり、疑問文において聞き手の情報に依存しない発話の仕方をするためには何らかの標識が必要になる。例えば中国語で平叙文において聞き手の情報に依存した提出の仕方をするには文末形式として ba が用いられる。

(80) 説來說去, 我是四川人吧, 還是我比你能吃辣的。(木村・森山 1992)

[何のかのと言っても、私は四川の人間でしょう、やはり辛いものはあなたよりも強いですよ。]

同様に上で例示した la1、alma3、lo1 の 3 つの形式は、平叙文においてこのような聞き手の情報に依存した発話の仕方をする際に利用可能な標識だと言える。¹²

例えば、3 つの形式のうちの一つ、la1 を付けると無標の平叙文とは異なり、聞き手の情報に依存した述べ方になり、問いかげ的な機能を有する。

(81) 你哋 識 ga3 la1, 唔使 介紹 la1. (19:93)

あなた達 知り合いだ 必要ない 紹介する

[お前ら知り合いだろ? 紹介しなくていいよな?]

この例から次のように la1 を取り去ると、発話が表す情報について聞き手の情報保持状態に全く無関心であることを表してしまう。

(82) 你哋 識 ga3, 唔使 介紹。

あなた達 知り合いだ 必要ない 紹介する

[お前ら知り合いだぞ。紹介する必要はない。]

以下では上述の木村・森山 1992 の議論を参考にして、聞き手の情報に依存した発話の仕方をすることがこれらの形式固有の意味機能であると見なす。そして、上述の 3 つから la1 及び alma3 を取り上げてそれぞれの違いと使用に関する動機付けを考察し、これらの形式がどのように文末助詞体系において位置付けられるかを検討したい。

¹² 命令文についても平叙文と平行して考えられる(3.2.2.)。

3.2. la1

3.2.1. 聞き手の同意要請

la1 は後述の alma3 と異なり、無条件に聞き手に依存した発話の仕方を示す。以下では la1 によって聞き手情報依存的発話が動機付けられる状況をいくつか具体的に見てみたい。

まずは、平叙文において発話内容を述べる際、発話内容の性質から言って聞き手にも情報があることが見込まれそうな以下のような場合で、聞き手の同意認定を仰ぐ状況があげられる。

(83) Tony:OK 打得俾司機! 叫佢嚟得!

OK 電話する[許可] に 運転手 呼ぶ 彼 来る[許可]

[OK。運転手に電話かけてもいいよ。呼んできていいよ。]

琳琳:你 聽到 la1, 大拿拿 ten thousand a3, 文哥!(903:204)

あなた 聞こえる 大金だ SP suf

[聞こえたでしょう?10000ドルよ、文さん!]

(84) 你 成日話「過 咗 今晚 冇事」,你 琴晚 點 過?! 如果你 過得

あなた いつも 言う 越す[完了] 今晚 無事 あなた 昨晚 どう 過ごす もし あなた 過ごす できる

琴晚, 你 今晚 就 唔 會 嚟 呢度 la1!(電影:56)

昨晚 あなた 今晚 [否定][可能性] ~にいる ここ

[君はいつも「今晚が過ぎたらもう大丈夫」って言うけど、昨夜はどうやって過ごした?もし昨夜を過ごすことができていたなら、今晚ここにいたりしないだろう?]

このように聞き手の同意認定を仰ぐ場合は問かけ的功能を持つため、次のように付加疑問“係咪”「~でしょう?」を付け聞き手から回答を要求することができる。¹³

(85) 你 都 鍾意 la1, 係咪?!

あなた も 好き デシヨウ?

[君も好きだろう?]

他方、木村・森山 1992 が言うように、相手に情報がないと思われるのに、あるかのように仮定してそれに依存した発話の仕方をすることはできる。あくまでも発話の述べ方に過ぎないからである。例えば、以下の例のように、話し手が聞き手に出来事を語って聞かせる場合は、現実には聞き手が情報を持っていることは予想されるべくもないが、あえて持っていると思わせた述べ方をしている。

(86) 我 同 阿 miu 同 另外 三個 friend 返 翻 學校 la1, 係就嚟 入 校門 之前

私 と pref とその他 三人 友達 登校する[回復] にもうすぐ 入る 校門 前

我 見到 阿 宏, 我 望住 佢 la1 (因為 佢 望住 我), 我 諗住 同 佢

私 見かける pref 私 見つめる 彼 なぜなら 彼 見つめる 私 私 するつもり と 彼

¹³ “咪”は“唔係”「~ではない」が約まったものである。

say hi, 但 我 嗰時 一手 拖 緊 阿 miu, 另一手 就 拿住 pe 衫袋;
 言う しかし私 その時 片手 つなぐ きつく pref もう片手 つかんでいる 体育服 袋
 咁 我有 手 咪 放開 拖住 阿 miu 隻手 同 佢 “hi” lol. (網)
 じゃあ 私 無い 手 ジャナイ 放す つないでいる pref CL手 と 彼 hi と言う SP

[私と Miu と別の友達 3 人と学校へ戻るじゃない? 校門に入ろうとするとここで阿宏
 を見かけたから彼のこと見るじゃない?(だって彼が私のこと見るから)。彼に「やあ」
 って挨拶しようと思ったけど、その時片手は Miu を掴んでてもう片方の手は体操服
 入れを持ってた。というわけで、手が空いてないから Miu を掴んでた手を放して彼
 に挨拶したんじゃないの。]

このようにやや長い発話が続く場合、情報に関する聞き手の同意を仰ぐ形を取ることで、
 話し手から聞き手へ一方的に伝達を行う述べ方になるのを防ぐ効果がある。

同様に、次の例のように文中で列挙を表す場合も同様である。

(87) 我哋 社區 中心 a3 有 好多 唔同 嘅 小組 ga3... 嚟... 織 冷衫 la1,
 私達 コミュニティセンター SP ある たくさん 異なる の グループ SP intj 編む セーター
烹飪 班 la1, 親子 班 la1, 不如 我 帶 妳 參觀 吓 我哋 嘅 康樂棋室
 料理 教室 親子 教室 何なら 私 連れる あなた 見学する ちょっと 私達 の 娛樂室
 同 圖書館 al... (網)
 と 図書館 SP

[うちのコミュニティーにはいろんなグループ活動があるんですよ。セーター作り
でしょう、料理教室でしょう、親子教室でしょう。なんなら娛樂設備と図書館をご案
 内しましょうか?]

これらの場合は、聞き手の返答を期待しているわけではないから、後ろに付加疑問文を
 つけようがない。ただ、聞き手のあいづちが期待でき、次の括弧の位置に“o4, ha6, m4”「う
 ん、はあ」などを入れることができる。

(88) 織冷衫 la1(), 烹飪 班 la1(), 親子 班 la1()
 編むセーター 料理 教室 親子 教室

[セーター作りでしょう(), 料理教室でしょう(), 親子教室でしょう()。]

以上、上述のいずれの場合においても、聞き手情報依存の述べ方は、聞き手からの同意
 や承認取り付けによって動機付けられていると考えられる。

その一方、la1 はまた曖昧な表現を含む発話に生起することが多い。

(89) 占:喂, 你 今次 返 嚟 會 留 幾耐 a3? (=56)
 intj あなた 今回 帰る 来る [可能性] 滞在する どのぐらい SP

[ねえ、今回の帰国はどれぐらいになるの?]

李:大概 十零日 度 la1.

だいたい 10 数日 ぐらい

[だいたい 10 日 ぐらいかな。]

占:跟住 返 去 讀 幾耐 wa2?

それで 帰る 行く 勉強する どのぐらい ~って

[それからあっちへ戻ってどれぐらい勉強するんだって?]

李:如果 讀 埋 大學 a4? 五 年 度 la1。(好天氣:177)

もし 勉強する ~も 大学 五年 ぐらい SP

[もし大学にも行ったらってこと?5年ぐらいかな。]

(90) 陳: 喂, 好耐 冇 見, 林寶堅。

intj 長らく 無い 会う

[やあ、久しぶり。]

林: 點 a3 陳占…

どう SP

[やあ、(最近)どう?]

陳:都係 咁 la1……喂! 睇睇 食 咩 先。(19:93)

やはり このよう intj. 見る見る 食べる 何 とりあえず

[相変わらずさ…ねえ、何食べようか?]

(91) 恩沙:...搞 成 點 a3 你 問 地產?

やる なる どう SP あなた CL 不動産業

[あなたの不動産の方はどうなの?]

蔣:OK la1!

OK SP

[まあまあね。]

恩:OK ja4?(903:267)

OK だけ

[まあまあなの?]

これらの場合に聞き手依存的な発話の仕方の動機となるのは、情報に関する聞き手からの同意要請とは考えにくい。返答もあいづちも期待できない。

ここで la1 が用いられるのは、むしろ曖昧な言明であるがゆえに断言を控えたいという心理的要因に動機付けられていると考えられる。すなわち、聞き手情報に依存した発話の仕方をするので、自分一人の責任で発話をするのを避けることが可能になるのである。

同じように以下のような曖昧な言明をする場合にも la1 はしばしば生起する。

(92) 或者 佢 真係 另 有 原因 la1。(網)

あるいは 彼 本当に 別に ある 原因

[あるいは彼は本当に別に原因があるのかもね。]

このような場合に用いられる la1 を、例えば同じくあいまいな表現にしばしば生起する別の文末助詞 gwa3 と比較してみよう。

(93) 占:喂, 你 今次 返 嚟 會 留 幾耐 a3?

intj あなた 今回 帰る 来る 可能性あり 滞在する どのぐらい SP

[ねえ、今回の帰国はどれぐらいになるの?]

李:大概 十零日 度 gwa3。

だいたい 10数日 ぐらい SP

[だいたい10日ぐらいじゃないかなあ。]

gwa3は4.1.で後述する認識的ムードを表示するグループの形式で、ある事態が一定の蓋然性を持って成立するという聞き手の認識判断を表す形式である。事態成立についての話し手の認識判断を表す形式であるから、「(帰国日数が)10日ぐらいになる」という事態(命題)の成立を不確実に捉えていることになる。

他方、la1は命題成立をめぐる話し手の認識的様態を表す形式ではなく、聞き手への伝達の仕方を表す形式であり、話し手自身の責任において断言するのを保留するという伝達の仕方を示すことで、曖昧性を持たせているのであり、「(帰国日数が)10日ぐらいになる」という事態の成立そのものを問題にする形式ではない。

3.2.2. 命令文

なお、上述の通り la1 は命令文にも生起する。

(94) 喂! 咁 你 依家 快啲 去 搵 阿 Moon 先! 佢 好 想 見 你 ga3,

intj じゃあ あなた 今 すぐ 行く 訪ねる pref SP 彼女 とても ~たい 会う あなた SP

你 快啲 去 la1! (好天氣:273)

あなた 早く 行く

[ねえ、じゃあ今すぐMoonに会いに行つて。彼女とてもあなたに会いたがってるのよ、早く行きなさいよ。]

(95) 你 唔好 諗 我 咁 多 la1! (好天氣:275)

あなた [禁止] 考える 私 そんな 多い

[そんなに俺のこと考えるなよ。]

また、このような聞き手が行為を行うことを期待する命令ないし依頼の文だけでなく、話し手と聞き手が共に行為を行うことを期待する「勧誘」((96))や、話し手が行為をすることについての提案を表す「行為提供」((97))といった、広く実行内容を表す文にも la1 はしばしば現れる。¹⁴

(96) 我哋 一齊 去 食飯 la1。

私達 一緒に 行く 食事する

[一緒に食事しに行きましょうよ。]

¹⁴ 実行内容というのは話し手・聞き手が身を置く現実世界においてこれから実行されるべき事柄のことで、命題としての真偽を問題にできるような事柄(叙述内容)と対極を成すものと考えられる。詳しくは本章5.で後述する。

(97) 好 la1, 我去 la1。(李新魁等 1995:519)

よい 私行く

[わかったよ、僕が行こう。]

このような行為実行を表す文に生起する場合も、3.2.1. で述べてきたような叙述を表す文に生起する場合と同じように、la1 は聞き手の同意を取り付けながら発話する仕方を表していると考えられる。la1 を用いることで話し手からの断定的な通達になるのを避けているのである。

3.3. alma3

la1 と同じように、聞き手への情報依存的発話の仕方を表す文末助詞には他に alma3 がある。¹⁵la1 が聞き手情報への依存を無条件に志向するのに対し、alma3 は聞き手情報へ依存した述べ方をすると同時に、情報が自明のものであるということを表す。

ただ、誰にとって自明の情報かによっていくつかのタイプがある。

まず、情報が聞き手にとって自明であると見なす場合で、そのため、「聞き手も当然知っているはずだ、言わなくてもわかるだろう」といった意味合いを伴う。

(98) (キャットウォークについての説明)

嗚, cat 係 猫 alma3, 猫 係 高貴 又 有 傲氣 galma3¹⁶; walk nei,

intj. ~だ猫 猫 ~だ高貴だまたある傲慢さ SP

慢行 alma3。(網)

ゆっくり歩く

[いいかい、cat っつのは猫だろ？猫は高貴で傲慢じゃないか。walk っつのはさ、

ゆっくり歩くってことだろ！]

(99) 今日 咁 晏 ge2? —— 塞車 alma3。(方小燕 2003:63)

今日 こんな 遅い 渋滞

[今日は随分遅いじゃない？ —— 渋滞なんだもん。]

(98) の場合は下線部の発話で述べられている内容そのものが聞き手に自明だという意味である。一方、(99) の場合は若干異なる。下線部の発話が表す事態とそれに先行すると見なされる別の事態との因果関係が、聞き手にも当然自明のはずだ、という意味合いを表す。すなわち、(99) では「渋滞してたから遅れた」という、事態と事態の因果関係が、聞き手にも自明のものとして提示されている。

このように当該情報は聞き手に自明のことがらだ、という情報の性格への言及を含むものの、聞き手の情報に依存することを表示する点では la1 と共通する。

一方、alma3 が用いられるもう一つの環境は、情報が話し手自身にとって自明のものだと

¹⁵ alma3 は他の先行研究で指摘されるように数少ない二音節の文末助詞である。

¹⁶ ここでは g-(B 類) と alma3 が縮約を起こしている。

見なす場合である。

(100) 華: 條女我帶嚟嘅。如果有咩事 ge3, 我預晒上身!

CL 女 私 連れる 来るの もし ある 何こと SP 私 背負い込む-[全部]

[こいつは俺が連れてきたんだ。もし何かあったら俺が全部責任を取る。]

喇叭: 好! 你攞上身 alma3? 人係你帶嚟嘅。(電影:168)

よい あなた 抱え込む 人 ~だ あなた 連れる 来るの

[よし。お前がしょいこむんだよな? そいつはお前が連れてきたんだぞ。]

(101) (プレゼントを贈る場面)

認 唔 認得 我 a3? (1,2 秒) 唔 認得 alma3, 我知。(網)

顔がわかる-[否定]-顔がわかる 私 SP [否定]顔がわかる 私 知る

[私のことわかる? ——わからないんでしょう? わかっている。]

このように、話し手自身にとって自明だと見なす場合は、(101)で“我知”「(そんなこと)私はわかっている」が後続することからもわかるように、「当該の情報は自明だ、相手にいちいち問う必要もない」といったニュアンスを帯びる。

そしてそこから、「一応わかっているけど確かめたい」といった意味合いを表す「疑問文末助詞」の用法(Kwok 1984:93)が連続していると考えられる。

(102) 好耐 冇見 咁多位 la3, 幾好 alma3! (網)

長らく 無い 会う こんな 多く CL SP とても 元気

[久しぶり、みなさん。元気?]

(103) 吓! 咁都得, 好, 傳下一位 參加者 西域王 處君... 咪住! 處君?

intj こんな も OK よし 召喚する 次の 1 CL 參加者 [禁止] SP

我有聽錯 alma3, 公主! 係處君 a3! (網)

私 無い 聞き間違う お姫様 ~だ SP

[ふんっ、そんなばかな。はい、次の参加者西域王處君をお通して…ちょっと待って、處君? 聞き間違いじゃないわよね? 姫様! 處君ですよ!]

もっとも、誰にとって自明と見なしているのか常に判然としているわけではないが、いずれにせよ alma3 は聞き手情報依存の述べ方をすると同時に、情報の自明さに言及を含む点の特徴である。

なお、alma3 も命令文に現れることがある。その場合はある未然の事態を実現させること(否定命令では事態の非実現)が望ましいという内容の情報を、あたかも聞き手にも自明な情報であるかのように述べた押し付けがましい命令文になる。

(104) 你叫佢自己去做 alma3。(方小燕 2003:78)

あなた 命じる 彼 自分で 行く する

[お前あいつに自分でやるように言えよな~。]

(105) 咪講咁大聲 alma3!

[禁止] 話す こんな 大声だ

[そんな大声で話すんじゃないよ!]

3.4. その他

以上のように、la1 と alma3 は、共に聞き手依存の発話の仕方を表す形式であると考えられる。この類にはさらに、本稿では議論できなかったが、lo1 並びに 2. で触れた a1 も位置づけられるのではないかと推測される。a1 は 2. で述べたように平叙文・疑問文・命令文全てに生起し、この類の生起特徴である疑問文への不出現には違反するが、3章 3.2.2. で“先”についてみたように、疑問文への生起は命令文へ生起する用法からの拡張であると説明する可能性もある。また、alma3 や la1 と音声的類似を有している。そこで、希望的観測から暫定的にこの類に位置づけたい。もちろん、la1 や alma3 との意味機能の比較など、今後の詳しい検討が必要なことは言うまでもない。

4. 認識判断的ムード

以上で取り上げてきた形式はいずれも発話の発信伝達のプロセスに関わる形式だと考えられる。その一方で D 類の文末助詞にはこの他に、平叙文のみに生起するという生起特徴から区別される形式がいくつか存在し、別の類を形成すると考えられる。そのうちの一つ gwa3 についてその振る舞いを見ておこう。

(106)阿 John 識 講 日文 gwa3。

pref. できる 話す 日本語

[ジョンは日本語を話せるんじゃないかなあ。]

(107)*阿 John 識 唔 識 講 日文 gwa3?

pref. できる [否定] できる 話す 日本語

[*ジョンは日本語を話せますかではないでしょうか。]

(108)*你 咪 講 日文 gwa3!

あなた [禁止] 話す 日本語

[*日本語を話すなよじゃないかなあ。]

その外、me1、ge2、le5 などがあり、文類型の生起に関して同様の振る舞いを見せる。

これらはいずれも後述するように言表内容が描くことがらの真偽や成立を問題にする。上述の発信伝達類の形式が言表内容を<発話(utterance)>として扱っていたのに対し、この類の形式は<命題(proposition)>として扱っていると言える。結論から述べるとこれらの形式は命題に対する話し手の認識的様態を表し分ける機能を持つと見なせる。そこで、命題への<認識的ムード>表示の類と呼ぶことにする。

以下では各形式の意味機能の特徴を具体的に見ていくことにする。

4.1. gwa3

まず、このグループには命題(以下、「事態」とも呼ぶ)成立に関する話し手の見込みや推測

を述べる形式が存在する。それは先行研究で推測を表すとされてきた gwa3 である(Kwok 1984:66 など)。

(109) 今日 唔 會 落雨 gwa3。(Kwok 1984:66)

今日 [否定][可能性] 雨が降る

[今日は雨は降らないんじゃないかなあ。]

(110) 今次 佢哋 要 輸 la3 gwa3。(Kwok 1984:66)

今回 彼ら [必然性] 負ける SP

[今回は彼らは負けるんじゃないかなあ。]

これは命題成立が一定の蓋然性を持つことを表す副詞“可能”「多分」、「或者」「ことによると」などと共起する。

(111) 我都 唔 知 點解 a3。可能 瞓 得 多 得 滯 gwa3。(網)

私も [否定] 知る なぜ SP 多分 寝る 多いすぎる

[私もどうしてなのかわからない。多分寝すぎたんじゃないかな?]

しかし、“一定”「きっと」のように蓋然性の高いことを示す副詞とは共起しにくい。

(112) ??佢 一定 有 嘢 求 我 gwa3?

彼 きっと ある こと 頼む 私

[彼はきっと私に頼みごとがあるんじゃないかな?]

このように、gwa3 は命題が一定程度の蓋然性で成立するという推測を表示する形式である。

4.2. me1

命題成立に関する話し手の認識的態度を表すものには他に me1 がある。me1 は話し手の予測と反する事態 P が成立するかどうかについて聞き手に判断を求める機能を持つ。

例えば次のような例がある。

(113) 羅拔圖: 喂, 阿 朗, 嚟 幫幫手!

intj pref 来る 手伝う・少し

[ねえ、朗! ちょっと手伝ってくれない?]

朗: 你 隻腳 仲 未 好 翻 me1? (903:356)

あなた CL 足 まだ [未実現] よい [回復]

[まだ足治ってないのか?]

(114) 蔣生: 呀! 搬 嚟 呢頭 咁 耐 食飯 硬係 撞唔到 你 ge2?

intj 引つ越す 来る こちら こんな 長い 食事する どうしても 出会わない あなた SP

[こっちへ越してきてこんなになるのにどういうわけか食事時に君と会ったことないねえ。]

羅拔圖: 我 不溜 响 樓下 food court 食 galma3!

私 いつも ~で 階下 フードコート 食べる SP SP

[いつも下のフードコートで食べてるんだもん。]

蔣生:好食 me1? (903:130)

おいしい

[おいしいか?]

(115)陳占:喂! 阿 Moon。

もしもし pref

[もしもし? Moon?]

M:係 a3。陳占 a4? 咦? 你 唔係 返咗 學 ga3 me1? (好天氣:238)

はい SP [人名] intj あなた [否定]~だ 登校する-[完了] SP

[はい。陳占?あれ?学校行ってるんじゃないの?]

このように、me1 は事態 P が成立するかどうかについて聞き手に判断を委ねる働きを持つが、同時に事態 P がもし成立するとすればそれは予想外であるという、事態に関する話し手の認識的態度を含んでいる。予想外であるということは、“唔通”「まさか」や“乜”「なんと」といった副詞との共起から伺われる。

(116)唔通 冇 咗 佢哋 呢度 就 冇 人 睇 me1?

まさか 無い[完了] 彼ら ここ 無い 人 見る

[まさか彼らがいなくなったらここは誰も見なくなるのか?]

(117)阿水:係 la1, 一係 同 Pitar 一間 房 lo1, 大家 女仔 方便 啲 alma3。

そう SP あるいは と 1 CL 部屋 SP みな 女の子 都合がよい 少し SP

[そうだよ。じゃあいつそピーターと同じ部屋に寝なよ。お互い女の子だからその方がいいじゃないか。]

沙沙:乜 佢 女仔 嚟 go3 me1? (四:125)

なんと 彼 女の子 SP SP

[ええっ?彼、女の子なの?]

me1 はこのように事態成立を予想外だと捉える点で話し手の認識判断ムードを表す。一方で、聞き手に事態成立の判断を委ねるという点では別の文末助詞 ma3 とも共通する。¹⁷

ma3 はやはり平叙文のみに生起し、正反疑問文とほぼ等価の疑問文を形成するとされる形式である(Kwok 1984)。ma3 は me1 と異なり、事態成立に関する話し手の予想というような認識的態度を含まない。そこで、“唔通”などとは共起しない。

(118)*唔通 冇 咗 佢哋 呢度 就 冇 人 睇 ma3?

まさか 無い[完了] 彼ら ここ 無い 人 見る

[まさか彼らがいなくなったらここは誰も見なくなるのか?]

ただ、Kwok 1984 が言うように ma3 疑問文は正反疑問文に比べると出現する頻度が圧倒

¹⁷ なお、答えがわかっているながら、聞き手に判断確定を仰ぐ形をとる、いわゆる修辭的疑問文の場合には、me1 は下降調を取ることになる。

的に低い。また、Matthews & Yip 1994:310 ではあいさつの“你好嗎?”「元気ですか?」において使われる以外は、ma3 の疑問文は比較的改まった言い方であるとされている。このような特殊性から、本稿ではこれ以上検討しないことにする。ただし、位置付けとしてはD類の認識判断的ムードのグループと密接に関わると見なされよう。

4.3. ge2

me1 のように、ge2 という形式もまた事態 P の成立が話し手の予想外であることを表示する。事態 P の成立を予想外と見なす点は ge2 という形式にも共有される。¹⁸しかし、me1 のように成立に関する判断確定を聞き手に委ねるのではなく、予想外に成立するという話し手の認識判断を述べ立てる。

(119) 有冇搞錯 a3? 咁 幼稚 嘅 嘢 都 寫得出 ge2! (電影:142)

ふざけるな SP こんな 幼稚な の もの も 書ける

[頭は大丈夫か。こんな幼稚なものを書けるなんて!]

(120) 你 心有所屬? 我有聽過 ge2? (網)

あなた 思いを寄せる人がいる 私 無い 聞く [経験]

[君に意中の人がある? 僕がそれを聞いてないとは!]

ge2 も予想外であることを示す副詞“乜”「なんと」と現れる。

(121) 乜 後面 有 條 河 ge2? (Fung 2000:160)

なんと 後 ある CL 川

[なんと後ろに川があるとは!]

ところで、ge2 は「なぜ」という意味の疑問詞“點解”、“做乜”、“爲乜”を含む不定疑問文に出現可能である(Fung 2000:160)。これは実はこの認識判断ムードの類全体の特徴である、平叙文にのみ生起するという点から見れば例外的に見える。

(122) 點解 後面 有 條 河 ge2? (Fung 2000:160)

なぜ 後 ある CL 川

[なんで後ろに川があるんだ?]

他方で ge2 は同じ疑問文でも他の疑問詞を用いた不定疑問文や正反疑問文には出現できない(Fung 2000:160)。

(123)*邊度 後面 有 條 河 ge2?

どこ 後 ある CL 川

[どこの後ろに川があるんだ?]

(124)*後面 係 唔 係 有 條 河 ge2?

後 ~だ [否定]~だ ある CL 川

¹⁸ Fung 2000:158 の指摘するように、ge2 には長い持続的上昇調を持つ ge2(gE2 とする)と急激な短い上昇の ge2 とがある。ここで議論するのは ge2 である。gE2 は ge2 と意味的に深いつながりを有し、やはり命題の成立をめぐる話し手の判断を表示する形式であると考えられるが、ここでは詳しく議論しない。

〔後ろに川があるんですか？〕

これは「なぜ」疑問文が他の疑問文と異なり、関与する事態の数が一つだけでないことに起因する。「なぜ」疑問文以外の疑問文は、ある一つの事態の成立をめぐる不確定要素の解消を図ろうとするものである。すなわち、例(123)の不定疑問文の場合、事態 P「xの後ろに川がある」の x の値が埋まらない。また正反疑問文(124)にしても事態 P「川がある」が真なのか偽なのかが決まっていない。いずれも何らかの不確定要素が存在することにより事態 P は未成立のままである。

それに対して、「なぜ」疑問文には二つの事態が関わっていると考えられる。すなわち、例(122)のように、事態 P「後ろに川がある」は話し手には既に成立すると見なされており、不確定なのはその原因となる別の事態 Q(例えば「誰かが掘ったから」など)が何であるかという点である。

このように、「なぜ」疑問文では事態 Q が何であるかは不定のままであるが、反面、事態 P の成立が既に確認されているので ge2 と共起できるのである。他方、これ以外の疑問文では事態は成立していないため当然 ge2 は現れない。したがって、ge2 も平叙文にのみ生起すると考えて差し支えなく、「なぜ」疑問文に現れることは ge2 の意味から説明可能な例外であると言える。

4.4. その他

以上の gwa3、me1、ge2 は話し手の事態成立をめぐる認識的ムードを表示する形式であった。その中で me1 は、話し手の予想と反する事態 P が成立するかどうかを聞き手に委ねる意味を持つということで、事態成立をめぐる話し手の認識的様態を表す点では命題目当ての側面を持つが、一方で聞き手に判断を委ねるという聞き手を巻き込む側面も同時に有する。

このような聞き手を判断形成に巻き込む側面の方が、話し手の命題に対する認識的様態の表示よりも卓越した形式として le5 を位置づけることができる。すなわち、le5 はある事態に対する話し手の推測が正しいことを聞き手に認めさせようとする形式である。¹⁹

(125) 陳:.....我 諗 過 死 添 a3!

私 考える[経験] 死ぬ ~まで SP

〔死のうかとも考えたのよ!〕

芝:點 死? 割 脈?

どう 死ぬ 手首を切る

¹⁹ なお、le5 には音調のやや異なるバリエーションもある。

例) 我 唔 去 唔 得 le5。人 咁 等 緊 我 ga3。(梁仲森 1992:108)

私 [否定] 行く [否定] OK 人 待つ[進行] 私 SP

〔行かないとダメなんだってば。私のこと待ってるんだから。〕

こちらはもはや推測が正しいかどうかを問題にするのではなく、確定的事実として正しいことを聞き手に承認するように要請するものだと考えられる。

[どうやって?手首を切って?]

陳:唔係,想衝埋架巴士度,俾車撞死。

[否定]~だ 思う 突進する 寄る CL バス [場所詞] ~に 車 ぶつける 死ぬ

[ちがう。バスに突っ込んでぶつかって死のうと思ったの。]

芝:後來怕死所以冇做le5? (係咩?:9)

その後 怖い 死ぬ だから 無い する

[その後怖くなってやめたんでしょ?]

(126)...你試過俾人用槍指住個頭未a3?未le5。(電影:74)

あなた 試す[経験] ~に 人 で 銃 指す[持続] CL 頭 [未実現] SP [未実現]

[お前は拳銃を頭に突きつけられたことがあるか?ないだろう?]

le5は推測が正しいことの承認要請であるから、“梗係”「きっと、もちろん」や“一定”「きっと、絶対」といった事態成立の蓋然性の高いことを表す副詞と共起する。

(127)你梗係有嘢求我le5?(梁仲森 1992:108)

あなた きっと ある こと 頼む 私

[さては何か私に頼みごとがあるんでしょ?]

(128)你一定有嘢求我le5?

あなた きっと ある こと 頼む 私

[絶対何か私に頼みごとがあるんでしょ?]

5. 行為実行的ムード

前述の認識判断的ムードを表す類は、〈命題〉が成立するかどうかを問題にするグループであった。このように命題が成立するかどうかを話し手の認識的世界において問題にする認識判断ムード形式とは異なり、命題を話し手および聞き手が身を置く現実世界において成立させることの適否を問題にする形式があり、これにはle4という形式がある。²⁰

(129)你幫佢買包煙le4!(Fung 2000:131)

あなた 助ける 彼 買う CL たばこ

[君、彼にタバコ買って来てあげなよ。]

(130)咪整咗做怪le4。(Kwok 1984:83)

[禁止] いたずらする

[変ないたずらするなよ。]

(131)我哋坐飛機去上海le4?(方小燕 2003:73)

私達 乗る 飛行機 行く 上海

[私達飛行機で上海に行きましょうよ。]

²⁰ Fung 2000によれば他にもほぼ同じ意味機能を持つ形式にle3というのが挙げられているが、筆者が確認したところではこれは一個の文末助詞として見なされるほど、安定した形式ではないというため、ここでは考慮しない。

(132)我 試 吓 le4? (李新魁等 1995:511)

私 試す少し

[私がやってみようか?]

le4 は Fung 2000:130 が “pure deontic particle marking suggestion” というように、文(言表内容)を<命令・依頼>や<勧誘><行為提供>に転じる機能を持つ。²¹これら3つの下位類は当該の内容を誰が実行するかによって分けたものである。すなわち、聞き手が実行するのが<命令・依頼>(129)(130)、話し手と聞き手双方が実行するのが<勧誘>(131)、話し手が実行するのが<行為提供>(132)である。いずれにしても、必ず発話現場にいる話し手ないし聞き手のどちらかが実行者として含まれる。

このように、le4 は命題が成立するよう現実に働きかけて実行に移すことを表すため、<行為実行ムード>の形式として位置づけたい。行為実行ムードを表すということは、le4 は命題を現実世界で成立させるべき<実行内容>として専ら捉えているということである。先の認識判断的ムードでは命題は<叙述内容>として捉えられており、その成立をめぐる話し手の心的様態を表し分けていたが、le4 は<実行内容>として成立するように現実の世界において働きかけることを専ら表す。

le4 が命題を専ら<実行内容>として捉えていることはいくつかの点において見られる。

まず、話し手または聞き手以外の人物が主語になっている命題には le4 は生起できない。

(133)*佢 幫 我 買 le4。

彼 助ける 私 買う

[*彼が私の代わりに買ってください。]

これはもちろん le4 が命題を現実世界において成立させることをめぐる話し手の心的態度を表す形式であるため、たとえ事態そのものは未実現であっても実行する人物は発話現場にいる聞き手・話し手以外の人物であってはいけないからである。

また、話し手の判断を含んだ語句を伴った命題は<叙述内容>と見なされ、もはや<実行内容>とは見なせないため le4 は生起することができない。

(134)*我 會 嚟 le4。

私 [可能性] 来る

[私は来るだろう。]

(135)*你 要 同 佢 講 le4。

あなた [必要] と 彼 話す

[あなたは彼に話さなければならない。]

(136)*你 可以 嚟 le4。

あなた できる 来る

²¹ le4 によるこのような持ちかけは、張洪年 1972:174 によれば相談するようなニュアンスを伴うと言われ、また Kwok 1984:83 によれば聞き手からの対立を想定すると言われている。

[あなたは来てもよい。]

(134) (135) (136)のように“會”「～する可能性がある」、「要」「しなければならない」「可以」「～できる」といった話し手の判断を表す形式を含んだ命題の後には 1e4 は生起し得ない。²²

このように成否(真偽)を問題にできる対象としての<叙述内容>と、実現の適否を問題にできる対象としての<実行内容>という意味的対立は命題以外のレベルにおいても見られる。

例えば文末助詞をも含めた文全体(ここでは「発話」と仮称する)の末尾に付けられる付加疑問文の振る舞いを見ると、代表的なものだけ挙げると、叙述内容的発話に対しては“係唔係?”「そうですか?」、実行内容的発話に対しては“好唔好?”「いいですか?」が用いられるという区別がある。

(137) 咪 咁 嘈! 好 唔 好? / *係 唔 係?

[禁止] こんな うるさい よい[否定]よい ~だ[否定]~だ

[そんなに騒ぐな! いいか? / でしょう?]

(138) 佢 好 鍾意 踢波。 係 唔 係? / *好 唔 好?

彼 とても 好き サッカー ~だ[否定]~だ よい [否定]よい

[彼はとてもサッカーが好き。 でしょう? / いい?]

しかし、付加疑問文は発話という、命題よりも大きな単位のレベルにおいて叙述内容的か実行内容的かという対立に関連するため、次のように構文的特徴において命題(文)の単位では叙述内容的であっても発話のレベルで実行内容的に捉えられていれば“好唔好”が用いられることがあり得る。

(139) 嘩, 你 都 得 ga3, 你 都 可以 ga3, 你 仍然 可以 做 第二個 嘅

intj あなたも OK SP あなたも できる SP あなた 依然 できる なる 別の人 の

男朋友, 好 唔 好? (好天氣: 291)

彼氏 よい [否定]よい

[いいこと? あなたも大丈夫よ。あなただっにかまわないのよ。あなたも他の人の彼氏になれるの。 いい?]

付加疑問文は命題(文)レベルではなく、それ以上の言語的単位である発話レベルにおいて作用するからである。それに対して文末助詞は文の末尾に位置する事実が示すように、命題(文)レベルにおける対立に関与する。したがって文の構文的特徴に敏感である。

このように 1e4 は<叙述内容>的な文に生起することができない点から、1e4 を命題が現実世界において成立するよう働きかけるムードを表す<行為実行的ムード>の表示形式である

²² この点において 1e4 の生起する環境で同じように用いられ、命令・勧誘・行為提供といった機能の文を形成することがある 1a1(3.2.参照)とは異なる。1a1 は<叙述内容>の命題に生起することが全く妨げられないからである。

佢 走 咗 1a1。(Fung 2000:96)

彼 去る [完了]

[彼は帰ったでしょう?]

と位置づけ、〈認識判断的ムード〉を表すグループと対立させて考える。

なお、le4 が付いた文は基本的には文末において生起し、行為実行への持ちかけという機能を表すのだが、次のように従属節末への生起も見られる。

(140) (就算) 大家都 鬧 你 le4 咁 又 點 jek1? 你 如果 反省 過 覺得

たとえ みんな みな 罵る あなた それで また どう SP あなた もし 反省する [経験] 思う
自己 有錯 咪 得 lol。

自分 間違いない ジャナイ OK SP

〔(仮に)あなたが君を責めたてたとして、それがどうなんだ？君が反省して自分が正しい
と思ってるならそれでいいじゃないか！〕

このように、“就算~”「たとえ~でも」が導く従属節末に生起するのであるが、これはこれまで述べてきた〈行為実行〉持ちかけの用法とつながりが感じられる。

すなわち、この場合は現実世界において当該の行為を実行しようという提案ではなく、「P という事態を仮定しましょう」というように、事態 P の仮定を行うことへの提案と考えることができよう。²³

6. 6章のまとめ

この章では文末助詞の連用規則において最後尾に配置される D 類について論じてきた。D 類の構成員は本稿で論じたもの以外にもいくつかあるのだが、少なくとも D 類の中にも体系性が見られることが本章の議論で明らかになった。

まず、大きく見ると .から .までで述べてきた D 類の形式は、いずれも発信伝達というプロセスに関連するものであると考えられた。そしてこれらはいくつかの指標を基にしてさらに下位分類される。

まず 2.1. で論じたことからわかるように、文末助詞が付けられる発話の種類ないしは属性によって、言い換えればそれが〈声〉であるか〈情報〉であるかによってこれらの形式は分類される。次に、2.2. で議論したように、話し手が受け手の立場で他人によって発せられた発話の解釈を示す形式として a4 や wo5 を規定した。これは見方を変えれば当該の発話が話し手本人から発せられたのではないことを意味する。したがって、発話の出所が話し手であるか否かという指標によってまた分類される。そして、3. で述べたように、当該の発話が話し手に由来する〈情報〉である場合、聞き手の情報に依存した発話の仕方を行うための特別の形式として、la1 や a1ma3 のような形式が位置づけられる。

以上の発話の発信伝達に関する形式群を、それぞれが関与する指標に基づいて分類したのが以下の表である。

²³ 日本語の命令形態にも主文末でない場所において生起し、状況を設定し想像するという条件文の前件を形成する用法があると言われるがそれに類似する。「彼が結婚式に来てみる、大変だぞ。」(森山 2000)

第6章 D類 言表内容の差し出し方

発信伝達	発話の発信元	発話の種類				
		声		情報		
		聞き手情報依存	有	X	la1	a1ma3
			無		a3	wo3
話し手以外		a4 a5	wo5			

他方、4.以下で議論してきた形式は命題(proposition)の成立をめぐる話し手の態度を表し分ける類と見なされる。その中でも命題を認識世界において成立するかどうかを問題にする認識的ムードを表すのか、現実世界において成立させることを問題にする実行的ムードを表すのかという指標により、以下のような分類がなされた。

命題	認識的ムード	gwa3 me1 ge2	le5
	実行的ムード	le4	

このように、D類には発話の発信伝達プロセスへの話し手の関与の仕方を表し分ける類と、命題の成立や実現をめぐる話し手の態度を表示し分ける類とが区別された。そして、この<発信伝達>類と<命題>類とは同じくD類に属しながら、文末助詞が付される言表内容に関して、命題としての成立可否を問題にするかどうかという指標によって分かたれると言えよう。すなわち、後者は命題としての成立可否そのものに対する話し手の心的態度のあり方を表し分けるのに対し、前者は命題の成立可否そのものを問題にすることはなく、専ら発話伝達という対人的プロセスの中での話し手による言表内容の扱い方を表し分けるのである。

第7章 結論

1. はじめに

2章から6章までの議論により文末助詞にはA類からD類までの各類が帰納され、それぞれの類の意味的特徴が明らかにされた。

この章では各章での議論を下敷きに各類を位置付け、文末助詞全体の枠組みを分析し、また他の文法カテゴリーとの接点を論じることで今後の展望を述べたい。

1.1. 各類の位置付け

1.1.1. A類

A類の文末助詞“住、嚟、先、添”はどれも動詞や形容詞など語彙的意味を持つ語から個別に機能拡張ないし文法化を起こしてきたと思われる形式で、類としてのまとまりには欠ける。これらはまた文法的振る舞いがB類以下とは異なっていた。

(1) 我 覺得 好似 俾 人 打劫 完 嚟 一樣。(網)

私 思う まるで ~に 人 強盗する[完結] 同じ

[まるで強奪されたみたいな感じだ。]

(2) 可 唔 可以 唔 講 呢 樣 嘢 住 a3? (19:132)

できる[否定]-できる [否定] 話す この CL こと SP

[それは今話さないでおくってことでいい?]

(3) 佢 硬係 會 坐 吓 先 ga3。(張洪年 1972:193)

彼 あくまでも [可能性] 座る ちょっと

[彼はいつでもとりあえずちょっと座ろうとする。]

(1)では“好似~一樣”「まるで~のようだ」という節の中の“俾人打劫完+嚟”に“嚟”が生起したり、(2)では“住”が“可以~”「~してよい」が従える句“唔講呢樣嘢+住”の一部になっていたりする。また、では(3)“會”「~することになる」が従える述語句“坐吓+先”「とりあえずちょっと座ろう」の内部に“先”が生起している。

このように、A類の“住、嚟、先”には文全体とではなく、文中に生起する特定の節や述語句とのみ意味関係を構成する例がある。したがって、正確を期すならばA類の“住、嚟、先”は文末助詞というよりは、節末助詞ないし句末助詞と称されるべきかもしれない。¹しかし、2章3.2.1.で述べたように、他にB類以下の形式が無い場合には、発話として唐突で不完全なものになることを防ぐという、文末助詞に似た効果を果たすなどの理由から文末助詞のカテゴリーに含め、周辺的な成員と見なし文末助詞体系において位置付けることにした。

A類形式はいずれも文によって述べられる事柄的内容の一部をなす。すなわち、文や述語

¹ただし、すぐ下で述べるように“添”だけはこの限りではない。

が描くコトのあり方やコトとコトの関係を表示する機能を持つ形式であり、コトとともに文の事柄的意味を形成するような単位である。

A 類の内部には“住、嚙”と“先、添”という 2 組の異なる下位類が見いだされた。前者はコトの時間的なあり方を表す。動詞「留まる、住む」に由来する“住”は、アスペクト助詞としての「時間の推移とともに終結を迎える動作を留めておく」という動作の形の表現（時間的あり方としては「持続」）の意味機能を引き継ぎ、コトを非完結的な姿で描く。一方、“VP 嚙”のように動詞句に現れる“嚙”（動詞としては「来る」の意味）は、コトの属性定義付けを行う機能を持つと考えられ、そのため既然のコトの生起を完結的に捉える。このように、“住、嚙”はコトを時間軸の上において捉え、非完結的・完結的なあり方をとるものとして提示する。

他方、“先、添”はコトとコトとの関係を表すのであった。“先”は当該のコト 1 が他の非明示的なコト 2 よりも時間的に前に生起することを表す。“添”は動詞としては「追加する」意味を表すが、それがモノの追加からコトの追加へと拡張したものである。文末助詞と見なされるコトの追加用法では、当該のコト 1 を既存の別のコト 2 の上にポイント加算的に追加することで、背後にある何らかの尺度における値を大きくする作用を持つ。このように、“先”は時間軸の上で、“添”は尺度軸の上で、当該のコト 1 が別のコト 2 との間に持つ関係を規定する。

なお、A 類の中で“添”が持つ意味機能だけは時間性とは無縁である。したがって、他の 3 つの形式とは異なり時間性の主な表現手段である述語句とだけ意味関係を持つのではなく、主語をも含めたコト全体を他のコトとの関わりにおいて規定するのである。その点で“添”が関わるコトは、他の 3 つの A 類形式の関与するコトより命題に近い性質を持つためか、“添”は振る舞いの点でも他の A 類形式とは一線を画し、B 類の g-より後に来こともできる。

1.1.2. B 類・C 類

A 類には文内部の節や句を構成する成分として生起する振る舞いを持つものがあつたのとは異なり、それより後に配される B 類、C 類、D 類は原則として文全体に付加されるという特徴を持つ。意味的に見ても A 類がそれ自身、文の事柄的意味を形成するような単位であるのとは異なり、文の事柄的意味には何も付け加えず、文全体が表す内容に対する発話時の話し手による様々な主観的態度を表すものだと考えられる。

文が一般に、述べられる内容(命題)という客体と、それをめぐる「話し手」の「発話時」における把握の仕方や態度、あるいは述べ方といった主観的要素とに二分されることは、日本語の研究などにおいてよく知られることである。後者はモダリティと称されることもあるが、定義の仕方の違いによって研究者の間でも呼び方やその実質などに入出りがある(仁田 1991、益岡 1991、森山・仁田・工藤 2000、宮崎他 2002 など参照)。

本稿ではこのような文で述べられる内容を<言表内容>と呼ぶ。そして、B 類以下の文末

助詞が表すのは<言表内容>をめぐる話し手の発話時における様々な態度であり、これを<言表態度>と呼ぶことにする。²そこで、B類、C類、D類は言表内容目当ての形式ということになる。

B類のgは文内部の成分のレベルでモノ化機能を持つ構造助詞“嘸”[ge3]に由来する形式であり、文末助詞としては言表内容が表す命題をモノ化する機能を持つ。命題のモノ化とは命題を非コト化することで命題から個別性を捨象し一般化するということである。すなわち、命題と個人との結びつきを断ち切り、また命題を発話時という一回的個別的場面から解き放ち、一般的・普遍的な性質のものに変える働きを持つ。このように、命題の性質を規定するのがB類のgである。

次にB類の外側に位置するC類のI及びjは、事態に対する話し手の見立てを表す。Iは言表内容が表す事態を「新しい状況」と見立て、jは言表内容が表す事態やモノを「(何らかの尺度の上で)相対的に度合いの小さい要素」と見立てる。また、Iには言表内容が表す客体としての事態が「新しい状況」であるとの見立てを行う基本的用法以外に、言表内容をめぐる主体の側(話し手)の認識状態が「新しい状況」であることを表す拡張的用法とがある。一方、jにも言表内容が表す客体としての事態やモノが「度合いの小さい要素」であるとの見立てを行う基本的用法以外に、先行発話や当該の発話が「度合いの小さい要素(価値の低い要素)」であると位置付ける拡張用法がある。

「新しい状況」を見出すということは<変化>の存在を捉えることで、「度合いの小さい要素」を見出すというのは<序列>の存在を捉えることでもある。<序列>は<尺度>を前提とし、<変化>は<時間>を前提とするが、<尺度>及び<時間>という概念はA類のコトとコトの関係付け作用において用いられた概念でもあり、ここにおいて両者には関連性が見られる。

B類とC類とはD類の前に現れる類であり、構成員の少なさや音声的自立度の低さの点で共通するが、両者は次のような違いがある。すなわち、B類が命題の一般化というように、客体としての言表内容の性質そのものを規定するのに対して、C類は話し手による言表内容をめぐる見立てというより主観的作用を表す。客体よりのB類に対して主体よりのC類という点については、以下で具体例を挙げて説明したい。

B類とC類とは疑問文への生起に関して振る舞いが異なる。例えば次のような肯定的事態と否定的事態を並べた正反疑問文にC類のIは生起できない。

(4) *我 走 唔 走得 la3?

私 去る [否定] 去る [許可]

[私は帰っていいですか?]

これは「私は帰ってよい」かどうかという事態そのものが話し手のうちでは不確定であるのに、同時にそれを「新しい状況」と見立てることはできないからである。しかし、次のよ

² 言表態度という用語は仁田 1991 に倣ったものだが、その実質は大きく異なる。

うに“係唔係~”「~なのですか？」疑問文を用いてやれば可能である。

(5) 我 係 唔 係 走 得 la3?

私 ~だ [否定] ~だ 去る [許可]

[私は帰っていいんですか?]

統語的には文中に配置される“係唔係”「~なのですか？」は意味の上では“我走得+la3”という「事態+話し手の見立て(1-)」をさらに外側から包み込んでいる。このように“係唔係~”疑問文では(4)のような正反疑問文とは異なり、“係”「~である」か“唔係”「~ではない」という判断の部分においては肯定と否定が選択的に捉えられているものの、「私は帰ってよい」(肯定)か「帰ってはいけない」(否定)かという内容はもはや対立的に不確定に捉えてられているわけではなく、肯定の方の「私は帰ってよい」という事態が選ばれてある。そしてその事態に対して話し手が「新しい状況」だと見立てているのである。

このように、1-によって「新しい状況」だと見立てるには、その前提として見立てる対象としての事態が存在することが何らかの形で保証されていなければならない。しかし、肯定的事態と否定的事態を対等に選択的に並べた(4)のような正反疑問文はその要件を満たしていないため、生起することは意味的に矛盾するのである。“係唔係”疑問文は例外的にどちらかを選択した形をとるため生起できるにすぎず、1-の疑問文への生起はかなり限られると言ってよい。³

このことは尺度の上で「相対的に度合いの小さい要素」だとの見立てを表す j-についてもほぼ同じで、平叙文への生起に比べると疑問文への生起には大きな制限がある。

まず平叙文の例から見よう。

(6) 我哋 住 得 好 近 ja3.

私達 住む とても 近い

[私達は近所に住んでいるんですよ。]

「(私達お互いの居住地間の距離が)近い」という状況は「距離(遠さ)」の尺度の上からすれば、度合いが相対的に小さいものと位置づけられる。しかし、次のように「近い」という事態そのものが成立するかどうか不確定に捉えておきながら、一方で j-を用いて事態「近い」に対する話し手の見立てを表すことはできない。⁴

(7) *你哋 住 得 近 唔 近 ja3?

あなた達 住む 近い [否定] 近い

³ 1-は疑問詞を用いた不定疑問文の一部にも生起できるが、これはたとえ事態の中に不確定箇所 x があったとしても、その事態が「新しい状況」と見立て得ることが保証されていけばよいからである。例えば、“幾多歲 la3?”「何歳になった?」、「幾點鐘 la3?»「何時になった?」のように、人が年を重ねることや時間が過ぎることは、時間の流れにおいて展開する事象として捉えやすいため、「x 歳である」や「x 時である」という事態を「新しい状況」であると容易に見なせるため成立する。

⁴ j-を含む形式のうち、jek1を用いた“你哋住得近唔近 jek1”「あなた達は近所に住んでるの?」であれば可能である。これは Fung 2000:43 が言うように質問内容が「たいした質問でもなく簡単に答えられるものだ」と見なす拡張的用法である。5章 3.2.参照。

第7章 結論

[あなた達はお互いの家は近いですか?]

他方、B類のgは事態の確定・不確定には全く影響されない。事態を不確定に捉えるとはすなわち疑問文に見られる意味的あり方であるが、4章で既に見たようにgは平叙文にも、また疑問文にも自由に生起する。

(8) 你 走 得 ga3。 [確定]

あなた 去る [許可]
[帰ってもいいですよ。]

(9) 我 走 唔 走 得 ga3? [不確定]

私 去る [否定] 去る [許可]
[私は帰ってもいいですか?]

(10) 你 哋 住 得 近 唔 近 ga3? [不確定]

あなた達 住む 近い [否定] 近い
[あなた達の家は近いですか?]

これはgが言表内容において描かれる事態ないし命題を一般的な性質のものに変えるという、言表内容の性質転換だけを行うからで、そこで描かれる事態(命題)が成立するかどうかに関わらず行うことのできる営みを司るからである。

このようにB類のgは言表内容という客体自身が持つ性質を規定しようとする客体寄りの作用を表すのに対し、C類のlやjは言表内容をめぐる話し手の見立てという主体的・主観的作用を表すという違いがある。

このような違いは中国語のアスペクト標識の体系において見られるものに喩えて考えることができよう。⁵木村 1982 では中国語のアスペクト形式と見なされるべき形式が論じられているが、これらは已然・未然を軸に2層に分けられるという。そのうち「基準時において既に実現をみている動作・作用」(已然の動作・作用)を表すアスペクト形式が“了、著”であり、これらは話者が自己との関係において動作・作用をそれぞれ完了或いは持続という姿で捉えることを表すとされる。これら話者による外側からの動作・作用の過程の規定を行う類に対して、動作・作用自らが持つ内的時間段階(始動・継続・終結)の過程を示す“起來、下去、完”はより客観的・素材的な類の形式であると見なされている。というのは、これらが差し出す時間的段階は話者の介在なしに客観的に存在するからで、そのため話者が定位した基準時に実現済みかどうかという已然・未然の対立にも中立的であり、その証拠に已然の動作・作用の非成立を表す否定詞“沒有”とも共起できると言う。対して先の話者側の動作・作用のあり方規定の類“了、著”は已然の動作・作用のあり方を表すため“沒有”とは共起しないが、これについては成立のあり方を言いたてると同時に非成立を主張することは矛盾するからだと明言している。

これを本章での論旨に応用すると、B類のgは言表内容の性質規定という、より素材・

⁵ 以下では中国語についての議論を引用するが、広東語についても同様のことが言えると予測される。

客体よりの内的な規定の仕方であるのに対し、C類は言表内容に対する話し手の見立てという話者からの外的な規定の仕方であると言えよう。素材としての言表内容の性質を規定するだけであれば、言表内容において描かれる事態が成立するかどうか(確定的内容か不確定的内容か)という対立に対しては中立であり得る。そこでgは平叙文にも疑問文にも自由に生起する。しかし、C類のように話し手からした事態の見立てを表すには、見立てられる事態が存在することが話し手のうちに何らかの形で捉えられていなければならない。つまり、確定的内容である必要がある。なぜなら、事態への見立てを言いたてると同時に事態成立に対する不確定さを表すことは明らかに矛盾するからである。

これらB類gとC類j、lは共に内側からあるいは外側から言表内容のあり方を述べるものだとまとめられる。そして、音声形態的にも同化・縮約により安定性が低いという特徴を持つ。

1.1.3. D類

最後に最も外側に位置するD類は夥しい数の形式を含み、平叙文・疑問文・命令文といった文類型に対して敏感な反応をする。すなわち、ある一群の形式は3つの文類型全てに生起するが、ある一群のものは疑問文だけには生起しない、などといった文法的振る舞いをする。また、声調のみが異なる形式がまとまって存在するなど、音声音韻的特徴と意味機能との関連が見られる。

この類は文類型への生起状況と音声音韻的特徴を手がかりに2種類に大別された。

まず、専ら言表内容が表す命題に対する話し手の態度を表すタイプの形式がある。その中心となるのは命題の成立をめぐる話し手がどのような認識的態度を有しているかを表す<認識判断モード>の形式である。具体的には命題が一定の蓋然性を持って成立するものであるという述べ方を表すgwa3、話し手自身の予測とは反する命題の成否判断を聞き手に委ねるme1、話し手の予測と反する命題が成立することを述べ立てるge2がある。

このように命題が成立するかどうかを問題にする<認識判断モード>形式においては、命題は<叙述内容>として捉えられている。その一方で、命題を話し手および聞き手が身を置く現実世界で実現されるべき<実行内容>として捉え、現実世界において成立させていくことの適否を問題にする形式があり、<行為実行モード>の形式として区別される。具体的にはle4という形式があり、命題Pを現実に行うさせることの妥当性を聞き手にも同意するよう持ちかけるとでもいった意味を持ち、それが付いた文全体は命令・依頼、勧誘、行為提供のうちのいずれかの機能の文になる。

このように、言表内容が表す命題への認識判断的モード、行為実行的モードという2種類のモードの表し分けがあるが、共に言表内容が表す命題の認識的世界における成立、現実世界における実現を述べる点で、命題成立可否をめぐる話し手の態度を表す形式であると言えよう。

以上の文末助詞は命題成立可否をめぐる話し手のモードの表し分けであったが、一方で

第7章 結論

発信・伝達プロセスの諸側面に関わるタイプの形式が区別される。このタイプには数多くの形式が存在するが、「発話の発信元」、「発話の種類」、「聞き手情報依存の有無」を指標に体系的に分類される。

まず、当該の発話が話し手から発せられたものであるのか、それとも話し手以外から発せられたものであるのかという、発話の出所の違いからこれらの形式は2類に分けられる。

そして、発信伝達プロセスにおいて扱われている発話(utterance)の種類について、それを<声>として捉えているか、<情報>として捉えているかによってもこれらの形式は2類に分けられる。<声>とは発した本人から離れては存在し得ない、情報的価値を必ずしも持たされていない発話を指し、<情報>とは時空間を越えて何人にも保持され得るような伝達内容を有した発話を指す。

さらに、話し手が発話を<情報>として伝達するプロセスにおいては、聞き手の情報へ依存した発話の仕方を行うための形式が特別に用意されている。聞き手情報依存とは情報伝達において、あたかも聞き手が持つ情報へ依存するかのような有標的な述べ方のことを言う。

以上で述べたように、最後尾に配置されるD類文末助詞には少なくとも命題成立をめぐる態度表示の類と発信伝達プロセスにおける発話の扱い方を表す類とがある。このうち、前者は命題としての成立可否そのものに対する話し手の心的態度を第一義的に表す。一方、後者は命題の成立可否そのものを問題にはしておらず、専ら発話伝達という対人的プロセスの中での話し手の言表内容の扱い方を表す点で対立的である。

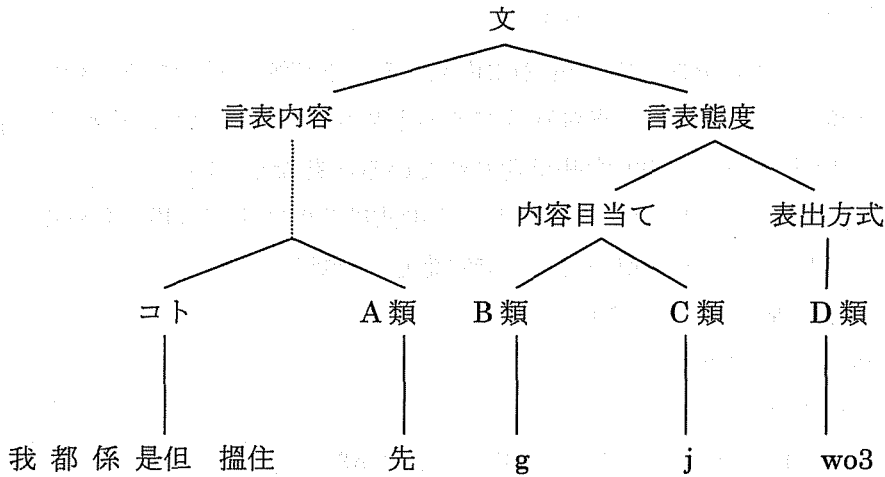
このように、命題成立そのものを問題にするかどうかという点で、この2つの類は性格が異なるものの、これらに対してはいずれも最後尾に配されるD類の形式として、B類やC類とは異なる共通の意味特徴を考える必要があるだろう。

B類は言表内容の表す命題を一般的な性質のものに変え、C類は事態に対する話し手の見立てを表すのであったが、これらはいわば言表内容の内容的側面に関わり、話し手が実際に言表内容を用いて発話という言語活動を行う以前の段階での問題に関与する。それに比べるとD類は話し手が言表内容をどのような意図の下、どのようなものとして発話の場に差し出そうとしているのか、実際に発話という言語活動を行う段階における言表内容の様々な表出方式を表す。例えば、a4ならば話し手の目の前の発信者の<声>としてどういう発話が聞き取られたかその受け取り方を示すという差し出し方、ge2ならば話し手の予想外に成立する命題として述べるという差し出し方を表す。発話場への差し出し方を示すというからには、差し出された発話を受け取る聞き手の存在が意識されているということの意味する。

1.2. 全体の枠組み

以上で述べた文末助詞の全体の枠組みを図示すると次のようになるだろう。

(11)



[私もとりあえず適当に探しておこうっていうだけだよ。]

A類が関わるのは主に述語によって描かれるコトである。これらA類形式は文の中の述語句や節の末尾に現れることがあるという特徴からB類以下とは区別され、節末助詞と呼ばれるのがふさわしい。そしてB類以下と異なり、それら自身が言表内容の一部を成す成分である。ただ、他にB類以下の形式がなく文末に位置する場合は発話として不完全になるのを防ぐ効果を持つ点で、B類以下の真の文末助詞との類似性をも有する。

B類以下が真の文末助詞であり、これらは言表内容に対する言表態度(モダリティ)の表示を行う。B類・C類は言表内容に対する内容レベルでの言表態度、D類は言表内容を用いた発話表出レベルの言表態度の表示である。すぐ上で述べたように、発話場への発話の差し出し方を表し分けるといふことは、発話場にいる聞き手(独り言の場合の仮想的聞き手をも含む)の存在が多かれ少なかれ意識されているということである。一方、B類やC類は聞き手の存在が問題になる以前の内容レベルでの言表態度を表す。したがって、わかりやすく言えばB・C類は対事レベルの言表態度、D類は対人レベルの言表態度ともいえよう。このように、文末助詞の中でも後ろ(外側)に位置するものであればあるほど、聞き手目当ての性格がより強くなることが見て取れる。

さらに本稿では、文末助詞の使用に当たっては、B類やC類といった表出以前の内容目当ての言表態度を表す文末助詞はそれだけで自足的に生起することはなく、必ず何らかの有形(D類)・無形の表出方法(差し出し方)を伴わなければならないと考える。⁶つまり、B類・C類は内容レベルでの話し手の態度を表すだけであるため、それらを用いるからには、話し手は言表内容をどのようにして発話の場に差し出そうとするかを同時に規定しなければな

⁶ もちろんD類のどれもが等しく用いられるわけではない。意味的な制限からB・C類と共起し得ないD類形式もある。

らないということである。本稿で g-(B 類)や j、l-(C 類)と記してきたのは、それらが粘着的要素であることを示そうとしたからである。

B 類 g-については、構造助詞“嘅” [ge3]に由来することが明らかであり、ge3 という形態は最も基本の形態だと考えられ、単独形式であると思なされてきたが、それでも ge3 にも何らかの無形の固有の表出方法的意味が含まれていると思なしたい。

一例を挙げると、疑問文においては ge3 という形式はそのままでは用いられることがなく、後に例えば D 類の a3 などを用いることで安定した発話になる。

(12) *聽日 會 唔 會 落雨 ge3?

明日 [可能性][否定][可能性] 雨が降る

[明日雨が降りますか?]

(13) 聽日 會 唔 會 落雨 ga3? [g- + a3 → ga3]

明日 [可能性][否定][可能性] 雨が降る

[明日雨が降りますか?]

ge3 という形式から B 類の g-を取り去った残りの部分が担う表出的意味について現段階では詳論することはできないが、例えば暫定的に「断定、言い切り」といったものが仮定されよう。

C 類の la3、laak3 や je1、jek1 といった単独形式と思なされてきた形式についても同様に、何らかの固有の表出的意味が含まれていると思なす。表出方式を表す形式については本稿で取り上げたもの以外にも、音節をなさない単位のものもいくつかあると考えられるので、これらがいかなる表出方式を伴っているのか現段階では考察が不十分で明言することはできないが、そのように想定することは可能であると思なえる。

2. 今後の展望

従来の文末助詞の先行研究では、文末助詞が日常会話に偏在したり、話し手の主観的態度を表したりすることから、「言外の意味の表示」、「発話行為の表示」、「会話の組織化」など様々な意味付けの提案がなされてきた。また、例えば Luke 1990 のように各形式に固有の意味を認めない方法も取られた。その結果、文末助詞というカテゴリーが広東語の他の文法カテゴリーとは相当異質なものであるかのように取り扱われ、広東語の文法体系全体において特異な位置を与えられてきた感がある。

しかしながら、本稿ではまず文末助詞というカテゴリー固有の意味機能をテキストへの〈一回性・個人性〉付与による非自律的テキストの構成であると思なえた。そして、各下位類が関与する意味的・文法的レベルの差を指摘し、それぞれの類に対してなるべく抽象的で一般的な意味的パラメーターを用意した。このように各下位類が言表内容の異なるレベルに対して、様々なパラメーターを基準にして意味関係を構築していると思なえることで、ひいては他の文法カテゴリーとの接点や類似点を見出すことが可能になり、文末助詞が決して特異なカテゴリーでないことが証明されると思なえる。

そこで以下では、本稿で文末助詞の分析に用いたレベルやパラメーターを手がかりに、他の文法カテゴリーとの接点を模索してみたい。

2.1. 他の文法的カテゴリーとの接点

すぐ上でまとめたように、文末助詞は文の事柄的意味の一部を成す A 類と、文の事柄的意味には増減をもたらさず、文の表す言表内容に対する言表態度を表す B・C・D 類とに分けられた。

言表態度を表すという点では他の文法的カテゴリーとしては副詞にもそういった機能を有するものが見られる。副詞には程度を表す程度副詞、様態を表す情態副詞、その外“都”「みな」、「淨係」「ただ〜だけ」のような範囲副詞、“即刻”「すぐに」、「一直」「ずっと」のような時間関連の副詞、否定副詞などがあるが、これらのほかに文の命題に対する話し手の態度や評価を表す語気副詞と呼ばれるものがある。⁷

この語気副詞の中には認識判断的モードや行為実行的モードを表すのではないかと考えられる形式がある。例えば“或者”「ひょっとすると」、「唔通」「まさか」は事態成立の蓋然性や確信度を表す。他方、“不如”「なんなら」、「一於」「いっそ、ぜひとも」、「千祈」「くれぐれも」は命令や勧誘といった未実現事態の遂行へ向けた働きかけを表す。認識判断的モードの副詞は<叙述内容>的文に出現し、行為実行的モード副詞は<実行内容>を表す文に出現する。

(14) 或者 佢 病 咗 冇 返學。(網)

あるいは 彼 病気になる[完了] 無い 登校する

[もしかしたら彼は病気で登校してないのかもしれない。]

(15) 唔通 佢 唔記得 咗?

まさか 彼 忘れる [完了]

[まさか彼は忘れたんだろうか?]

(16) 不如 你 買 la1/a1/le4。

なんなら あなた 買う SP SP SP

[なんなら君が買いなよ/買えば?/買えよ。]

(17) 一於 唔好 睬 佢 啱 laak3。(李新魁等 1995:498)

絶対 [禁止] かまう 彼 正しい SP

[絶対彼にかまってはいけないんだ。]

(18) 千祈 唔好 俾 人 知 bo3。(李新魁等 1995:499)

くれぐれも [禁止] られる 人 知る SP

[くれぐれも人に知られるなよ。]

このうち当面のところ行為実行的モードにしぼって議論することになると、これらの副

⁷ 中国語の副詞についての張宜生 2000 での分類を参考に、広東語の例については本稿筆者が補足した。

詞は叙述内容的な文には生起できない。

(19) *佢 千祈 病 咗。

彼 くれぐれも 病気になる[完了]

[*彼はくれぐれも病気になった。]

(20) *琴日 你 一於 去 咗 報名。(李新魁等 1995:498)

昨日 あなた きっと 行く[完了] 申し込む

[昨日あなたは絶対に申し込みに行った。]

ただ、特に行為実行的モードと思われる副詞の場合、文そのものの構文的特徴から見れば叙述内容的と思われる文にも生起する。⁸

例えば助動詞“要”を含む文は「～しなければならない」という義務の判断を述べ立てる点で叙述内容的な文であるが、“千祈”はこれと共に共起する。

(21) 千祈 要 小心 a3~!!! (網)

くれぐれも 必要だ 気を付ける SP

[くれぐれも気をつけないとだめだよ～。]

また、李新魁等 1995 によれば“一於”「ぜひとも、いっそ」は三人称主語をとり、その人物の意志を表すことがあるという。

(22) 佢 唔忿氣, 一於 要 搵倒 個 架 車。(李新魁等 1995:498)

彼 強情だ きっと[意思] 見つける あの CL 車

[彼は強情にも絶対あの車を見つけてやろうとする。]

ただ、「意志」や「義務」というように未実現の事態を遂行することについて述べられているからこそ、行為実行的モードを表すこれらの副詞が生起するのだとも考えられ、(20)のような単なる出来事の叙述を行う文には生起できないこととは見逃せない。

いずれにせよ、ここで挙げたような語気副詞と文末助詞 D 類の中の命題への認識判断的モード及び行為実行的モード表示の類とは関与するレベルの差こそあれ、互いに相通じる性格を持つことは言える。

また、D 類の一部の形式が担う発信伝達プロセスにおける発話の扱い方表示という機能に着目すれば、応答詞・感動詞のような、同じように日常会話に偏在するカテゴリーとの共通性も見られる。ただ、これらのカテゴリーについては広東語ではそれほど体系的で包括的な研究がないために、今のところは接点の可能性を指摘するに留まる。

田窪・金水 1997 では日本語の感動詞・応答詞を入出力制御系と言い淀み系との二つにわけ、さらに前者を 10 のグループに分けている。その中で「意外・驚き」に 3 種類見られるが、「意外・驚き 1」としたグループには、「え? はあ?」のように、「相手の音声そのものが雑音や発話不鮮明等の障害により一部または全部聞き取れなかったことを表明する」ものを典

⁸ 日本語においては、工藤 2000 で命題への態度を表す副詞(陳述副詞)の中で文の持つ叙法性と関わる叙法副詞が取り出され、叙法副詞にさらに下位分類として行為的叙法と認識的叙法などが立てられているが、これらの副詞とそれと「呼応」する形式との複雑な関係をめぐっての議論があるので参照されたい。

第7章 結論

型として挙げている。これは、同じく「意外驚き 2」「あれ、あら、おや」のような「眼前の状況をまず事実として登録し、その情報が事前に用意された知識データと整合しないことを表明」する類および「眼前の状況や相手の発話から得られた新規情報を登録した上で、その情報が予測を越えるものであったことを表明する」「おお、わあ」のような意外・驚きと区別されている。「意外・驚き」は外界世界からの刺激に対する話し手の反応を示すものと考えられるが、<音声>と<情報>とが分類の指標となっていると見なせるのかもしれない。

また、仁田 1997 では未展開文という名のもとに、一語文や独立語文と共にいくつかの応答詞・感嘆詞(感動詞)を扱っているが、「おい、ねえ、もしもし」のような呼びかけ詞が取り上げられている。仁田 1997 は呼びかけを「呼びかけられる存在を言語の受信者にするることによって、言語行為成立の重要な要件である、発信者と受信者を作り出し言語行為の場を開くもの」としている。

言語行為の場を開くとは相手とのコミュニケーションを樹立しようとするということであるが、それはすなわち、相手に自分の<声>が届くかどうかというコミュニケーション開始に必要な最低限の条件が問題になり得る状況ということであろう。本稿 6 章で述べたように、このような状況のもとで言表内容(発話)を自分の<声>として聞き手の耳に届けようと送り出すのが a3 であった。

以上、文末助詞と他の文法カテゴリーとの接点を模索してみた。

2.2. 音韻的・音声的手段との接点

文末助詞というカテゴリーにとってもう一つ特徴的なのは、意味と音声・音韻的形式とが密接な関係にあるということである。本稿の 6 章での D 類形式についての議論は文末助詞の意味分析には、音声・音韻的な特徴をも考慮に入れなければならないことを示している。

すなわち、成員の数の多い D 類に属す各形式を見渡せば、用いられる母音や声調に偏りがあることが指摘できる。韻母では/a, e, o/, 声調では 1 声、3 声、4 声、5 声が大勢を占める。このような韻母や声調の現れ方に意味づけをすることもあながち無理ではないだろう。

韻母について見れば/i, u/といった狭い母音を持たないことが指摘できるが、日本語の終助詞が「ね、よ、わ、ぞ」など同じように狭い母音からなる形式を持たないことと併せて考えて見れば、単なる偶然とは考えにくい。⁹また、個別の形式について言えば、発話を話し手の<声>として聞き手に届けることを目指す D 類の a3 が/a/という韻母であることも、この母音の持つ聞こえ度の大きさや口の開きの大きさと関連すると見られる。聞き手に自分の発話を聞こえさせることを目指すのであるから、聞こえの大きな母音が用いられるのは偶然ではないだろう。

⁹ I-に[u]が結合した形式 lu3 という形式が聞かれることがあるが、これは la3 の持つ[a]母音が梁仲森 1992:128 の言うように円唇化・中央化してできた異形態であろう。

第7章 結論

声調については日本語の終助詞のイントネーションのあり方とも比較することができ、普遍的な傾向が予測されるところである。よく知られるように、日本語の終助詞、文末形式はイントネーションによって意味が区別されることがある。

例えば、「よ」については井上 1993 の指摘がある。例えば次の例では高くあるいは上昇調で発音される「よ」(「よ H」と示す)と、低くあるいは下降調で発音される「よ」(「よ L」と示す)との違いを示す例として挙げられている。

(23) はい、写真をとるから、動かないでよ H。

(24) ちょっと。写真をとるんだから、動かないでよ L。

これらは話し手の意向に反する状況が存在するのを前提として発せられるか((24))そうでないか((23))の違いがあると言われる。

命令文だけでなく、平叙文の「よ」にも意味の区別があると言われる(井上 1997)。また、「か」や「だろう」も同様に、イントネーションによって意味の区別がある。「ああ、3時か。」のような情報受容の疑問文は必ず下降イントネーションである(森山 1999)。

このように文末形式にかぶさるイントネーションが各文末形式固有の音声形態と切り離して考えられるのは、日本語が声調を持たないからである。こうしてみると、逆に広東語における文末助詞の声調の現れ方は、日本語のような声調を持たない言語における文末イントネーションのあり方を具現していると考えられる。すなわち、文末イントネーションが声調として各形式固有の音声形態の中に取り込まれるため、2章並びに6章で述べたように、最後尾に位置する D 類には夥しい数の成員が属し、正確にいくつあるか把握することすら不可能になるのである。

広東語の文末助詞の声調の現れ方をこのように見なせば、文末イントネーションの持つ普遍的傾向を探ることも可能になる。日本語では上昇イントネーションは聞き手の反応をうかがうといった意味を表すとされる(森山 1999)が、広東語でも第一声は聞き手の反応伺いという意味を見い出すことができるかもしれない。一例を挙げると、me1 は「話し手が信じていない命題 P の真偽を問う」意味機能を持つが、聞き手に判断を委ね回答を要求する点で話し手の反応待ちである。また、la1 は聞き手の情報に依存した発話の仕方を表すが聞き手の同意要求を行う機能を持つことがある。このように第一声には聞き手の反応をうかがう意味が見て取れるのではないかと考えられる。

いずれにせよ、以上で述べた他の文法カテゴリー並びに音韻的・音声的手段との接点を探るためには、本稿で取り上げられなかった形式も含め、個々の形式の意味記述並びに形式間の意味的関連付け作業を精緻化する必要があり、全ては今後の課題とされる。

参考文献及び例文出典一覧

<参考文献>

- 相原茂 1976 「“很+不・形容詞”の成立する条件」『中国語学』223号, 71-91頁.
- Chao, YuenRen. 1947. *Cantonese primer*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press. (山田小枝訳 1988『アスペクト』むぎ書房.)
- 鄧思穎 2002 「粵語句末助詞的不對稱分布」『中國語文研究』第二期, 75-84頁.
- 鄧思穎 2003 「粵語「先」的句法」第九屆國際粵方言研討會提交論文 (12/22-24 澳門).
- 方小燕 2003 『廣州方言句末語氣助詞』暨南大學出版社:廣州.
- 馮淑儀 2000 「廣州話語氣詞的語法化現象(發言提綱)」紀念王力先生百年誕辰語言學國際學術研討會 (2000年8月14-16日, 北京大學).
- Fung, Roxana Suk Yee. 2000. *Final particles in Standard Cantonese: Semantic extension and pragmatic inference*. PhD Dissertation, Department of East Asian Languages and Literatures, The Ohio State University.
- Gibbons, J. 1980. A tentative Framework for Speech Act Description of the Utterance Particle in Conversational Cantonese. *Linguistics* 18, pp. 763-775.
- 平田昌司主編 1998 『徽州方言研究』(平田昌司・趙日新・劉丹青・馮愛珍・木津祐子・溝口正人著) 好文出版:東京.
- 井上優 1993 「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」——命令文・依頼文を例に——」『研究報告集』14(国立国語研究所), 333-360頁.
- 井上優 1997 「もしもし、切符を落とされましたよ——終助詞「よ」を使うことの意味」『言語』2月号, 62-67頁.
- 井上優・生越直樹・木村英樹 2002 「テンス・アスペクトの比較対照——日本語・朝鮮語・中国語」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, 125-159頁.
- 木村英樹 1982 「テンス・アスペクト——中国語」『講座日本語学 11 外国語との対照』, 19-39頁.
- 木村英樹・森山卓郎 1992 「聞き手情報配慮と文末形式——日中両語を対照して」『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』(大河内康憲編), 3-48頁.
- 木村英樹 1997. 「變化’和’動作」『橋本萬太郎紀念中國語學論集』(余靄芹, 遠藤光暁共編, 内山書店), 185-197頁.
- 木村英樹 2002 「“的”の機能拡張 —— 事物限定から動作限定へ」『現代中国語研究』第4期, 1-13頁.
- 木村英樹 2003 「パネルディスカッション「隣接領域から見た中国語学」」『中国語学』250

- 号, 275-282 頁.
- 工藤浩 2000 「副詞と文の陳述的なタイプ」『モダリティ』(森山卓郎・仁田義雄・工藤浩, 岩波書店), 164-234 頁.
- Kwok, Helen. 1984. *Sentence Particles in Cantonese*. Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
- Law, Sam-po. 1990. *The Syntax and Phonology of Cantonese Sentence-final Particles*. Ph.D.dissertation, Boston University.
- Lee, Thomas Hun-tak and Yiu, Carine. 1998a. Final 'de' and 'ge3' - a nominalization analysis for cleft sentences in Mandarin and Cantonese. Paper presented on December 5-6, 1998, Annual Research Forum of Linguistics Society of Hong Kong.
- Lee, Thomas Hun-tak and Yiu, Carine. 1998b. Focus and Aspect in the Cantonese Final Particle 'lei4'. Paper presented at the 5th Annual Research Forum. YR Chao Center for Chinese Linguistics, UC Berkeley, March 21-22, 1998.
- Lee, Thomas Hun-tak and Law, Ann. 2001. Epistemic Modality and the Acquisition of Cantonese Final Particles, *Issues in East Asian Language acquisition*, pp.37-128.
- 梁仲森 1992 『香港粵語語助詞的研究』 M.A.thesis, Hong Kong University of Polytechnic.
- 李新魁 黄家教 施其生 麥耘 陳定方 1995 『廣州方言研究』 廣東人民出版社:廣州.
- Luke, Kang Kwong. 1990. *Utterance Particles in Cantonese Conversation*. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins.
- Luke, K.K. and Nancarrow, O.T. 1997. Modal Particles in Cantonese: A Corpus-based Study paper presented at the Annual Meeting of the Yuen Ren Society March 24-25 1997, University of Washington.
- 麥耘 1993 「廣州話“先”再分析」『廣州話研究與教學』, 63-73 頁.
- 益岡隆志 1991 『モダリティの文法』 くろしお出版:東京.
- 松木啓子 1999 「語りのディスコース現象——社会行為としての言語使用再考」『言語』 1月号, 40-46 頁.
- Matthews, Stephen and Yip, Virginia. 1994. *Cantonese: A COMPREHENSIVE GRAMMAR*. London and New York : Routledge.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 2002 『モダリティ』 くろしお出版:東京.
- 森山卓郎 1997 「「独り言」をめぐって——思考の言語と伝達の言語」『日本語文法 体系と方法』(川端善明・仁田義雄編, ひつじ書房), 173-188 頁.
- 森山卓郎 1999 「モダリティとイントネーション」『言語』 6月号, 74-79 頁.
- 森山卓郎 2000 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『モダリティ』(森山卓郎・仁

- 田義雄・工藤浩,岩波書店), 3-78 頁.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 2000 『日本語の文法3 モダリティ』:岩波書店
- 西阪仰 1999 「会話分析の練習——相互行為の資源としての言いよどみ」『会話分析への招待』(好井裕明 山田富秋 西阪仰 編), 71-100 頁.
- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房:東京.
- 仁田義雄 1997 「未展開文をめぐって」『日本語文法 体系と方法』(川端善明・仁田義雄 編,ひつじ書房), 1-24 頁.
- 小野秀樹 2001 「“的”のモノ化機能」『現代中国語研究』3, 146-158 頁.
- 歐陽偉豪 2001 「動詞後置成份“住得開”與複句的關係」presented at the Workshop on Cantonese Verbal Complements (粵語補語討論會) April 28, 2001 at 香港理工大學.
- 彭小川 1996a 「廣州話的動態助詞“住”」『漢語方言體貌論文集』(胡明揚主編,江蘇教育出版社:南京), 205-225 頁.
- 彭小川 1996b 「廣州話的動態助詞“咗”」『漢語方言體貌論文集』(胡明揚主編,江蘇教育出版社:南京), 226-239 頁.
- Ricaud, Philippe. 1992. La particule wō et wǒ en cantonais, *Cahiers de Linguistique - Asie orientale* 21-2, pp. 291-308.
- 定延利之 2002 「時間から空間へ?——<空間的分布を表す時間語彙>をめぐって」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, 183-215 頁.
- 佐治圭三 1957 「終助詞の機能」『国語国文』第 26 卷 7 号, 23-31 頁.(『日本語の文法の研究』ひつじ書房 1991 再録,13-25 頁.)
- 坂原茂 1990 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展』vol.3, 29-66 頁.
- 杉村博文 1982 「“是...的”——中国語の「のだ」の文」『講座日本語学 12 外国語との対照』(明治書院:東京), 155-172 頁.
- 田窪行則・金水敏 1997 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』(音声文法研究会 編,くろしお出版), 257-279 頁.
- 上神忠彦 1968 「文末語気助詞類内連用のきまりについて」『中国語学』179 号, 1-8 頁.
- 山森良枝 1997 「終助詞の局所的情報処理機能」『コミュニケーションの自然誌』(谷泰編・新曜社), 130-172 頁.
- Yau, Shun-Chiu. 1980. Sentential Connotations in Cantonese. 『方言』1,35-52 頁.
- Yiu, Yuk-man Carine 2001 *Cantonese Final Particles‘LEI’,‘ZYU’and‘LAA’: An Aspectual Study* Mphil thesis submitted to The Hong Kong University of Science and Technology, Hong Kong.
- 吉川雅之 1997 「香港粵語文学的語言文体」,香港大學中文系七十周年記念研討會發表論文, 香港大學, 1997 年 12 月.
- 吉川雅之 2001 『広東語入門教材 香港粵語[発音]』白帝社:東京.

好井裕明・山田富秋・西阪仰編 1999 『会話分析への招待』世界思想社:京都.

張洪年 1972 『香港粵語語法的研究』香港中文大學:香港.

張宜生 2000 『現代漢語虛詞』華東師範大學出版社:上海.

周小兵 1993 「論廣州話的語序」『廣州話研究與教學』, 101-113 頁.

<例文>

出典を括弧で記していないものは筆者の作例、あるいはネイティブによる作例。

(網):インターネットで検索して得られた例文に適宜ネイティブチェックを入れたもの。

(係咩):《係咩?唔係囉!》謝芷靈 1990 香港周刊出版社:香港

(電影):『香港電影的廣東語』陳敏儀 1995 キネマ旬報社:東京

(香港仔 4):《香港仔日記 4》黃霽 1998 文林社出版:香港

(電影 2):『香港電影的廣東語統集』陳敏儀 1998 キネマ旬報社:東京

(港製):《香港製造》陳果編劇 1999 香港電影編劇家協會:香港.

(閃):《閃令令第六個》少爺占 2000 一本堂:香港

(出租):《新城廣播劇團·出租男人廣播劇文本》何利利 原創故事及文本 2001 新城動力
Multi-Metro Limited:香港

(四):《四點水廣播劇小說》少爺占 2001 商台製作:香港

(好天氣):《好天氣》少爺占 2001 商台製作:香港

(903):《903 巴治奧》林海峰,小克編劇・原著 2002 商台製作:香港

(19):《19 歲--好天氣廣播劇小說續集》少爺占 2002 商台製作:香港